
金髪ロリオ姫様ラノベ

幼怪軍団

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金髪ロリお姫様ラノベ

【Nコード】

N1028T

【作者名】

幼怪軍団

【あらすじ】

現実世界と異世界を行ったり来たりしながら俺TUEEEする異世界ファンタジー小説です。

自サイトにも掲載しております。

<http://sen.sakura.ne.jp/>

ブローグ（前書き）

誤字脱字はご容赦ください。

プロローグ

二月も足早に過ぎ去り段々と暖かくなり始めた三月の頭。週頭から続いた雨脚はようやく遠退き、金曜を迎えた本日は青空に雲一つ無い快晴となった。俺はコートを手放して歩める居心地の良さを全身に感じながら颯爽と登校、正門を潜り抜けて通いなれた教室へと歩みを進める。

時刻は午前八時を少し過ぎた頃合だった。

「おはよう、調子はどうだ？」

「あ、ああ、いいんじゃないの？」

朝、教室で仲の良い友人に声を掛けて席に着く。そろそろ中学も卒業間近となって、自然と自らの浮き足立つが分かる。勢いも良く荷物を降ろして、鞆に詰めた教科書の類を手早く机の中へと移し変える。

「おはよー」

今は登校に差し当たり一番教室が雑多となる時間帯。

俺より間髪置かずに教室のドアから見知った友人が入って来る。

「おう、おはよー！」

それに元気良く声を返しつつ、俺は辺りをぐるり見回した。

目に付いたのは教室を同じくする中でも取り分け仲の良い友人、富川勇人である。机の周りに友達を集めて、何やら先日発売されたばかりのゲームについて楽しげに話をしていた。それは俺も現在、少ない月の小遣いを前に購入を考えている期待の一作である。

ならば混じって一緒に語らない手は無い。

「あ、それってボラクエの話？ やっぱ面白い？」

それとなく語りながら一団へと歩み寄る。

「……ん？」

「ああ、浩二か……」

面々が俺に気づいてこちらへ視線をやる。

「最近、本当に広告が増えたよな。やっぱり買い？」

富川の周囲には四人のクラスメイトが集まっていた。このクラスではゲームの類に熱心な連中であって、同じくゲーム好きな自分は特に顔を会わせる機会の多い友人達である。一緒に話す話題も八割がゲームに関わるものだ。

「ああ、買いじゃね？ っていうか、買ってないのお前だけじゃないか？」

「あれ？ そうだったけ？」

「この間には俺も買ったし、もう持ってない奴はいなくね？」

机を囲む一人が淡々と答えてくれた。

そして、それとは別に傍らでは熱いゲーム談義が展開されている。

「っていつか、あれは間違いなく打撃で攻めるべきだろ」

「いや、でも武器が弱くってさあ」

「魔法が殆ど効かないんだよなあ、どうなってんだよ、あいつ」

「マジで？ もうそこまで進めたの？ お前ら本当に毎日ちゃんと寝てるのか!？」

登校から間もない朝だと言うのに、誰も彼も随分と熱心なものだ。これはきつと昨晚の成果の報告会だろう。やはり同作は評判に違わず面白い逸品らしい。俺も購入するべきだろう。今月は無理だけれど、来月の小遣いが手に入ると同時にゲームショップへ駆け込むことを決める。

「最近は一日五時間かな」

「俺は三時間と少し……」

「おいおい、だからって授業中になるんじゃないよ」

「んだよ、偉そうなこと言ってんじゃないよ、お前だって普通に寝てるじゃねえかよ」

「俺は教師に注意されるようなへましねえもん」

「あれは理不尽だ。俺ばかり叱りやがって斉藤の野郎、マジでムカつく」

「あれだけ盛大に鼻をかいてりゃ誰だって怒りたくなるんじゃないかね？」

「そりゃそうだな」

そうして俺の前で語っている皆々は非常に楽しそうである。睡眠時間を削ってまで遊びたいと思うゲームは久しぶりだろう。そう思うと俄然期待をしてしまう。早く小遣いが入らないかと切に願う。親が厳しい性格の持ち主であって、前借は無理なのだ。

「けど、アレは本当にどうやって倒すんだよ？ もう十回は負けるぜ？ 幾ら睡眠時間を削ったって足りやしねえ。そろそろ挫けそうなんですけど……」

「ああ、そうなんだよなあ、そこが分らないんだよなあ」

「十回で挫ける？ 甘い甘い、俺なんてもう二十回は全滅喰らってるし」

「うっわ、それはマジで酷いな……」

「まあ、威張れるような話じゃないけどな」

「う、うるせえよっ！」

ゲーム自体を持っていないので彼等の語る内容は自分にはサッパリである。ただ、そうして話をしている誰も彼もは笑みを絶やさな

いから、きつと、そのゲームはそれだけ面白いものだと分かる。歯を見せてケラケラと笑っている誰も彼もは、目の下に大きなくまを作っているけれど、決して辛そうには思えない。

「やっぱり買うべきかあ」

熱く語り合う友人達の姿に思わず一人ごちてしまう。

本当ならすぐにも買いたいのだけれど、小遣いが足りないのだから仕方がない。一度は母親に掛け合ってみたけれど、それなら父さんに頼みなさいと言われた。父さんに頼めば拳骨を貰うこと請け合いだ。

「だから、そこは魔法じゃなくて武器で叩くんだよ」

「アイツって物理防御が高いから、あんまりダメージが通らなくね？」

「防御力を削って攻撃力を挙げるんだよ、分かってないなあ」

「いや、分かってないのはお前だろ？」

「どうしてだよ？」

「幾ら攻撃力を上げたって無理なもんは無理だって。デフォで物理五割減だぞ？」

そうして話をする皆々はとても楽しそうだ。

ただ、全てはゲームに突っ込んだ内容なので、自分は自然と話題

より遅れてしまう。とりあえず相槌など打ちながら話の流れに乗っていたのだけれど、自然と口から漏れるのは疑問の声だ。

「へえ……、そんな敵がいるんだ？ 最新作は難易度が上がってるの？」

「ああ、かなり難しくなってるんじゃないか？」

「前々作よりも面倒なのか？」

「面倒も面倒、まだ誰も全クリ出来てない。っていうか、そこは属性反射を使って敵の攻撃を回すんだよ。お前等、なんでそんな簡単なことも分らないんだよ。それじゃあラスボスまで全然だぞ？」

「何それっ！ そんなのあるのかっ!？」

「おいおい、そんなことも知らないで次のボスを倒せると思うなよ？」

「ちょっと詳しく教えるよっ!！」

俺が話しかけた相手も色々と言語足りないらしい。こちらの相手も程々に元在った輪の中へと戻っていった。どうやら一回は競い合っつてゲームを進めているらしい。一人突出していたそいつが語り始めると、ワツと沸いたように話の華が大きく咲いた。

「でも、属性反射って敵しか使えない技じゃねえの？」

「だから、それをラーニングして自分のものにするんだよ」

「おお、なるほど、そうだったのかっ！」

「でもアイツが使う属性反射って自分と同じ属性じゃなかったか？全然効かなくね？」

「いや、それがアイツはランダムで自身の属性を闇属性に変化させるから、その時を狙って攻撃を返すと効果は抜群なんだって。何のモーションも無いから普通にやってちゃ気づかないだろうけど」

「おおっ、あれって闇属性になるのかっ！？こりゃ能力判定のスキルは必須だな」

「マジかよっ！？良く気づいたなあ」

「前に俺が判定を取るって言ったとき、お前等は散々馬鹿にしてくれたよなあ？」

「しょ、しょうがねえだろ？まさかこんなことになるとは思わなかったし」

「まあ、属性反射はポイントの使用量が半端無いから気をつけて使うんだな」

「へえ、あれってそんなに使うんだ？」

「マジでやばいよ、それ系のアクセサリ付けてないとすぐに枯渇する」

それ以上、話題に付いて行けそうになかった。

なので仕方なく俺は別に語れる友人を探す事とした。

数歩だけ富川の机から離れて、段々と人口を増しつつある朝の教室を眺める。始業まで残り十分を切れば空いている席の方が少なくなる。耳に届く喧騒も僅かな間に勢いをましていた。

しばらくを眺めて、多少だけ離れた場所に別のまとまりを見つける。

同じく特定の机を中心として、五、六名の生徒からなる集団だ。

このクラスでも特に中心に位置する生徒達の集まりであって、毎日が華やかな話題に溢れている。街の何処に新しい店が出来たとか、昨日の夜は女の子と一緒に遊んだとか、バンドの練習に都合良いスタジオを見つけたとか。多くは中学生なら誰もが食いつく楽しいな会話達である。

「おはよー」

ならば、自分も共に語らない手はない。

それとなく朝の挨拶を口にしつつ彼等の輪へ混じる。

「あ？ ああ、浩二か……」

「何？ 何の話してるの？」

「別に、普通だよ」

近くに立つ一人が気だるげな仕草で振り返り答えてくれた。以前

から思っていたが、彼は朝に弱い体質らしい。俺がホームルーム前に話しかけるといつもこんな具合である。そういうキャラみたいだ。そして、答えてくれた彼の傍らでは、別の友人達が何やら楽しそうに話をしている。

「それで、マジでヤバイの、キスマでいっちゃった」

「ええっ、マジかよっ！ どうしてお前がそこまでいくの!？」

「っていつか、俺にも教えてくれよっ！」

「だって、そんな余裕無かったしー」

皆が困う机に座るのは、このクラスでも取り分け人望に厚く人気の在る男子生徒である。名前は阪部直樹と言う。勿論、その手の条件として顔は頗る優れる。また、小さいながらも親父さんは加工業の社長さんなので、懐事情にも暖かい。加えて、誰にも訳隔てなく接する非の打ち所の無い生徒だった

「何？ 何か用？」

「いや、なんか面白そうな話をしてるなって」

そして、手持ち無沙汰な俺の問いに答えてくれたのが彼である。友達に囲まれた席の中央で椅子に腰掛け、こちらを見つめてくる。天は二物を与えず、とは良く言った言葉だろうが、彼に関してはその限りでないらしい。

「ああ、ちょっと昨日の夜にコイツ等と街に出てね」

「へえ、凄いな。夜の街かぁー」

「まあ、そんだけ」

夜の街へ出るなどは、親が厳しい自分にとって禁忌である。それを平然と行える彼の家庭環境が非常に羨ましかった。だから、自然とテンションも上がって、声も大きく答えてしまう。

「いいなあ、俺も行きたいなあ」

「だったら行けばいいんじゃない？ 夜だと雰囲気変わるぜ？」

「でも、うちって親が厳しくてさあ、門限だから夕食までには家に帰って来いって五月蠅いんだよ。破ると普通に夕食抜きとか言われるし、本当、頭が固くて困るっていうか、なんて言うか」

「門限？ 俺だったら勝手に遊び出かけるけど」

「勝手に出かけるって、それはまた度胸の試される話だな。流石は阪部」

「流石っていうか、別に、それくらい普通じゃね？」

「そ、そうか？」

「お前は小学生かよ」

そうして語ってくれる阪部に感じるのは強烈な憧れだった。そして、彼はそんな俺の心中など知らずして、傍らより上がって届く声

に脇を向いてしまう。勿論、そうして声を掛けたのもまた、クラスでは人気者の一人だった。

「おい、阪部、その女の子、もっと詳しく聞かせろよっ！」

「お前はつきりずるいぞ、どうして俺だけブスを掴まされるんだよっ！」

「あ、ああ、分かった。分かったから、そうかつかするなって」

「お前はいつもそう言って逃げるからなっ！ 今度ばかりは逃がさねえ」

「おう、そのとおり、しっかりと語って貰うからな」

異性の話に盛り上がり声を荒げる一同。それを宥めるように言って、彼は笑顔と共に自らの武勇伝を語ってゆく。要はちょっとした自慢話なのだが、彼を困う誰も彼もは随分と楽しそうに耳を傾けている。そして、それは俺も同じだった。

ただ、どうやら場の誰も夜の街で話題の出来事に居合わせていたらしい。自然と自ら喋る言葉も薄くなって、俺は多く聞くに回る羽目となった。とは言え、自身にとっては非日常の最たるだろう阪部の話は、傍らで耳にしているだけでも破格だった。

そんな具合に、俺は朝のホームルームが始まるまでを談義に興じて過ごした。

その日、何よりも衝撃的だった事実は放課後に伝えられた。

それは机の中へ忘れたノートの一冊を取りに戻った際の出来事である。廊下を進む俺の耳に聞こえたのは、目的とする教室で何やら盛り上がる男女数名の声であった。とても楽しそうに語り合っている様子が音だけで分かる。

一体、放課後の教室で何の話をしているのだろうか、興味を掻き立てた心中を押さえつけて歩を進める。すると、何故だろう。不意に届けられたのは木ノ下浩二という俺の名前だった。

それが妙に気になって、俺は教室まであと数歩といった辺りで足を止める。

すると、然して待つ間もなく、欲するところ明確な言葉が届けられた。

「ぶっちゃけ、浩二、アイツってウザくね？」

「あー、言ってる、マジで言ってる」

「っていつか、馴れ馴れしく話しかけんなって感じだよなー」

「そうそう、なんで呼んでもないのに話に入ってくるのかなあ」

「萎えるんだよね、アイツが入ってくると」

そんな感じだった。

思わず耳を疑る言葉達であった。

「……え？」

誰に言うでも無く疑問の声が漏れた。

けれど、それは非常に小さくて、教室で楽しげに語らう友達の下へ届く事はない。だから、彼等彼女等の話は俺の名前を肴に一層の盛り上がりを見せる。続けられる数多は、全てが同様の方向性を伴っていた。

「アイツ、富川達にも疎まれてるらしいよ」

「そうになると、あれか、実は友達って一人もいないんじゃないかね？」

「なんか駄目なんだよな、アイツって。生理的に駄目？ そんな感じ？」

「あー、分かる分かる。話しかけるとイラつくんだよな」

「自分語りが過ぎるってというか、話題を合わせられないって言うか」

「一緒に話しても全然つまらないんだよねー」

「そう、マジでつまんねー」

なんだか、自分の世界がガラガラと音を立てて壊れた瞬間だった。

耳に届く声の持ち主はクラスでも取り分け目立つ者達のものだ。グループの中で中心的な立ち位置にあったり、頭の良い成績上位者であったり、授業で頻繁に笑いを取っていたりと、いわゆる人気者と呼ばれる者達の集いである。更には他クラスの生徒の声もちらほら聞こえた。

「でも、アイツって全然気づいてないよな」

「本当、鈍感にも程があるよな」

「あれだ、ほら、今度さ、皆の前でお前ウザイって言ってやるつか？」

「うっわ、お前ひでえなあ」

「だって、あんまりしつこく話しかけられると嫌じゃん」

「じゃあほら、こつしようぜ、再来週にある卒業式の日、教室で皆の前で伝えてやるの。記念すべき一日が最悪の一日になるんじゃない？ 式の最中に泣き出しちゃったりしてさ、こつ言ってやるの、お前のは嬉し泣きじゃなくて悲し泣きじゃね？ みたいな」

「キャハハ、それマジでウケるんですけど」

「ひでー、俺だったら次の日から引き籠もるぜ」

「だよな」

「いやいや、俺だったら自殺ものだけ。首つつちゃうよ?」

「そりゃ、阪部だったら絶対に耐えられないだろうな? めちゃ笑えるって」

「もち、当然だってーのっ!」

「っていつか、アイツも良く気がつかないもんだよな」

「本当、どうして毎日学校へ来られるのか、マジで不思議じゃね?」

「あはは、言えてる言えてるー」

気づいた時には忘れ物の存在すら忘れて、その場から静かに駆け出していた。勿論、語るクラスメイト達に姿を見られる訳にはいかない。いや、今は同じ学年の、同じ学校の誰にも見つかってはいけない。

涙が滲む不明瞭な視界を上下に揺らして、俺は帰路を急ぐのだった。

「……………」

廊下を抜けて階段を下る。

再び廊下を走って、昇降口で手早く上履きと下履きを履き替える。

そして、歩む音を気にしなくなって良い屋外では正門まで一気に駆け抜ける。

そこまで進むと、大して運動の得意でない身体はハアハアと息も荒く肩を上下させ始めた。けれど、どうしても足を止めることは出来なかった。校舎へと続く長い坂道を、膝が壊れるのではないかと思うほどに、勢い良く下って行った。

やがて、学校から多少だけ距離を得たところで俺はやっと走るのを止めた。距離にして一キロ近い。これだけの距離を全力で走ったのは数月前の体育で行われたマラソン以来だろう。三月も中頃になり、制服の中は汗に蒸して、額にはじんわりと雫が浮かんでいた。

「……………」

ただ、今はそんな不快感も微塵として気にならない。

通い慣れた通学路をとぼとぼと歩む。

ゆっくりと呼吸を整えながら歩む。

傍らを勢い良く通り過ぎてゆく自動車達の排気音すら、全く気にならなかった。普段なら口元を覆いたくなる、大型トラックが吐き出したどす黒い排ガスを全身に焚きつけられても、何も感じることはなかった。

自分の中の大切なものが失われて思えた。

「……………なんだよ」

今までの中学校三年間が酷く意味の無いものと思えた。

今までの小学校六年間が激しく虚しいものに思えた。

だけど二週間後には卒業式だからと、多少だけ安堵している自分が嫌になる。

歩いていると、時折、同じ学校の制服とすれ違う。それがどうしても耐えられなくて、俺は通学路から外れるよう帰路を取った。普段通る道を迂回して自宅を目指す。同じ校区の生徒が誰も通らないような、小学校の頃に開拓した細い通路を選んで歩みを進める。

ともすれば、平素より遙かに早く自宅へ辿り着いた。

何も考えられなくて、無心のまま足を動かしていたからだろう。気づけば周囲の光景は移り変わっていて、目の前には住み慣れた我が家の姿があった。いつの間にか帰って来たのだろう。そんな阿呆な疑問すら浮かぶほどに周りが見えていなかった。

自宅の玄関を抜けたなら、普段ならばリビングでコップに麦茶の一杯でも汲んで喉を潤す。けれど、今日に限っては一心不乱に自室を目指した。そして、床に鞆を放り出すと、そのまま倒れるようにベッドへと横になった。

「……………」

もう何をどうしたら良いのか分からなくて、酷い風邪でもひいてしまったように頭はぐるぐると回っていた。例えば、絶対に落とせない試験の問題が一つも分からなかったような、そんな抗い難い絶望と悲しみの感覚に身を震わせるのだった。

「……………」

少なくとも自分は友達だと思っていた。

決して深い仲ではなかっただろうけれど、上手くやっていると思っていた。

けれど、それは自分の勝手な勘違いだったらしい。

「なんだよ、だったら、初めからそう言ってくれよ……」

思わず愚痴が口を突いて出た。

手近にあった枕を抱え込んで顔を埋める。汚らしい涙が枕カバーに染みを作って頬を冷たく濡らした。膝を臍へ付けるよう引き付けて身体を丸める。目をきつく閉じて視界を完全に覆う。凄く惨めな気分だった。

「……………」

彼等が憎らしい相手だったら良かった。

けれど、あの場に居合わせた多くは常日頃から羨み憧れ、一部は尊敬すらしていた者達である。そうなりたいと努力する事も多々あった。テレビに映るアイドルではないけれど、それに近い存在だった。

だから、どうしようもなく悲しかった。

「ど、どうすればいいんだよ、こんなの……………」

幾ら考えても答えなんて出やしない。

明日は幸いにして休み。けれど、週が空けてから卒業式までの二週間は普通に学校がある。その間を俺はどうして過ごせば良いのか。まさか、延々と自宅に引き籠もることなんてできない。先の話を盗み聞きしてしまったとクラスメイトに勘付かれる可能性はもとより、両親はそんな不良を認めてくれない。無理矢理にでも学校へ送り出すだろう。抗えば殴られる。

「……………」

どうしたらいい。

そんな疑問ばかりが延々と垂れ流しになり頭の中を溢れさせる。

楽しかった筈の毎日が崩れて、どうしようもない地獄へと突き落とされた気分だった。そして、昨日までの楽しかった日々もまた、自分が知らぬだけで地獄に在ったのだと更に気を滅入らせる。

ああ、どうしよう。

どうしよう。

どうしようもなくて、他に何もする気が起きなくて、だから、自然と身体は眠りに向かう。眼を瞑って、どうしよう、を幾百回と繰り返したところで、俺の意識は段々と暗がり落ちてゆくのだった。

ブローグ（後書き）

誤字脱字はご容赦ください。

第一話（前書き）

誤字脱字はご容赦ください。

第一話

翌朝、自宅前の道路で行われる下水管の埋没工事、そこで働く重機の発する騒音によって目が覚めた。寝起きとしては最低の部類に入るだろう。休日にも関わらずご苦勞なことである。しかも昨日は夕食前の中途半端な時間に睡眠を挟んだことで、夜、眠りに就いたのは日付が代わって大分経ってからのことだった。睡眠時間を合計すれば小一時間少ない程度だけれど、二つに分けた為か明らかに睡眠不足と思える。

「……どうしよう」

ただ、依然として口を突いて出る言葉に変化はない。

よろよろとベッドから起き出してクローゼットへと向かった。

パジャマから普段着に着替えつつ今日の予定を考える。何をしようか。テレビゲームでもしようか。長編漫画でも読み返そうか。将来へ向けて勉強しようか。色々多い浮べたけれど、どれも実行する気になれない。

ちなみに朝食の席は既に終わっている。土曜も休まず働きに出ている父親の為に、僕を除いた家族の誰もが朝の七時には食卓に着くよって、一人だけ遅く起き出した場合は勝手に冷蔵庫を漁って食事を調達する運びとなっている。

けれど、今日は朝の食事さえ億劫に思えて、着替えが済むと俺は再びベッドへと仰向けに横たわった。コンクリート粉碎機の放つ耳

障りな騒音が、唯でさえ不快な気分を否応無く盛り立てる。

「なんで俺だよ、訳分らないって……」

昨晚から愚痴ばかり零している自分が嫌だった。

窓ガラス越しに破壊音を聞きながら、何をするでもなく天井を眺めて過ごす。

週が空けたら自分はどんな顔をして学校へ行けばいいんだろう。もう残り僅かな学生生活を如何にしたら平穩に過ごせるだろう。どうやって彼等の機嫌を伺えば、卒業式の日を穩便に済ましてくれるだろう。

そうしてしばらくを悶々としてしていると、不意に懐かしい思い出が脳裏を過ぎった。

「ああ、そういえば……」

それは小学校入学から間もない頃の記憶である。まだ満足に掛け算も出来なかった歳幼い自分が、今と同じように、例えば両親から叱られて気を滅入らせたりしたとき、どんな風にその後を過ごしていたか。そんな至極埃っぽい記憶である。

当時、俺は自分に気に入らないことがあると、その都度だけ屋根裏部屋に引き籠もって何をするでもなく膝を抱えて過ごしていた。両親に叱られたり、友達と喧嘩したり、理由は色々であったけれど、ことある毎に足を向かわせた覚えがある。

一度、階段から足を滑らせて骨折した以来、両親に上ることを硬

く禁止された屋根裏部屋は、今居る自室の天井から梯子を伝って上ることが出来る。そして、天井付近に硬く封印された梯子もこの歳ならば問題なく手が届く。

意識しなくなつて久しいその姿は、けれど、今も俺の視界の傍らにあつた。

「懐かしいなあ」

ふと蘇つた思い出に僅かな笑みを取り戻して、俺は立ち上がった。

勿論、屋根裏へ登る為である。

過去に聞いた両親の話だと、そこは家を建てて以後、今も倉庫として利用されているらしい。けれど、俺が籠り始める以前も封印された後も、微塵として利用した形跡は見られなかった。階段の上り下りが面倒なのに加えて、庭に別途倉庫があるのが一番の理由だろうか。

勿体無いな、などと思いつつ、天井より連なる梯子を下ろす。

幼い自分でも容易に登れたのだから、今ならば何ら問題は無い。それでも一応、足を滑らせないように気をつけながら、ゆっくりと登った。久しぶりに触れる収納梯子は随分と小さなものに思えた。

天板を開けると、そこは埃だらけだった。

「つえ……」

思わず嫌な声を上げてしまふ。

これでも小さい頃は気にならなかったのだろうか。

今では全く分らない。

「よいしょ……つと」

最後の一段を上りきって床に登り立つ。

すると、然して高くない天井が頭の天辺すれすれの位置にあった。昔はある程度の余裕があったのだけれど、まあ、それだけ自分が成長したのだろうかと妙な感慨に浸る。それは今の傷心に心地良い薬となって染み渡った。

しかし、登ってみたは良いけれど何をしようか。

見渡す限り古ぼけた段ボール箱が数個と、あとは大きめの姿見が置かれているだけだった。あまり倉庫の肩書きに相応しくない光景である。面積自体はかなり広いので、荷物が少ない分だけ閑散として感じられる。きつと、ここまで対象を持ち上げるのが面倒だったのだろう。早々に利用を取り止める決意をした両親の心持が伺える。

「けど、この鏡だけは部屋にあってもいいかもなあ」

唯一、それが何であるか傍目に理解が叶う物品へと近づく。

部屋には手鏡の類しかないので、今後、高校生活を向かえるに当たっては自室に下ろしても良いのではないかと考えた。非常に古めかしい作りをしているけれど、鏡には違いない。それにホームセンター等で買つとそれなりに値の張る品だ。学生身分には丁度良い。

「けど、その前にしっかりと拭かないと母さんに文句を言われそうだなあ……」

多分に漏れず姿見は埃だらけだった。

せめて布でも被せておくと、少し悲しく想いつつ呟いて鏡面を指先で撫でる。

すると、何故だろう。

驚くべきことに鏡面に触れた中指がその内へと吸い込まれたのだ。まるで木の葉でも水面に落ちた風に、暗がりにおいて自身を映す硬い鏡の全面に波紋が広がってゆく。突き刺さった指先には何の抵抗も感じない。

「うおおっ!?!」

慌てて指を引き抜こうとした。

けれど、それは叶わなかった。

「うおおおおおっ!」

どういう理屈による賜物か。俺の身体は強烈な引力を受けて姿見へ引き寄せられる。鏡面にぶつかると思った瞬間、もう目を開けていることは叶わない。恐怖からぎゅっと硬く眼を閉じて、次いで与えられる何かに身を硬くするのだった。

すると、何故か足裏にあった床の感触がふつと唐突にも消え失せ

る。

足っていられないと感じて、何かに捕まろうと必死に腕を動かした。その為に身体はバランスを崩して正面へ倒れ掛かる。必死に振り回される両腕は、しかし、空を切るばかりで何も掴めない。

それが僅か数秒の出来事である。

気づいたとき、俺は何か硬いものに身体の全面を強か打ちつける羽目となった。

「に、人間だとっ!？」

まず耳に届いたのは野太い誰かの叫び声だった。

鈍い痛みを受けて硬く閉ざしていた目を開く。膝と腕、それに額がズキズキと痛んだ。倒れた際に打ちつけたのだろう。階段を踏み外して落下したのに近い感触と衝撃だった。段々と熱を持ち始める患部を擦りつつ、我が身に起きた不思議を確認しようと、ゆっくり上半身を起こすよう首を擡げる。

「姫様、離れてくださいっ！」

「ま、待ちなさい、殺してはなりませんよっ！」

すると、そこは今し方までの屋根裏部屋とは似ても似つかぬ場所であった。

「ちょ、おい、何だよこれ……」

冷たい床は何故か光沢照り返す石作り。見上げた天井は遙か高く頭上数メートル。周囲を見渡せば我が家の敷地面積を上回る広大な開けた空間。立ち並ぶ柱は両腕を回しても足らぬ極太の石柱。そして、多くは良く磨かれてピカピカと美しい光沢を放っている。まるで何処か西洋のお城の内装でも眺めているようだった。

目を閉じる前までの、薄暗く埃っぽい屋根裏部屋は何処へ消えたのか。

「貴様っ！ 何処から侵入したっ!？」

「武器を捨てて腹を床につけろっ！」

「大人しくしなければ身の安全は保障しないっ！」

「えっ？ な、何!？ なんだよおいっ！」

「黙れっ！ 大人しくしろと言うのが聞こえないかっ!？」

「早く両手を床の上へ広げろ、さもなければこの場で切り捨てるぞっ

「！」

そして、何よりも驚くべきは床に倒れ伏した俺へ詰め寄る者達の姿だった。

その者達は時代物の映画でしか見た事の無い槍や剣といった古めかしい凶器を手に迫り来る。その風貌は人間に遠く及ばない。耳元まで裂けた大きな口や、自分を遙か上より見下ろす巨大な体躯、全身を覆う鱗つい鱗。どれをとっても非現実的で、理解の範疇を大きく超えた姿形をしていた。

けれど、その動きは決してきぐるみの類には思えない。皮膚表面の生々しく脈動し、鱗一枚一枚の重なり擦れる様子は、間違っても作り物には再現できない。どんな金の掛かった映画に見る化け物より更に化け物らしい化け物達が群れを成していた。

「ま、な、ちよっと、なんだよ、な、なんなんだよっ!？」

「ええい、五月蠅い、黙れ人間がっ!」

「無駄口を叩くならば即座に叩き切る、大人しくしろっ!」

化け物としか言い様の無い何者かが槍を振るう。

「ひいっ!？」

その切っ先が眉間に向けられた。

慌てて起こしたばかりの腹を床へと這わせる。

周囲は完全に囲まれていた。

人と数えれば良いのか、匹と数えれば良いのか。十数名からなる異形の数々に囲まれて、口からは自然と悲鳴が漏れる。思わず尻を床へ付けたまま後ずさると、その足先はすぐに硬い物へ触れた。

「な、か、鏡………？」

それは俺が今し方に屋根裏部屋で見つけた鏡と同様の品であった。

固い感触とは爪先が姿見の額縁に触れたものらしい。

「おいつ！ 動くなと言ったのが聞こえなかったかつ！？」

「わ、わかりました、わかりましたから刺さないでっ！」

チクリと眉間を針に刺されたような痛みが走る。化け物の一人が構える槍の先が鼻の上に伸びていた。頭上の照明を反射してキラリ光る刃は、それが決して紛い物でないことを伝えてくれた。

「ならば喋るな、動くな、大人しくしろっ！」

「絶対に動くな、不審な動きをしたらば即座に切るっ！」

「は、はい、大人しくしまっ！」

緊張のあまり思わず舌を嚙んでしまっ。

その痛みに耐えながら、俺は我が身に起こった不思議に頭を巡らせるのだった。

周囲を囲っているのはトカゲと人間を足して二で割ったような化け物達である。その数は十匹以上。全員が剣やら槍やらで武装しており、今の状況では逃げ出すことも不可能に近い。

そんな中で唯一の例外があるとすれば、それは彼等の後ろに控えた可愛らしい女の子だろう。頭に角を生やしているあたり化け物には違いない。しかし、周りを囲う化け物トカゲとは違い、他は人間と同様の姿を晒している。

そして、そんな彼女は大層驚いた様子で俺を見つめているのだった。

「姫様、如何致しますかっ!？」

「魔法を唱えられては厄介です。猿轡でも構わせるべきかと」

「その前に手足を縛るべきだと私は考えます」

「いえ、いつそのこと両手両足をもいでしまうのが良いと思います」

少女を守るように構えたトカゲ達が次々と声を上げる。そのどれも非常に物騒な提案であった。そして、そんな彼等の声が向かう先を鑑みるに、どうやら、人間に近い姿の少女はトカゲ達のまとめ役に当たる存在らしい。

本来ならば、ここは何処だ? とか、屋根裏部屋は何処へ消えた? とか悩むべきだろう。しかし、額から垂れる赤い雫を鼻頭に感じては、それも瑣末な疑問として処理されるのだった。

今は化け物トカゲの持つ凶器から逃れるべく脳も含め全てが働いていた。

「待ちなさい、私は召喚主としてその者と話があります」

少女の凜とした声が、天井の高い広間に反響して強く響く。

「で、ですが、姫様、この者は人間、下手に相手をするのは危険です」

「そうですね、前王たるお父上が亡き今、姫様の身に何か遭って国の崩壊です」

「ですが、その者は私の召喚に応じた者です。私達の知る人間とはまた異なった存在かも知れません。特にそのような衣服は私も初めて見ます。縛るにせよ殺すにせよ話を聞いてからでも遅くありません」

「ひ、姫様……」

「私の言うことが聞けませんか？」

「いえ、とんでもない。ご命令のままに」

そうして語る少女は歳幼い外見ながら随分な滑舌の持ち主であった。

腰下まで伸びる長い金髪を靡かせて一步を前に進む。そして、周囲の化け物トカゲが慌てるのに構うことなく言葉を続けた。その姿は姫と呼ばれたとおり、相応、高貴な身分の存在として俺の目にも

映った。

「その者、私はこの者と少し話をします」

「はっ、心得ましたっ！」

「槍を引きなさい。ただし注意を怠ってはなりません、油断は禁物です」

「は、はい、了解しましたっ！」

少女の言葉に応じて、眉間に突きつけられていた槍がゆっくりと離れていく。

周囲のトカゲ達に命令を下しつつ、彼女はゆっくりと俺の下まで歩み寄ってきた。

そうして、互いに二、三メートルだけ離れたところで足が止まる。

俺は床に伏したまま顔を上げて相手を見上げる。対する彼女はその場に立ち止まったまま、睨むでもなく威嚇するでもなく、ジッとこちらを見下ろす。まるで見えない線に繋がれたかのように、目と目が合うのを感じた。

とても綺麗な深い青色の瞳だった。

「尋ねます。貴方は人間で間違いありませんか？」

「は、はい、俺は人間ですっ」

問われて反射的に敬語が飛び出る。

今し方に槍を突き付けられたのが効いていた。

「では、貴方が私の召喚に応じた者なのですか？」

「しよ、召喚つて何ですか？」

けれど、次なる問い掛けには明確な答えを返せなかった。

ただ、年下の少女を相手にしながらも敬語が崩れることはなかった。背後に控えたトカゲの軍団が、隙あらば刺し殺してやろう、そんな風に佇んで思えたからだ。鼻を伝い顎まで垂れた血の一筋が、ぼたりと落ちて小さな赤い点を石床に打つ。

「……召喚を知らないのですか？」

「い、いや、知らないというか、なんとというか……」

俺が答えるに応じて少女の顔に陰りが差す。

「貴方は私の声に応じて現れたのではないのですか？」

「ちよ、ちよつと待ってくださいよ。応じるも何も、どうして自分はここに居るんですか？ 自宅の屋根裏部屋に登った筈なのに、何故にこんなだっ広い場所に居るのか、訳が分らないんですけど」

「……屋根裏部屋？」

「え、ええ、ちよつと色々あつて屋根裏部屋で不貞腐れていたんで

すけど……」

「では、貴方は何故にこの場に居るのですか？」

「それこそ俺の方が知りたいですよ。そもそも、ここは何処なのか、ああ、なにがなにやら訳が分からない。なんでこんな場所に放り出されたのか意味が分からない。っていうか、なんで角が生えてるのか」

「貴方、少しは落ち着いたらどうですか？」

「いや、だって、屋根裏部屋にしまつてあつた鏡に触れた途端、いきなり引き込まれたって言うか、引つ張られたっていうか、気づいたらこれですよ。第一、そちらの方々は何者ですか？　なんか凄く怖いんですけど……」

混乱極まる頭を必死に働かせて矢継ぎ早に言葉を返す。

ともすれば、少女は周囲のトカゲ達を顔を見合わせて何やら渋い表情を浮べる。

「私は外の世界へ助けを求めて召喚の儀を行いました。貴方はそれに応じてこちらへやって来て下さったのではないのですか？」

「しよ、召喚の儀？」

「ええ、外なる世界へ助けを求めて行つたのです」

「助けって、そんな、自分は全然違いますよ」

「……違うのですか？」

「そもそも、助けるって言うなら、むしろ俺の方が色々と助けて貰いたいくらいです。あと、ここは何処なんですか？ まさか屋根裏部屋じゃないですよね？ 妙に広いし、天井とか高いんですけど……」

「では、貴方は何処から来たのですか？」

「い、いきなり何処って言われても……」

「まさか、エトルリアの人間ですか？ それともアティンオキアやペガルモンドといった第三国、若しくは海を隔てて他の大陸を出自とするの人間ですか？」

「いや、あの、どれも知らないんですが……」

「……では、何処の国の民なのですか？」

「それは、まあ、見てのとおり黒髪黒目の黄色人種なんで、日本ですけど……」

「ニホン？」

「は、はい、日本です」

「それは国の名前ですか？ それとも地方や街の名前ですか？」

「え？ そりゃ国の名前に決まってるじゃな……ですけど」

「国の名前なのですか？ 聞かない名前ですな……」

「は、はあっ!?!」

少女の呟きの思わず声を上げてしまう。

それはないだろうと。

「こらっ! 姫様の前で不敬を働くなっ!」

「ひいっ!」

ともすれば槍が翳されて即座にトカゲの化け物から脅された。ずいと近づいた槍の矛先がチクリと頬を刺す。瑣末ながら痛みが身体を支配して、自然と身体がガクガクと震え始める。なんて生理現象。

「まさか、嘘をついているのではありませんね?」

「め、滅相も無い。っていうか、何処からどう見ても日本人ですよ、これっ」

自らを指差して精一杯に主張した。

すると、少女は何やら眉間に指を当てて考える素振りを見せる。

「ふうむ……」

「……………」

日本と聞いて何を悩むことがあるのか。知らない? そんな阿呆な話があるか。第一、彼女自身にしてもこうして日本語で話をして

いる。姿形には疑問が尽きないけれど、その点は間違いない。

しかし、もしも今の状況が悪質な冗談や悪戯でないのだとしたら、このトカゲもどきは如何なる人種として括られるのか。作り物として括ってしまうには妙に生々しい動きをする化け物達である。

「……………」

目の前で展開される摩訶不思議に下らない想像がすすくと育ちゆくのが感じた。

何気なく指先に触れた眉間の傷口は決して嘘偽りでない。ここまで根性の入った悪戯は滅多でないと思う。根も真面目な両親の行いにしては馬鹿げているし、昨日に本心を知った友人等の行いにしては直接的過ぎる。

「あ、あのお……………」

黙ってしまった少女に恐る恐る語りかける。

けれど反応は無い。

何やらブツブツと独り言を呟きつつ床を見つめ顔を伏している。

会話がなくなると居た堪れなくなった。周囲に並び槍や剣を向けるトカゲ達は相変わらずだ。不動のまま睨みを利かせてくれる。化け物の表情になど理解は無い。けれど、敵意があるのだけは伝わってきた。

緊張から大声を張り上げて駆け出したくなる衝動に駆られる。

きつと、滅多刺しにされて終わりだろう。

「あの、できれば色々と説明して貰いたいんだけど……ですけど」

今一度、少女に語りかけてみる。

すると答えたのはまたしても傍らのトカゲだった。

「黙れっ！ 姫様は今考えごとをしていらっしやるのだ、大人しく待てっ！」

「は、はいっ」

再びぐいと槍の矛先を突きつけられて思わず怯む。

せめて立ち上がりたいのだけけれど、この対応を見る限りそれも難しい願いだろう。俺はいつまで冷たい床に寝そべっていれば良いのか。こんな状況下ながら、冷気が伝わり段々と冷え始めた腹の具合が気になって仕方がない。

それからしばらく、少女は物思いに耽っていた。

やがて、続く言葉が返されたのは数分が経ってからのことだった。時計こそ眺めた訳ではないが結構な時間を感じた。それも我が身を置いた場が場なだけに、一分一秒が酷く長いものに感じられた。

「……分かりました」

何が分かったと言うのだろうか。

眩いた少女の視線が再び俺を捉える。

「どうやら、貴方は私達を知らない人間のようですね」

「た、確かに会うのは初めてだと思いますけど……」

「いえ、そういう意味ではありません。一つ確実に確認しておきたかったのです」

そうして語る少女の顔は多少だけ緊張が和らいで思える。

どうやら何かを悟った様子だった。ただ、俺はと言えば一切合財を理解していない。自分ひとりだけ理解するのではなく、俺にも色々と事情を説明して貰いたかった。特にこの城みたいな広間と屋根裏部屋の関係と、二足歩行のトカゲに関わる生命の神秘は気になって仕方がない。

けれど、それを願おうとこちらから口を開こうとしたところで、彼女はふっと他所を向いてしまった。長い金色の髪がきらきらと煌いては宙を流れる。それがあまりに綺麗であって、俺は思わず押し黙ってしまった。

「あ……」

出鼻をくじかれて声が漏らす。

一方で彼女は俺から周りを囲うトカゲ達へと意識を移していた。

俺に背を向ける格好だ。

彼女の対応に応じて、俺を見張る数匹を除いたトカゲ達もまた少女に注目する。

「皆、まさか人間を召喚してしまうとは想定外でした」

そして、彼女は何やら尊大に口を開く。

「この国を救うべく、最後の望みを賭けた一策でした。しかし、どうやらそれもここまでなのです。期待してくれた皆にはすまないが、私と共にこの国で散って貰う羽目となりそうです」

彼女達には彼女達で切羽詰った事情があるらしい。

それに答えるよう周囲からワツと声が上がった。

「ひ、姫様っ、そのようなことを仰らないで下さいっ!」

「そうです、我々はまだ戦えますっ!」

「人間なんぞに我々が負けることなどあつてはなんなのですっ!」

「必ずや姫様に勝利を捧げることを約束いたしますっ!」

それはトカゲ達の咆哮にも似た叫びである。

「ですが、戦況は絶望的です。この期に及んで召喚まで失敗するとは……」

「なんの、それしきのことですけける者など一人もおりませんっ!」

「そうです、姫様ある限り我々は戦えますっ！」

「姫様さえ命じてくだされば我々はいつでも敵の下へ打って出ましょうっ！」

少女の語りに応じてトカゲ達が一斉に声を上げたのである。

「人間共を一匹でも多く倒すのですっ！」

「そうですっ！ 我々はまだ負けてなどいませんっ！」

「皆、そこまで想ってくれているのですか……」

妙に滾る熱気を感じるけれど、それが如何なるものなのかは判断がつかない。そして、彼等は俺を置き去りにして勝手に話を進めてゆく。何か事情があることは伺えるけれど、門外漢にはさっぱりだった。

「……………」

何かなんだか、サッパリ分からない。

「つ、つまり、貴方達化け物勢は、この世界で人間が作る国と戦争をしていると……」

「ええ、そう理解して頂いて構いません」

「それはまた、なんとというか、色々大変だな……ですね」

「全ては人間達が我々を家畜として扱うが故です。これは我々の存亡を賭けて絶対に勝たねばならない戦いなのです。でなければ、この先に待つ未来は人間以外を許さない混沌としたものになるでしょう」

「あ、はい、その辺はさつきも重々説明して貰いました」

トカゲ達の熱が収まった頃合、俺は少女から色々と事情を説明して貰う運びとなった。それは彼女達の存在如何から始まって、ここがどのような場所であるか、何を持ってこの場に俺が居るのか。こちらが疑問に思う限りを一通りである。

「ですから、その戦いに勝つ為に、外部からの助力を願って行った召喚の儀なのです。しかし、こちらの作法に手違いがあったのか、書物に記されていた内容が間違っていたのか、貴方という存在を然したる交渉もなく呼び出していました」

「交渉ですか……」

「本来ならば異世界より巨大な力を持った同胞を呼び出すつもりでした」

「だけど、出てきたのは自分みたいな訳の分らない奴だったと」

「ええ、申し訳ありません」

そうして語る少女は酷く残念そうな顔をしていた。

「人間達は個体の能力こそ極めて脆弱です。肩を並べて競い合えば決して負けることはありません。しかし、その数が我々と比べて圧倒的に多いのです。物量で押されること数年、今の我々は非常に危機的状況にあります」

「ああ、なんかどこかで聞いたような話だな……」

「今もこうして居城に籠り、如何に攻め手へ回るか頭を悩ませているのです」

「なるほど、やっと大凡が理解できたと思う……、思います」

少女の語りはかれこれ数十分に渡った。この場所が如何なるところか、そんな前知識から始まって、自分が呼び出された理由に至るまでである。それが今、ようやく終わろうとしていた。

勿論、幾ら尋ねても日本などと言う国は彼女の口から与えられなかった。

「けど、それって俺はどうなるんですか？」

「貴方を召喚した魔法の効果は恒久的なものです。そちらの鏡面へ触れば元の世界へと帰ることができるでしょう」

「鏡に触ればいいの……んですか？」

「はい、そういった仕組みになっている筈です。こちらも如何せん戦時下として慌しい状況にあります。要らぬ混乱を招かぬ為にも、非常に勝手な話だとは思いますが、そうすることを強く願わせて頂きたい」

そうして語る少女が指差した先には、屋根裏部屋で見つけたものと寸分違わぬ姿見が佇んでいた。

それが置かれた場所は広間の中央、荘厳な石台の上である。先刻には意識が混乱の局地にあった為に気づけなかった。神とか悪魔とか、宗教的な臭いが漂う舞台である。たしかに、召喚の儀、などと言ふ大それた催しには相応しく思える。

「それじゃあ、俺はもう帰ってもいいってことですか？」

「はい、どうぞお帰りください。迷惑をかけしてしまいません」

「あ、いえ、その辺は大丈夫です」

「この召喚の魔法は、貴方以外の者が貴方を伴わずに通り返けることは不可能です。ですから、我々がそちらの世界へ干渉することはできません。安心して帰ってください」

「それって、つまり逆にそっちからこっちへ来ることは無理ってことですよね？」

「はい、その点は嘘偽りありませんから安心して貰って結構です」

「そっか、それは助かった……」

まさか屋根裏部屋がトカゲの軍団に占拠されては敵わない。

「理解していただけましたか？」

「あ、はい、大凡は理解しました……ました」

周りを囲う彼等の警戒は依然として健在である。人間の国と争っているという話だから、俺に対して何某か思うところがあるのだろう。何が弾みとなつて再び襲われるか分らない。彼女の言葉に従つて早々に立ち去るべきだろう。

「じゃあ、そういうことなら俺は家に帰らせて貰います。いいですか？」

「はい、ご足労ありがとうございました」

「いえ、こちらこそ期待に添えなくてすみませんでした」

訳の分らない世界へ片足を突っ込んでしまい一時はどうなるかと心を痛めた。けれど、こうして帰れるのならば良しとする。本来なら文句の一つも言いたいところだけれど、少女の可愛らしい姿を拝めたことで帳消しとした。下手に食い下がってトカゲ達の気に触れては目も当てられない。多少だけスリリングが過ぎるアトラクションであったと、そう自分に言い聞かせて歩みを鏡へ向けた。

そして、数歩を進ませ鏡に触れようかとした時だった。

不意に広間へ爆音が轟いた。

火薬でも爆発させたような鼓膜を痛いほどに揺さぶる音である。

それと同時に地震でも起こった風に足元が揺れる。いや、これは地震そのものに違いない。何かと叫ぶ前に両手は床へ落ちていた。あまりの揺れに立ってられない。揺れになれた島国育ちでも不意にやってくるそれは天敵だった。

「えっ！？ な、何っ！？」

身体はバランスを崩して、自然と落ちた腰に両手両膝を床へ突く。

「な、なんだっ！？ 何事だっ！？」

「何が起こったっ！？ 警備の者は何をしているっ！？」

「爆発かつ！？ 人間の連中の砲撃かつ！？」

「馬鹿なっ、砲撃なんぞで地がここまで揺れて堪るものかつ！」

「では何が起こったというんだっ！」

化け物達も地面が揺れるのは怖いのか、何が起こったのかと声を荒げ慌てふためている。怒声が飛び交い、一度は静まった場が再び喧騒に包まれる。瞬く間に場は混乱を極める。

「何っ！？ 何が起こったんだよっ！？」

勿論、自分もまたその一端をしつかりと担っている。

小学校から都合九年も積み重ねた自身防災訓練は、しかし、いざとなれば微塵と役に立たなかつた。まあ、何にも先んじて潜り込むべき机が無いのだから仕方がない。習慣とは恐ろしいもので、その存在を探してしまったのは内緒だ。

「み、皆の者、落ち着くのですっ！ 落ち着きなさいっ！」

「姫様っ、こちらへ非難をっ！」

「何が起こつたっ！ 警備の兵は何をしているっ！？ 報告は無かつたぞっ！？」

「く、あ、足元が揺れるっ！」

「城はどうなっているっ！？ 城は大丈夫なのかっ！？」

「いや、それよりも結界だっ！ あれが破られてはひとたまりも無いぞっ！」

怒声ばかりが右往左往して、肝心なトカゲ自身は混乱の只中だつた。

「皆、慌ててはいけません、落ち着きなさい」

「姫様っ、姫様はこちらへ避難をっ！」

まともに伝令など走る筈もなく、渦中に幾らか時間が過ぎる。

揺れは数十秒だけ続いた。

そして、揺れが収まったかと思うと、次に訪れたのは何処からともなく届けられた声だった。それも悲鳴交じりの叫び声である。声の主の姿は陰に隠れて見えないが、男のものに思える。いや、人外の化け物に性別を求めるのは意味のない話か。

「敵だあつ！ 人間共が攻めてきやがったつ！！」

「な、なんだとつ！？」

「敵だとつ！？ 守りの結界はどうなっているんだつ！」

「今の揺れで一時的に結界の機能が低下したらしい」

「大変だつ！ 数は少ないが堀を越えて城内への侵入を許してしまつた。姫様の避難を急いでくれつ！ 相手は必死覚悟で攻め入ってきている。急いで大広間周辺の守りを固めるんだつ！」

「城門の防衛で手が空いている者が少ない、この場の人間で何とか対処するんだつ！」

「くつ、なんとしても姫様をお守りするぞつ！」

「扉は閉められるだけ片っ端から封鎖しろつ！ 凍らせても構わんつ！」

トカゲ達が右往左往激しく動き始める。

敵が人間というのが、人間の身分からすればしつくりこない。けれど、敵という単語には危機感を募らせるに十分な重みがあった。全ては先刻に向けられて眉間を裂かれた矛の鋭さが故だろう。

「なんたる失態、父上から預かる城に侵入を許してしまうとは……」

「姫様、今はとにかく非難を急いでください。ここは危険です」

「いや、大将たる私が表に立たずしてどうするのです」

「ですが姫様には他に多く重要な役割がございます。ここで万が一にも怪我を負うようなことがあっては、この国の一大事です」

「くっ……」

「お願いですから今は奥へ下がってください」

俺の存在など既に忘れられて久しく思える混乱っぷりだった。

これ以上の長居は無用だろう。慌てて鏡のある側へと駆け出した。彼等の言う敵の侵入で鏡面が割れてしまっただけは面倒である。今のうちにとっとと暇するべきだろう。俺に出来ることなど何も無いのだ。

「そ、それじゃあ、俺はこれで……」

誰も聞いていないだろうけど、情けなくも小さく呟いて立ち上がる。

けれど、その足を一步踏み出したところで気づいてしまった。

鏡の端に小さく映った人の姿。

それはトカゲとも少女とも異なつて、自分と同じ身体の作りをしていた。つまり、人間。そして、その者はこの場の誰にも気づかれることなく、ひっそりと弓を引いているのである。広間の照明を受けて掛けられた鍔がキラリ色黒く光る。

振り返つた先、その矛先は間違いなく少女を捉えていた。

「お、おいつ！」

自分でも何を考えてそうしたのは分らない。

ただ、危ないと思つた瞬間の出来事である。

鏡へと向かつて床を蹴つた筈の足は、しかし、真逆に立つ少女の下へと駆け出していた。まるでスローモーションのように周囲の光景が遅れて見える。視線の片隅で敵が弓を弾く。撓んだ弦が見えたかと思うと、同時に矢が打ち出された。

「さ、避けるおっ！」

そう叫びながら少女に向かい突進する自分。

一体何を避けると言われたのか、当人にはサツパリだろう。だから、こちらを振り向いた少女の顔には大きな疑問と驚きが浮かんでいた。そして、彼女が答えを得る間も無く俺はその身を腕の内へと収める。

「なっ!?!」

怒りか羞恥か驚愕か、少女の瞳が大きく見開かれる。

けれど彼女に謝罪の言葉を述べている余裕なんて寸毫もない。

どしゅっと耳障りな音が届けられると共に、抗い難い強烈な痛みが俺の腹部を襲った。僅か一瞬の出来事で腹の奥深くに金属の冷たい温度を感じる。口と瞳が自然と大きく見開かれた。

「っ!?!」

目を向ければ脇腹には見事に突き刺さった一本の矢があった。

そして、その身は駆け出した勢いを殺すこと叶わず床へと倒れる。何やら周囲から声上がるものの、痛みによるショックで注意を向けている余裕など無い。ごろごろと冷たい石床の上を、少女を抱えたまま転がった。

「て、敵だっ! 敵が広間に入り込んでいるぞっ!」

「そっちだ、その柱の影から矢が打たれたぞっ!」

「おいっ! さっきの人間が撃たれたぞっ!?!」

「探せっ! 姫様に矢を向けた不届き者を絶対に許すなっ!」

「そっちだ、そっちへ逃げたぞっ!」

「絶対に探して八つ裂きにしろっ! 骨まで喰らってしまえっ!?!」

トカゲ達の必死な声が耳に届く。

そんな怒声の数々を右から左に聞き流しつつ、ジワリジワリと熱を持って疼き始めた傷口よりの痛みで悶絶。過去に経験した如何なる怪我よりも痛くて、痛い痛いと呼ぶ他にはない苦痛があった。

「に、人間っ！ 私を庇ったのですかっ!？」

「ううっ……いう……」

胸中より語りかけてくる少女。けれど、それに答える余裕すらなかった。まるで焼けた火鉢に肉を押し付けられたような、そんな激しい痛みだけがあった。痛いと呼ばず、呻きに留める我慢だけで一杯である。いや、それすら難しい。

「しっかり、しっかりするのです人間っ！」

「姫様、早くこちらへっ！」

「い、いや、しかし、この人間が……」

「ならば一緒に来てください。ここは非常に危険です」

そして、胸に抱いた少女ごと身体の浮く感触に包まれる。

苦悶のまま顔を上げれば、そこにはトカゲの面が迫っていた。硬い鎧の胸当てが肩に当たる。身の丈三メートル近い巨漢は、見た目に違わぬ力を持っていた。何の苦も無く二人を抱き上げる。

「申し訳ありません、不敬とは思いますが、このまま奥へ向かわせて頂きます」

「わ、私が不甲斐無いばかりに……、面倒を掛けてすまない」

「姫様が気にすることではございません、それでは、急ぎます」

「うう……いああ……」

「少し揺れますが、申し訳ありません、我慢してください」

記憶があつたのはその辺りまでであつた。

そこから先は全てが曖昧だ。

トカゲから俺へと視線を移した少女が叫ぶように声を上げる。

「人間、気を失つては駄目です、気を確かに持つのですっ！」

「……………」

少女に何やら語りかけられても言葉を返す事が叶わない。

「眠つては駄目です……、目を閉じ……駄目ですっ！ 死にますよっ！？」

共にトカゲに抱かれながら、少女の必死な形相がすぐ近くにあった。

「このままでは死んでしま……だ……確かに持つのですから……」

…です」

けれど、それもぼやけて段々と明瞭さを失い始める。

「しっかり……、……き………しな………い………さい」

規則的に上下に揺れるトカゲの腕に抱かれて、段々と意識は薄れていった。それは痛みからの解放でもあり、多少だけ嬉しく思いながらも、ああ、自分は死ぬのかと、途方もない絶望もまた感じた。

そして、視界は闇に落ちゆき、やがては全ての感覚が失われた。

「んっ………」

瞼の裏に薄ぼんやりと白いものを感じて意識が戻った。

瞳を開くとそれが明りだと知った。

「おおっ！ 姫様、姫様っ！ 人間が目を覚ましましたぞいっ！」

それと同時に傍らより大きな声が上がった。

「本当ですかっ!?!」

「おおっ、目を覚ましたかっ!」

覚醒して間もない脳味噌はまともに働かない。自分は何故に意識を失って、今どつという状態にあるのか。状況を把握すべく身体をゆつくりと起こす。暗闇になれた眼には差し込む日差しが痛かった。

「じ、ここは……」

溢れんばかり光の奔流を遮るよう眦を指先で擦る。

白いシートが滲む視界に確認できた。

どつやらベッドの上に寝かされているらしい。

「ここはナヴァテアの城の医務室です。人間、怪我の具合は如何ですか?」

「え?」

言われて声の聞こえてきた方へ意識を向ける。

すると、そこには記憶に新しい少女の姿があった。

「ああ、君は……」

黒いワンピースを着た腰下まで届く長い金髪が特徴的な女の子である。年の頃は二桁に届くかどうかといった頃合。目鼻立ちのしっかりとした風貌は、幼い顔立ちの中にも凜とした意思の強さを如実に感じさせる。

たしか、さっきは白いローブのような物を着ていた角のお姫様である。

「私はこの城の主、コージマ・トリスメギストスです」

小島？

「え、あ……、はい、俺は木ノ下浩二っていいいます」

名乗られたからには名乗り返すのが礼儀だろう。

自然と頭を下げた名乗る自分がいた。この辺りは何処までも日本人だと、思わず自らの出身を感じてしまう。

先刻は混乱が勝りまじまじと眺める余裕が無かった。だから、今更ながらこうしてジッと眺めてみると分かる。彼女は随分と可愛らしい少女だった。まるで人に愛されることを前提に作られた人形のように思える。

「先程は身を挺してまで助けて頂いて、本当に、ありがとうございます」

「え、えっと……」

寝ぼけ眼のまま、ぼんやりと定まらない思考を必死に尖らせる。

「大広間で、貴方は私を凶矢より守ってくれました」

「あ、ああ、そういえば……思い出しました」

危うい敬語でそれとなく応じる。

彼女の言葉を受けて、そこで自分が何故にベッドへ横たわる羽目となったのかを思い起こした。そう、阿呆な話もあったもので、目の前の少女を助けようとして自分が矢に打たれてしまったのだ。

「いや、別にそこまで意識した訳じゃないから、気にしなくていいよ……ですよ」

「いいえ、まさか窮地を助けられて気にせずにはいられません」

少女の傍らには依然としてトカゲの化け物が付き添っている。けれど、その眼差しは倒れる前に見たときよりずっと優しい光を帯びて思えた。手にした槍も矛先は完全に天井へ向けられている。どうやら俺に対する警戒を解いて思えた。

ただ、彼が広間に犇いていた何れであるかは分らない。少女くらい人間に近い造詣をしていれば良いのだけれど、まんまトカゲを二足歩行に起こした彼等の風貌では個体の識別など無茶な話だ。

「貴方に庇われていなければ、私は朽ちていたと聞きます」

「そ、それは、まあ、お互いに助かってよかったな……ですね」

「はい。この身を助けて頂いて、本当にありがとうございます」

そうして少女は腰を深く折ると、恭しく礼をするのだった。

艶やかな黄金色の髪が巻く渦の中心に形の良い旋毛が見える。左の耳上より頭部に伸びた角は決して紛い物などでなく、根元よりしっかりと皮膚に張り付いていた。傍目にも確かな質感を感じる。

「ああ、まあ、……どういたしまして」

あまり人に感謝された経験が無かったので返す言葉に躊躇してしまふ。

特に相手が可愛らしい女の子であれば尚更だ。

そして、彼女に追従するよう野太い声が届けられる。

「人間よ、私からも礼を言わせて貰いたい」

「え？」

音源に意識を向ければ、それは彼女の右斜め後ろに静々と付き従ったトカゲの化け物である。鎧兜を身に纏い、槍を手にした彼の姿は広間で見た姿と変わらない。ただ、語る調子は穏やかなものだ。

「姫様を救って頂き、我等国の民も非常に感謝している」

部屋にはそうして語るトカゲの化け物の他、目覚めに声を上げた白衣姿の猿人を思わせる化け物、そして、角を生やした少女の三名がいた。広間にぞろぞろと肩を並べていたトカゲの軍団は見当たらない。まあ、今に居る部屋の規模が大きく劣るので、全てが入る筈

も無いのだけれど。」

「いえ、それはどうも……」

「お前に対する当初の失礼な態度を許し願いたい。このとおりだ」

「あ、は、はい」

身の丈三メートル近い巨漢に頭を下げられて内心慌てる。

全身の鱗より更に纏われた金属製の鎧がガチャガチャと音を立てる。遙か頭上に眺める相手の顔は瞳を閉じて、広間で見た彼等よりは大分温和に思えた。けれど、凶体が凶体なだけあって威圧感は拭えない。

「矢には竜殺しの呪薬が塗られておった。成竜前の姫様があれを身に受けては、きっと無事に済まなかったじゃろう。姫様の健康を預かる儂としても、是非に礼を申し上げたく思う」

「りゅ、竜殺し？」

「良くぞ姫様を助けてくれた。感謝するぞい」

「え、あ、はい、どういたしまして……」

そして、最後には白衣の猿人までもが頭を下げてきた。

その場の誰もが頭を垂れている状況に軽く頭が混乱する。ここまですで改まって人から感謝された経験など過去に一度としてない。どうして良いか分からなくて、俺は両手を必死に振りながら言葉を返し

た。

「でも、ほら、別にそこまで畏まらなくてもいいよ……ですよ」
すると、しばらく黙祷のような何かを続けて一同は顔を上げてくれる。

「けれど、不敬かとは思いますが、これで私は貴方の存在を自分の中で確かなものとして位置づけることができました。人間、やはり貴方は私が知る人間とはまた異なる世界の人間なのでしょう」

「私も初めは人間が我々の盾となるなど自分の目が信じられなかった。しかし、これで先の姫様の言葉にも納得がいく。お前は我々が知るこの世界とは、また別の世界からやって来た人間なのだな」

「そ、そうですか……？」

「私は貴方に助けられて、それを強く理解することができました」

「しかも矢には竜殺しの呪薬。もしも姫様や、その眷属たる我々が目に受けていたら無事には済まなかっただろう。人間であるお前が盾となってくれたおかげで、一切の被害を出さず事無きを得た」

「は、はあ……」

何やら語りだした少女とトカゲを前に俺は何と答えれば良いのか。

「あ、そ、そういえば、俺はどうなったんですか？ 矢に打たれた後とか……」

ふと思い出して自らの脇腹を擦る。

鍼はかなり深い位置まで刺さったものと記憶している。容易には助からないと素人目にも感じられた。慌てて自らの身体を確認すると、治療の為かシャツは脱がされており、腹部には包帯が幾重にもグルグルと巻かれていた。きつと、彼女達が治療してくれたのだからと理解する。

しかし、患部に指先が触れても微塵として痛みは感じなかった。

「あれ、痛くないし……」

「怪我はシルフやウンディーネ、エルフ達の魔法で治療を済ませておる。幸い召喚の儀に備えて近くに控えの者達がおった故、大事には至らずに済んだのじゃ。この分ならば傷跡も然して残らぬと思うぞい」

「ま、魔法ですか……」

「城でも寄り抜きの術者を集めて治療に当たったのじゃから、病後も具合はだいぶ良いじやろう。今のように擦って痛みが無いようなら、もう普通に動いて貰っても構わんと思うのお」

「いや、術者って、そんな……」

それは医者じゃないのだろうか。

「それはとても助かりました。幾ら人間とは言え世界を違える存在です。こちらの勝手な都合で呼び出して、あまつさえ怪我を負わせ、それに加えて身に何か残るようなことがあつては不手際も極み。ガ

ロン、治療をありがとう。他の者にも伝えておいて欲しいです」

「ええ、姫様の言葉、確かに皆の者に伝えておきますぞ」

猿人は妙に人懐っこい笑みを浮かべて少女に応じる。

「な、なんだか良く分からないけど、じゃあ、もう大丈夫なんですか？」

「うむ、治療は完璧じゃ。体内の破片も完全に取り出したし、傷口も完全に塞いである」

「へ、へえ……、そりゃ凄いですね……」

「魔法技術に関して言うなれば、我々は人間に大きく勝るからのお」

素直に俺が関心していると、ガロンと呼ばれた猿人は嬉しそうな表情を浮かべて語ってくれた。生憎、その魔法という単語に混乱しているのだけれど、ちゃんと治療してくれたのだという保障は大きかった。痛みが全く無いのだから、きつと、嘘は言っていないだろう。

「自分が居た世界だと、多分、死んでましたよ、あの怪我」

「ふむ、やはり人間の世界は苦勞が多そうじゃのお」

「まさか寝て起きて気づいたら治ってるとは思わなかったよ……ですよ」

色々と気になる説明もあったけれど、全てが元通りだと言うなら文句はない。あまり気にしても仕方が無いので素直に感心しておく。

自分もまた彼女達の世界がどれだけ不可思議なものか理解し始めていた。

「ともあれ、人間、貴方が無事で良かったです」

「ええ、私も同感です、姫様」

そんな彼に続いて少女とトカゲもうんうんと頷いた。

それには俺も同意である。

「けど、そうになると、俺はもう家に帰っても大丈夫ってことですか？」

「はい、そうですね」

「お前のおかげで姫様は事無きを得て、無事に騒動も治まった」

「そして、忍び込んだ敵は皆の努力によって打ち倒すことができました。城内の哨戒も厳重に行っています。勿論、召喚の鏡も無事です。今度は確実に元の世界へと帰れることを保障します」

「そっか、それは良かった」

広間が揺れた際には鏡が割れたらどうしようかと酷く慌てたものだ。

「本来ならば、貴方の好意に感謝の意を込めて宴を開きたいです」

「う、宴……ですか？」

「はい。ですが、今は私達にそれだけの余裕がありません。どうかその印として代わりにこれを収める限りで容赦して頂けませんか？
このような形ばかりの謝礼となってしまう、申し訳ないですが」

「……え？ 印って？」

そして、語る少女はベッド脇に置かれた卓上より、何やら岩へガラス片がびっしりとこびり付いたような物体を抱き上げる。そして、それを俺に向け差し出してきた。彼女の両手で一抱えほどの代物である。その物々しい外見からして、随分な重量がありそうだ。

視界の隅にあつたそれは、てっきり置物の類だと思っていた。

「な、なんですか？ これ」

「人間達の間ではダイヤモンドと呼ばれている宝石の原石です」

「だ、ダイヤっ!？」

「渦中においては如何な宝といえ食料に勝りません。この城には残る蓄えも侘しく、また街の周囲は人間の軍によって囲われています。このような形での謝礼となってしまう申し訳ありませんが、どうか収めて頂きたいです」

「あ、いや、そんな、ダイヤだなんて大層なものを……」

「これでは足りませんか？」

「め、めめめ、滅相もない。十分です、十分過ぎますっ!」

「そうですか。そう言って頂けると助かります」

反射的に両腕を差し出すと、少女からダイヤモンドの原石だという塊を渡された。それは想像以上にずっしりと重たく、あわやシーツの上に取り落としそうになった。とてもじゃないが長く持っていていられない。

「あの、シーツの上に置いてしまってもいいですか？」

「はい、構いません」

「どうも、すみません」

抱え込むように股座の合間へと置いた。

ダイヤだと言われてもしっくりとこない。まるで博物館のお土産コーナーで売られている巨大な水晶の原石のようだった。けれど、彼女の言葉が本当ならば、その価格はゼロの数に二桁を超えて異なるだろう。

「でも、いいんですか？　こんな大層なものを貰っちゃって……」

「姫様はこの国を率いて下さる古竜にあらせられる。その命を身を挺して救ったのだから、謝礼としては当然だろう。姫様の御身に代えられるものなど、この世を幾ら探しても存在しないのだからな」

「そ、そうですか……」

「このまま宝物庫に眠らせておいても、いずれは攻め入って来るだ

ろう人間共に奪われてしまいます。ならば、という訳ではありませんが、折角ならば貴方に譲りたい。貰って頂けませんか？」

「そういうことなら、まあ、ありがたく貰いま……いえ、頂戴します」

「はい、そう言って頂けると私としても嬉しいです」

今一度だけ二人に頭を下げて頷いた。

正直、貰っても対応に困るのだけれど、今更突っ返すのも申し訳ない。

穏やかな笑みを浮かべる少女に自然とこちらも優しい気持ちになる。

「ところで……」

例の姿見は何処にありますか？　そう尋ねようとした。

家に帰れると分かったのならば早々に帰るべきだろう。

元の世界へ帰る為の姿見は広間にあつた。今居る医務室らしき一室からでは道が分らない。この国は戦時下にあるというのだから、再び問題が起こる前にさっさと立ち去りたかつた。また面倒に巻き込まれては敵わない。弓矢に撃たれるなど論外だ。

けれど、そんな俺の問い掛けは部屋の外より飛び込んできた声に掻き消される。

まさか、また何か面倒事が起こったのかと、自然、身が固くなるのを感じる。

「大変です、姫様あっ！」

ばんと勢い良く扉を開いて筋骨隆々の化け物が部屋に押し入ってきた。

「な、なんっ!？」

その敵つい強面に思わず悲鳴を上げ損ねる。

なんだお前はっ！ と叫びそうになったところで、危機一髪、声を押し留める。

その化け物というのは、身の丈がトカゲの化け物にも増して大きい。五メートル近い巨漢の持ち主だった。隆起した筋肉は深く肉体に影を落とし、両の拳は分厚い鉄板でも容易に打ち抜いてしまいう。肩幅も身の丈に相応で、その全身を囲うには人間が幾人も手を繋ぐ必要があるだろう。加えて、その手には人間の身の丈より更に大きな斧が握られているのだ。並べて見比べればトカゲが可愛く思える。

そして、そんな化け物が必死の形相で少女の下へ駆けてくる。

傍らにはベッドとそこに座る俺が居るのだから、こっちは心臓がバクバクだ。

「食料庫がっ！ 城の食料庫に火をつけられましたっ！」

耳が痛いほどの音量で筋肉お化けが吼える。

「しょ、食料庫に火ですかっ!?!」

「それは本当かつ!?!」

少女とトカゲが驚愕に声を上げる。

「はいっ、今、警備の者で必死に消火に当たっております。ですが、既に半分が灰となってしまいました」

「な、なんてこと……」

「加えまして、なにぶん燃え易いものが多い場所ですから、鎮火にはしばらく時間が掛かりそうです」

筋肉お化けの報告を受けて少女はこの世の終わりを見たかのように愕然と呟いた。

白い肌が更に青白く色を変化させる。

表情の分かり難いトカゲや猿人もまた、同様に深刻な表情を露と感じられた。つい今し方までの穏やかに思えた空気が嘘のようだった。

「そ、それで……、忍び込んだ人間は処分したのですか?」

「はい、それは問題ありません」

「そうですか……、ですが、食料庫が失われたとなると、これは…

……」

「姫様……」

肩を落とす少女の慰めるようトカゲが声も小さく呟く。報告を運んできた筋肉もまた、同じように持ち前の強面を心痛の面持ちへと変化させていた。どうやら、それは非常に深刻な問題らしい。

「このままでは籠城することも叶いませんね……」

「どれだけの食料が燃え残るか、ともかく人を集めて消火を急がせましょう」

トカゲが慌てた様子で部屋の外へと駆け出していく。

「自分もお手伝い致しますっ！」

その後をすぐに筋肉お化けも追った。ズシンズシンとその巨体に似合わぬ俊敏な動きで医務室を後として、二人はすぐに壁の影に隠れて見えなくなる。部屋に残されたのは俺と猿人、そして、消沈の少女である。

「……………」

彼女は視線を床に落として、ただ、呆然としていた。

気を滅入らせているのは猿人もまた同様、何を言うでも無く黙って俯いている。

非常に居た堪れない空間の出来上がりだった。

しばらくを待つてみても状況は変わらない。ただ、部屋の外で着実に喧騒が広がり始めて聞こえる。それは瞬く間に飛び火して、やがては室内にいても室外を飛び交う怒声が鮮明に届くまで至る。今し方に見聞きした食料庫云々の知らせを受けて、この城の者達が右往左往しているのだろう。

「あ、あの……」

その緊張に耐え切れず、恐る恐る俺は少女へ声を掛けた。

「……人間、貴方を面倒に巻き込んでしまいすみませんでした」

「いえ、別に自分は大丈夫ですから……」

すると、少女はポツリ小さな声で応じてくれる。

「これから、この城は慌しくなります」

「し、心中お察し上げます……」

「……ありがとうございます」

教科書の中でしか見たことの無い言葉が口から零れた。自分が言うのと妙に安っぽくて、口にした後で言わなければ良かったと軽い後悔に苛まれる。しかし、他に何といって良いか分からなかった。

「貴方が人間ということ、無条件に敵意を向ける者達もこの城には多いでしょう」

「は、はい……」

「こちらの部屋に姿見鏡を用意してあります」

医務室に設けられた、廊下とは別の方向に側に繋がる扉を少女は指し示す。

「どうぞ、再び面倒に巻き込まれる前に元の世界にお戻りください」

「……分かりました」

そうして語る様子さえ、精一杯に無理を押しして思えた。

多分、見た目が子供だから尚のこと強く感じるのだろう。

「こちら、隣の部屋です」

「は、はい」

歩みだした少女に従いベッドから起き上がる。

今まで眠っていた部屋から扉を一つ抜け、続く一室へ身を移す。

その両手には彼女から譲り受けたばかりの巨大な宝石を抱いている。原石とは言いが、光沢面の露出している部分は多く、そのまま飾っておくだけでも大した調度品だろう。

ただ、彼女は然して苦もなく手にしていたけれど、これが非常に重い。あまり長くは持てないので手にして歩くには非常にしんどい。腕の筋肉を引き攣らせながら、俺は必死になって少女の後を追った。

「どござ……」

「あ、これだ……ですね」

部屋を映つてすぐに目当ての物は見つかった。

「はい、こちらに触れば元の世界へ戻れます」

「なるほど……」

通された一室の中央に姿見は置かれていた。

毛の長い絨毯を敷かれた一室は強く、お城、を想像させる部屋だった。そして、その中央に鎮座するのが自宅の屋根裏部屋で見つけたのと同じ作りの姿見である。こうしてじっくり眺めてみると、ホームセンター等で売っている安物と比べて大きく思える。額縁も金色に輝いてだいぶ値の張りそうな代物だ。

「見送りが少なくて申し訳ありませんが、どうか許してください」

「い、いえ、とんでもない。君だけでも十分ですよ」

「そう言つて頂けると、……助かります」

答える少女の言葉には覇気が微塵も感じられなかった。まるで床に伏した病人のように思える。けれど、それを指摘することはとてもじゃないができなかった。突けば倒れてしまいそうな弱々しさがある。

「そ、それじゃあ、自分が居ても迷惑でしょうから、俺はこれで……」

…」

「はい、どうもありがとうございました」

「……じゃあ、また」

つい普段のくせで、また、などと口にしてしまう。恭しく頭を下げてくれる少女に軽く会釈して、俺は姿見の鏡面へその肩を触れさせた。シャツの生地が硬い筈の鏡面へゆるりと吸い込まれる。

触れるだけで何が起こるのかと緊張に身を硬くする。

すると、数刻前にも感じた強烈な引力に身体を引かれた。かと思えば、次の瞬間には視界が暗転。目の前が真っ暗になる。それと同時に足元に浮遊感が訪れ、やがて、自らを囲う空気の感触が変化した。

「つとおっ!?!」

強烈な貧血にでも襲われた風だった。

しかし、今度は両手に重量のある荷物を持っているので周囲に縋ることも叶わない。なんとか体勢を崩さないよう、立つべき地面が分からぬまま、あやふやな身を垂直に立てようと意識する。

「っ……」

ともすれば、数秒の後に足裏へ固い感触が戻る。

エレベータが指定階に辿り着いたときのような、問答無用で全身

のぐらつく感覚に危ういところで倒れそうになった。それをなんとか踏ん張って持ちこたえる。

「……………」

そして、気づけば俺は誇りっぽい屋根裏部屋の姿見前に立っていた。

その間、僅か数秒の出来事である。

「…………ほ、本当に屋根裏部屋だし」

息を吸い込んだ鼻と口から埃臭い濁った空気が入ってきた。

薄暗くて、閉鎖的な、何処からどう見ても我が家の屋根裏部屋があった。依然として信じられない部分があったけれど、こうして、全ては少女の語ったとおりになった。お城の一室を思わせる名残は微塵も見当たらない。ただ、目の前の姿見だけが同様の姿を晒している。

「夢じゃ、ないよなあ……………」

彼女に貰ったダイヤの化け物だけが、何も変わらず腕に抱かれていた。

第一話（後書き）

誤字脱字はご容赦ください。

第二話（前書き）

誤字脱字はご容赦ください。

第二話

姿見を越えて向こうへ行っていた時間は、こちらの時計で凡そ二時間ほどだった。帰ってきてまず確認したのが、ズボンのポケットに入れっぱなしになっていた携帯電話のディスプレイである。そこに示された時刻と部屋の目覚まし時計とは全く同じ時刻を指し示していた。

「やっぱり、夢じゃないし……」

自室の中央には折りたたみ机が置かれ、その上には角少女に貰った巨大な宝石の塊が乗っかっている。彼女の言葉を信じるならばダイヤモンドだそうだ。正直、夢でも見ていた気分である。

今し方までの出来事が自分にとってどれだけ衝撃的だったかと言えば、一時的にとはいえ、昨晚の放課後に耳とした友人達の語らいすら忘れるほどであった。実際、こうして部屋に帰ってくるまで完全に忘れていた。

「しかし……、どうすればいいんだよ、これ」

ダイヤならば売ってお金にできるだろう。

けれど、これだけ巨大な代物となると何処へ売り払えば良いのか分からない。そもそも普通に買い取って貰えるものなのだろうか？ 下手な店に持っていくても相手にされない気がする。米粒ほどの結晶でも数十万、数百万とする稀少な鉱物である。まさか、こんな巨大な塊が一介の学生の手元にあるとは誰も思わないだろうに。

「……………」

それに凄く重い。

宝石店へ運ぶまでが非常に億劫だった。

正直、台車の類でもなければ運べない。何故に角少女のような小さな子供がほいほいと運んでいたのか疑問が残るほどだ。やはり、角が生えているだけあって、彼女も人外の怪力を保持しているのだろうか。

「……………」

そして、角少女と言えば去り際に見た彼女の顔である。

酷く落ち込んだその様子は妙に強烈なものとして脳裏に残ってしまっていた。伊達に可愛らしくない。目を閉じると鮮明に浮かび上がってくるものだから、なんというか、考え始めるときりが無い。

どうにも胸が苦しかった。

「まあ、これはひとまず部屋の置物になって貰うか」

それっぽく飾っておけば良いだろう。

正直、人様からの貰い物なのですぐに売り払ってしまうのも申し訳ない。もしも本物だと言うなら、このまま静かに我が家で過ごして貰うとしよう。就職したら立派な台座でも買ひ与えてやれば良い。

「よっつ」

あまり動かすのも面倒だし、適当に背の低いラックの上を空けて場所を確保した。重量からして漬物石に使うことも考えた。けれど、これは彼女の国でも宝として扱われているのだから、うちの糠味噌の臭いが染み付いてしまつては申し訳が立たない。却下である。

「んぬう……、よいしょつと」

漫画本の並ぶ棚の上へ無理矢理に設えた。

重量を考えると聊か不安が残る。けれど、他に置く場所もないので当面はこの場所で良いだろう。絶妙な迫力を伴うそれは俺の部屋で明らかに浮いている。しかし、まあ、こればかりは文句を言つても仕方がない。

向こうにあつたときには違和感無く場に溶け込んでいたのに、日本の狭い家屋へ置いた途端に自己主張を激しくする。近いうちに両親から詰問を受けること間違いない。友人からの土産だと言い訳を考えておく。

「けどなあ……」

置物が揺らがぬことを確認して、俺は一息吐くと共にカーペットへ座り込む。

その視線は自然と天井へ向けられた。

「……………」

この一日二日で色々と面倒事が過ぎて、考えるべき事柄が随分量を貯まって感じられた。卒業式まで二週間を残す学校のこと、屋根裏部屋から通じるトカゲ世界のこと。大きく二つだけけれど、それぞれが非常に重い。

特に後者は悩む必要なんて無いのに、何故か自然と悩み始めてしまう自分がいる。

今もそうである。

「食料庫が燃やされてショックって、なんかなあ……」

姿見の中の出来事は凄く他人事に感じる。

けれど、少女の悲しそうな顔だけは妙に身近なものに感じてしまふ。

カーペットの上にごろり横になって、近くにあったクッションを引き寄せ頭を乗せる。そのままの体勢で何気なく脇腹を擦ってみるけれど、包帯の感触がシャツの下から返ってくるだけで、やっぱり痛みは微塵も感じられない。

そのまましばらくごろごろと転がっていると、不意に母親の音が響いて聞こえた。くぐもって聞こえる声の調子からして、階下のリビングから声を張り上げているのだろう。俺の部屋は二階にあるので、上階に直接の用が無いとき、母親はいつもこうして俺を呼びつける。

「浩二ー？ 母さん、ちょっと急な用事で出かけることになったから、お昼ご飯は店屋物を取るなり外で買うなりして済ませてくれな

い？ お金はリビングのテーブルの上に置いておくから

「あー、分かったー！」

「あと、家を出るときはちゃんと鍵を掛けなさいよー？」

「はいはい、それも分かってるよーっ！」

「それと、ガスとか使ったらちゃんと元栓締めるのよー？」

「大丈夫だよーっ！ ガスなんて使わないからーっ！」

「そーお？ じゃあ、母さん行ってくるから、戸締りとか頼んだわよー！」

「あーい、いつてらっしやーい」

部屋の扉越しに大声でやり取りする。一軒家なので特に問題は無い。多少、近所に迷惑をかけてしまっているかもしれないが、割と何処の家も似たり寄ったりなので気にすることはない。

しばらくすると庭から車の走り出す排気音が聞こえてきた。

「っていつか、もう昼になるのかあ……」

起きたのが八時過ぎ。

姿見に吸い込まれたのがそれから十数分後。

カーペットの上に寝転がったまま、勉強机の上に置かれた時計を

眺める。すると、時刻は丁度正午零時を指し示していた。人間とは現金なもので、そうして時間を確認すると腹が減るのを感じた。これはパプロフの犬を笑えない現代人の習慣だと思う。

「まあ、飯でも食べるか」

寝転がったばかりだけれど、多少の空腹に身を起こす。

自室を後としてリビングへ下る。今に伝えられたとおりダイニングテーブルの上には五百円玉が一枚と百円玉が二枚置いてあった。母親がこうして金を渡して自分で昼食を食べると言うことはかなり珍しい。

「何しに行ったんだろ……」

それをズボンへ入れっぱなしとなっていた財布に放り込んで家の後とする。

玄関を開くと、今日もまた憎たらしいほどに良く晴れた青空が待っていた。気温は大して高くないけれど、風がないので割と暖かく感じる。休日以外へと出かけるには良い具合だった。

「……なに食べよう」

せめて昼食のときくらいはと、頭の中にあるもやもやの全てを捨てるよう勤めて意識する。手頃に井モノで済ませようか。それとも少し値は張るがラーメン屋へ向かおうか。はたまた休日だし色気を出して商店街のレストランでランチメニューでも頼んでみようか。そんなことを考えつつ自転車を走らせた。

結局、向かった先は近所の大手牛丼チェーンだった。

駐輪場に自転車を止めて店内へと入る。未だ暖房の効く室内は自転車ですら走ってきた自分には聊か熱く感じられた。とは言え、汗がだくなく流れるほどでもない。足早に空いた席を探す。

良い頃合も手伝って、店内は大勢の客に賑わっていた。休日だと言うに作業服姿の大人も結構な数だけ見られる。自分が滑り込んだ席は、カウンター席に空いた最後の一つだった。

「ふう……」

ペダルをこいで多少だけ疲れた足を椅子に座り休ませる。

けれど、一息ついたのも束の間である。それは視界の片隅に気づいたこの上ない不幸だった。メニューを取ろうと腕を伸ばしたところで、カウンターとは多少だけ離れた四人掛けの席に見知った顔を見つける。

それは阪部とその友人達であった。

相手はこちらが入店した時点で既に気づいていたらしい。阪部の

他にも彼と同じグループの友人達が俺を捉えていた。何やら口元に笑みを浮かべて楽しそうに話をしている。雑多な店内にあってもその声は否応なくこちらへ届けられた。

相手と目が合ってしまったので、仕方なく小さな作り笑いを返す。

「あ、気づいたみたいだぜ？」

「っていつか、相変わらず鈍いよなー」

「そういえば、あいつの家ってこの辺だったっけ？」

「あー、そうだったけ？ 俺は行ったことないから分らねえけど」

「昔、一度だけいったことがあるんだよ、たしか」

そんな何気無いやり取りが伺える。

それだけならまだ良かった。けれど、阪部達が座る席の隣には何故か富川とその仲間の姿まであった。いや、更には阪部や富川のグループとはあまり接点の無いクラスメイト達の顔もちらほら見られる。

合計すれば十数人からなる大所帯だった。

クラスの男子の七割近くが集合している計算になる。

何故に席へ着くまで気づかなかったのか。多分、色々と考えごとをしていた為に回りが見えていなかったのだろう。けれど、それにしたって目を覆いたくなる酷い失態だった。勿論、誰も彼もは私服

姿である。

加えて、その卓上にはまだ料理が一つとして置かれていない。悲しいことに彼等もまた入店してから大して経っていないらしい。彼等が食事を終えて店を後とするまで、まだ随分な時間を必要とすることが伺える。

そして、それまでの間を俺は一人でカウンター席だ。

こんな拷問が今まであつただらうか。

割と声も大きく喋っている奴は差し当たりない会話している。けれど、それとは別の幾人かは、こちらを眺めてつつも何やら近くの席の奴と声も小さく話をしている。勿論、俺の下まで届かない。それも一昨日であつたら全く気にならなかつただらう。けれど、昨晩の出来事を思い起こすと、自然と全てが自分に対する侮蔑であるように感じられた。

そもそも何故にクラスの連中がこの場に集まっているのか。

「……………」

これだけ規模の大きい集まりなのに、自分には一言として声が掛けられない。そんな事実が凄く心に痛かった。こうして現実を突きつけられることで、放課後に聞いた全てが決して嘘や聞き間違いではないのだと理解した。

「す、すみません、豚丼並み盛りで……………」

一刻も早く店を抜け出たくて、カウンターの内側を通りかかっ

た店員に声を掛けて品を注文をする。一度は席に着いておきながら、何も食わずに外へ出られるほど俺の肝は据わっていない。

「……………どうして、俺なんだよ」

知らずそんな呟きが漏れていた。

そして、そんな俺の心中など知る由もなく皆々は楽しそうに話に華を咲かせている。時折、ちらりちらりと視線を向けられるのは、きっと、その話題に自分の身の上が含まれているからだろう。

彼等も表だって露骨な語りをするのではない。むしろ、そうして談笑に花を咲かすクラスメイト達の顔には、何故に俺がそちらへ向かわないのか疑問が浮かんで思えた。多分、勘違いではないと思う。

きっと、昨日までの自分だったら何も考えずに歩み寄り、空席を見つけたのなら食事を共にしてただろうから。けれど、それも事情を聞いてしまった今では絶対にできない。彼等の席へ近づくのが怖い。

また、要らぬ話が耳に届いてしまいそうで。

「……………」

意味もなくズボンのポケットから携帯電話を取り出して弄る。

小遣いを無駄遣いしない為にも、特にゲームの類は入れていない。だから、適当にブラウザを起動して見たくもないウェブページを回って過ごした。映し出される内容なんて、まるで頭に入ってこない。

こんな惨めな気分は初めてだった。

やはり、自分は人として関わり難い人間なのだろうか。

嫌われて当然の性格をしているのだろうか。

知らず何か大きな過ちを繰り返していたのだろうか。

自分は極めて普通の生活をしてきた筈なのに、それは普通じゃなかったのか。

でも、それなら俺の何処がおかしいのか。

もしかしたら、クラスメイトに限らず家族にも疎まれているのではないだろうか。

絶え間なく都合の悪い疑念が浮かび上がる。カコカコと携帯電話のキーを叩く指は勝手に動いて、自分が与り知らぬところで勝手にネットのリンクを巡ってゆく。ほとんど無意識だった。

そして、要らぬ通信料金を重ねること数分の後、地獄にクモの糸が垂らされた。

「おまたせしましたー！」

カウンターを挟んで店員の明るい声が届く。

ハツとして顔を上げると盆に乗った豚丼の姿がある。

「あ……、どうも」

注文した品の名前と共に、湯気の上がる丼が目の前に置かれた。

店内の混雑具合からすれば、想定していた以上に早く届けられた。地獄に仏をみた気分で俺はすぐさま箸を割って手を伸ばす。空腹を装い一息に片付けてしまうつもりだった。長居したくない。

そうして、パキンと音を立て割った箸を豚肉の一切れに伸ばそうとしたとき、不意に聞き覚えのある声が耳に届いた。毎日、必ずと言って良いほど耳にしていた声である。口を開いた瞬間こそ確認できなかつたけれど、音源を間違えることはない。

「っていつか、何で後から来たのにあいつの方が早いんだよ？」

それは富川のグループの一人で、俺が一番仲が良いと思っていた男だった。

普段なら何てことの無い、冗談にも満たない一言として済ましたと思う。

けれど、今の自分にはそれが妙に強く響いて聞こえた。まるで胸を杭で打ちつけられたような、身体が震えそうなほどの衝撃が全身に走った。同じ相手から伝えられる同じ、あいつ、という言葉でも、状況を変えて言えばここまで変わるものかと驚いた。

「……………」

ただ、周りの人間が宥めたのかそれ以上は何も聞こえてこない。

それが逆に俺の傷心を刺激した。

なんて自分はちっぽけで惨めな存在なのか。

そう思わずにはいられなかった。

「くそ……」

憎いのか悲しいのか寂しいのか、色々と感情が混ざり合って自分にも自分の中にあるものが理解できない。ただ、普段より心臓は早く脈打っているし、筋肉痛とは違うズキズキと疼くような痛みが身の内にあった。

「俺だって、別に……」

嫌われないなんて思う筈がない。

これでも友達との関係は良好であるよう頑張ってきた。小遣いが少なかつたり親が厳しかったりしてクラスの友達と話を合わせ難い分だけ、他の誰よりも努力を重ねてきたと思う。

会話をするとき話題が尽きぬよう気を使ったし、何処かへ遊びに行くときは率先して皆を引っ張った。学校生活でも他の奴が嫌がるような仕事だって自ら進んで引き受けたし、試験前には試験内容について教師が語った話をまとめて渡したりしていた。ノートのコピーも同様だ。

けれど、それだけじゃあ足りなかったのだろうか。

まだ自分は皆と同じ位置に立てていないのだろうか。

「……こんなの、全然分らない」

誰にも聞こえぬよう短く呟いて、その鬱憤を晴らすように井へかぶりついた。

食道へ流し込むように米と肉とをかき込む。

然して美味くない四百二十円の豚丼は、今日に限っては何の味も感じられなかった。気持ちの悪い何かが口から入って喉へ落ちていく感触だけがあった。食事を摂っている気がしなかった。

涙が出そうだったけれど、危ういところで堪える。

もしもここで泣いてしまったのなら、きっと、取り返しのつかないことになるだろう。週明けからどんな顔をして学校へ向かえば良いのか。いや、こうして今日に出会ってしまっただけでも辛い。すごく苦しい。

「うっ……」

唇をタレにべとつかせ、頬を米と肉で一杯に膨らませながら考える。

自分は嫌な奴なのだろうか。

自分は邪魔な奴なのだろうか。

自分は何の役にも立てない奴なのだろうか。

「……………」

この三年間は意味の無い時間だったのだろうか。

その前の六年間も意味の無い時間だったのだろうか。

そんなの絶対に嫌なのに。

「……畜生」

別に阪部みたいにクラスのヒーローになれなくても良い。けれど、こんな風に爪弾きにされるような態度を俺は取っていただろうか。いや、そんな筈はないと強く思う。間違いないと精一杯に思う。けど、これだけ思っているのに、今のこれは何だろう。

さっぱり、分からなかった。

そして、思考の堂々巡りを繰り返していると井は瞬く間に膏を減らしていった。元より食の早い自分である。過去に無い勢いでかき込んだ一杯は数分と経たずに胃の中へと収まっていた。

どんなに腹が減っていてもここまで早く食べた記憶は無い。

お腹が痛い。

けれど、それも我慢だった。

「……うっ」

気持ちの悪くなるのを必死に押さえて、目の前に注がれた風味の無い冷茶を乱暴に飲み干す。口の中に残った脂っこい感触を無理矢

理に飲み込む。そして、コップを卓上に下ろしたその手で伝票を手
に取った。

勿論、すぐに席を立つ。

脇目に伺うと、阪部達の席には丁度今に品が届いていた。

「……………」

その姿を最後に一度だけちらり横目に確認する。

彼等がこちらを嘲笑っているように感じた。

俺は逃げるように店を後とした。

「くそっ……………」

からからと音を立てて店舗で入り口に備えられた鐘が鳴る。

そして、あとは脇目も振らず逃げるように家へ帰った。

まだ三月だと言うに、汗水を垂らしてペダルをこいで全力疾走だ
った。行きに必要とした時間の半分もかからず自宅まで辿り着いた。
過去最高の記録だったけれど、何の感慨も無かった。ただ無心でペ
ダルをこいで、気づいたら家が目の前にあった。そんな感じだった。

この三年間を世話になった自転車は、愛着を殺して庭に乗り捨て
た。

母親が留守なのを良いことに、玄関の戸を大きな音と共に叩き閉

めて自室へと駆け込む。そして、汗を拭うことすら忘れてベッドへと転がり込んだ。ハアハアと息を荒くしながら身体を横たえた。

こんな自分、一昨日には想像できなかった。

「なんだよ、畜生っ！ 畜生おっ！」

身体に熱が籠ったせいも、矛先の定まらない怒りが身の内に溢れていた。

悔しくて、悲しくて、卑しくて、自分が許せなかった。

本当はもっと楽しくやっている筈なのに。中学三年の三月という最高に遊べる時期なのに。クラスメイトだって大勢集まって楽しくやっている今なのに。どうして自分だけこんな目に遭わなければならないのか。

そんなに俺は性格が悪いのだろうか。

今までの苦勞はなんだったのだろうか。

皆は友達じゃなかったのだろうか。

「……………」

何もかもが疑わしくて、世界の全てが敵に回ったような錯覚を覚えた。

いつか本で読んだ記憶がある。中学生という年頃の子供は非常に多感で情緒不安定なのと言う。下らないことにも一喜一憂して、

場合によっては自ら死んでしまう者も、決して少なくないのだと言
う。

ならば、今のこれがそうなのだろうか。

「……知らない、何がどうなってるのかサツパリだ」

呟いてぼふつと枕へ顔を落とした。

口や鼻から吐き出された豚丼の嫌な臭いが枕カバーに染みて顔全
体にまみれた。

色々と最悪だった。

「……………」

それから、しばらくをそうして何をするでもなく身体を横たえて
いた。

時計など確認しなかったので明確な時間は分らない。ただ、結構
な時間をそうしていたと思えた。一時間は経たずとも数十分は経過
したのでなかるうか。少なくとも、延々とつつ伏せていたことで首
の周りが痛む程度には続けていた。

いじけていた。

そんな俺が身を起こしたのは、傍らより届いた妙な音の為だった。

ミシリと、何か、非常に良くない音が聞こえた。

「……………あ？」

身体を起こして音の聞こえてきた方へ目を向ける。

すると、そこにあっただのは今日から増えた部屋の置物である。

「あ……………」

なんとなく理解した。

慌てて立ち上がり棚の上からそいつを退ける。

すると、彼を支えていた棚の天板は見事に凹んでしまっていた。

巨大な宝石塊の底部分には凹凸があつて、それが千九百八十円の安物を割っていた。耐久性に乏しい木屑から作られた木板には過ぎた代物であつたらしい。

「つたく、どうするんだよこれ……………」

いじけていたかと思えば、今度は慌てる。

岩の塊を抱いたまま、きよろきよろと部屋を見渡す。すると、割と近いところに週刊誌を幾冊が見つけた。見栄えは悪くなるが背に腹は代えられず、他に手も無いので足先に引き寄せる。

なんとか棚の上に雑誌を並べて、そこへ再び置物を戻して一件落着だ。

「はあ……………」

無駄に苦勞した気分だった。

あの少女も大層な代物を送ってくれたものである。金持ちにはどうだか知らないけれど、凡人には過ぎた礼である気がしてならない。気持ちは非常に嬉しくあるけれど、実益を語るとなると話はまた別だった。

「しかし、お礼ねえ……」

目の前に鎮座する巨大な宝石を眺めて何気なく呟く。

思い返されたのは、やはり去り際に見た彼女の絶望に染まる顔である。

「……………」

そればかりが繰り返し脳裏に浮かぶ。

何故だろう、どうしても放っておけないのだ。

「……食料庫、だっけ」

最後に齎された向こう側の問題を思い出す。

この後、彼女達はどのようなのだろうか。大広間で聞いた話ではかなり以前より兵糧攻めにあっているのだと言う。きっと、食料庫が狙われたのもその一環だろう。効果のほどは少女やトカゲ達の様子から良く理解できる。

「……………」

今頃、彼女達は何をやっているのだろう。

やはり今後の食い扶持を巡って頭を悩ませているのだろうか。それとも、再び敵に襲われて既に城は渦中にあるのだろうか。何れにしても、自室で考えているだけでは到底答えなど得られない。

「まあ、こうして眺めている分には綺麗、なんだけどな……」

窓から差し込む陽光を反射して、置物はキラキラと輝いていた。その姿を眺めていると、どうにもジツとしていられなくなる。眩い鏡面反射は少女の艶やかな長い黄金色の髪の毛を想起させる。

「や、やっぱり、貰いっぱなしは良くないよな……」

別に二度と戻って来れない訳ではないのだ。

危険を感じたのなら即座に逃げてくれば良いのだ。

「……よし」

短く呟いて決心を固める。

それは身の内に籠った嫌な熱を全て吐き出す為に。

それは今後を気持ち良く過ごす為に。

俺は再び鏡の世界へ向かわんと、久しく触っていなかった勉強機の引き出しを漁り始める。そして、目的のものが見つかったのは、それから小一時間が経ってからのことであった。

「それで兄ちゃん、本当に全部ここに置いてちゃってええんかい？」

「ええ、お願いします」

「なんや、自宅で商売でも始めるつもりか？」

「商売とは少し違うけど、まあ……、大凡はそんな感じですよ」

「その歳で思い切ったことをするもんだねえ？ まあ、こつちとしちゃあ懐が潤って嬉しい限りだけどさ。ああ、でも、ここで下ろしちゃったらもう返品は勘弁してくれよ？ 袋が汚れるし傷つくから」

「はい、その辺は承知してる……ますから」

俺は目の前の軽トラに乗せられた荷物をしげしげと眺める。会話の相手は車両の持ち主であり、また、乗せてきた荷物の販売主である。自ら買い付けたとは言え、その光景は圧巻だった。

荷物は一袋三十キロの米袋である。

それが合計で二十袋だけ荷台に乗せられていた。

締めて三十万の買い物である。俺が自身の財布から支払った額としては生まれて一番だろう。ちなみに、その財源を確保するに当たっては、小学校入学以来のお年玉や小遣いの積み立てやらで貯めた貯金を全額引き出した。気分は街灯募金に諭吉を与える傷心のリーマンに同じくある。

「分かったよ、そんじゃあ下ろすとするかい。ああ、兄ちゃんも手伝ってくれないか？ 流石にこれだけの荷物を一人で下ろすのは骨だ。手伝ってくれたら一袋余分にオマケしてやるから」

「本当ですか？」

「ああ、実はそう頼もうと思って積んできたんだよ」

「そついうことだったら、是非ともお願いします」

「ほんじゃま、儂が荷台から下ろすから、兄ちゃんはそれを運んでくれんかね」

「分かりました。よろしくお願いします」

軽トラックは道路脇へ庭に接するよう止められている。

荷台に乗った米屋の親父さんがそれを次々に芝生へと下ろしていく。俺は下ろされた荷袋を片っ端から庭へと並べていった。三十キロの二十袋とはかなりの分量であって、今日ほど自宅の庭をありがたく思ったことはない。荷を持って数歩を歩くだけ済むのは、作業への決意の敷居を数段だけ低くしていた。

ただ、それでも米袋は重かった。

少女から貰った宝石の塊とどっこいどっこいと言った具合か。

作業は黙々と続けられて、三十分ほどで全ての荷物は庭に整列される運びとなった。その頃には俺も米屋の親父さんも汗だくで、額の汗をシャツに拭うので必死だった。今日は汗ばかりかいている。

そして、支払いを済ませた俺は米屋を見送り、次いで自室上の屋根裏部屋から姿見を庭まで下ろす作業に移った。絶対に鏡面を割らぬよう、細心の注意を払っての作業だった。絶対に鏡面へ触れぬよう全面に布を被せて、その機能を確かめてからの荷下ろしである。米袋を運ぶよりも苦勞した。

鏡は物置の中へ設置して誰にも傍目には家人にも見つからぬよう配慮してある。万が一にも破損しないよう固定も完璧。そして、買付けたばかりの米袋は掘っ立て小屋の前にして綺麗に整列済みだ。これならテナポ良く運び入れることができるだろう。

「よしっ！」

午後三時を少し回った頃合、必要なものは庭に全て揃った。

姿見を潜るに当たって衣類は一緒に向こう側へと飛ばされた。向かう方向は逆だけれど、少女からのお土産もまた同様である。ならば米袋だって同じだろう。そう考えて、俺は目の前に並べた食料の一袋を両手に持つ。

相手は三十キロなので持ち上げていられるのは僅かな間だ。

しかし、姿見を抜ける間だけならば十分だろう。

また、背中には他に用意した雑品を詰め込むリュックが背負われている。全体の重量としてはかなりのものだろう。体重が二倍近くに増えた感覚がある。これが九十キロの世界かと思わず感慨だ。

「行くぞ……」

プルプルと震える腕に鞭打ちながら、俺はその肩を鏡面へと触れさせた。

やはり触れる瞬間は緊張するもので身を硬くする。

すると、例によつて強烈な引力に身体を引かれた。瞬く間に視界が暗転。目の前が闇に包まれる。同時に地面が急に消失してしまった風に足元へ浮遊感が訪れる。次いで、自らを囲う大気の気温や湿度が急激に変化した。鏡の世界はこちらの世界より少しだけ気温湿度共に低いみたいだ。

「とつ……」

やがて、数秒と経たず足裏に固い感触が戻る。それは薄い金属板でできた物置小屋の床とは異なり、自重を力強く支える石床の固く冷たい反発である。前回ののように転ばないよう慌ててバランスを取った。

暗転を挟む視界の変化は貧血にも似ている。熱い湯の溜まった浴槽から勢い良く上がったとき、血流の変化により視界が暗くなる感覚だ。そして、与えられた闇が晴れたとき、目の前には数刻前に訪れたばかりの一室がたしかに広がっていた。姿見が置かれた部屋

に変化は無い。

「よし……」

二度目の移動は帰宅に同じく立ったまま行えた。

コツは掴んだような気がする。

姿見が手の平が痺れるのを感じて、何はともあれ両手に抱えていた袋をどさりと床へ置いた。部屋には誰も居なかった。流石に数時間経っているので、少女も場所を移したのだろう。

では、猿人はどうだろうか。

「すみませーん」

隣の医務室へ続く扉を軽くノックする。

すると、なんじゃあ？ という耳に新しい声と共に近づいてくる足音があった。大人しくそれを待っていると、やがて向こうから扉は開かれて、白衣を着た猿の化け物が顔を覗かせたのだった。

「おお？ おぬしは先刻の人間ではないか？」

「あ、ああ、そうだよ……ですよ」

至近距離で眺めるその姿は、やはり、すぐには慣れないものである。

思わず一步を後ずさりそうになった。

「なんじゃ、どうしたんじゃ？ まさか忘れ物でもしたかの？」

「いや、そういう訳じゃなくて、ほら、あの子にお土産を貰ったままこっちは何も返せなかったから、代わりの物を持ってきたんですよ。そう大したものじゃないけど、良かったら呼んできて貰えませんか？」

「そっちの世界の土産とな？」

「ほら、食料庫が焼かれたとか何とか、そんな話を聞いたから……」

「というと、食べ物かのお？」

俺が言うと猿人は興味を引かれたのか話に食い付いてきた。

「大したものじゃないけど、そっちの不足分の足しになれば良いと思ってる」

「ふむ……」

「ああ、忙しいようだったら勝手に置いて行くけど、それでもいい？」

「いや、分かった。しばしここで待っているが良いぞ」

「呼んできてくれますか？」

「約束はできんが、とりあえず、姫様に話だけはおしてみよう」

「よかった。どうもありがとうございます」

化け物トカゲと違って猿人は割と話の分かる相手のようだった。そう長くない考慮の後に彼は頷く。そして、絶対にこの部屋から出るでないぞと念を押して、医務室より何処かへ向かっていった。

それから一人、姿見の部屋で待つこと十数分。

やっぱり忙しそうだし無理だったかなと諦め始めた頃合になって、今度は逆に医務室の側から扉がコンコンと叩かれた。はい、と言葉を返せば、すぐに扉は開かれる。ともすれば、そこにはトカゲと猿人を伴う先の少女があった。

「あ、どうも、忙しいところを何度もごめ……すみません」

「自分の世界に帰ったのではなかったのですか？」

「いや、まあ、帰ったには帰ったんですけど、お土産のお返しとかしたほうがいかなって思って、これ、大したものじゃないけど貰ってくださいませんか？」

そうして自分の隣に置いた大きな米袋を指差す。

「……それは何ですか？」

「俺の世界の主食です。米って言うんですけど」

「米？ それはこちらの世界の人間が言う米と同じものですか？」

「え、えっと……、これくらいの小さな粒上の穀物で、水で煮て柔

らくくして食べるんですが、こっちの世界の米ってどんなものですか？」

と言うか、先刻のダイヤもそうだったけれど、全く同じ響きの単語があることに驚きを隠せない昨今である。そもそも何故に世界すら異なる化け物達と言葉を交わすことができるのか。いつか明らかとしたい疑問である。

「なるほど、ならば同様の品だと考えて良さそうですね」

「そ、そうですか。こっちにも同じものがあって良かった」

リュックの中身は必要無さそうだ。

「ですが、それを運ぶ為にまたわざわざやって来たのですか？」

「え、ええ、まあ、帰り際に食料庫が燃やされたとか物騒な話を聞いたんで、少しでも足しになればと思って持ってきたんですけど、邪魔だったですか？」

「いえ、決してそんなことはありません。袋の中を見ても良いですか？」

「あ、どうぞどうぞ」

少女が米袋へと歩み寄る。

護衛だろつトカゲも一緒に寄ってくる。

ついでに猿人も気になるのか付いて来た。

三十キ口用のそれは一般的なスーパーで市販されている米のそれとは異なり、厚手の紙袋で作られている。その口の部分を縛る堅牢な紙紐を解いて、俺は彼女達の目に触れるよう中身を晒して見せた。

「どうですか？」

クパアと広げた先にある白い粒々を少女の前に向ける。

「はい、たしかに米ですね」

「混じり物がないとは、なかなか綺麗な米ですね、姫様」

「ええ、私もそう思います」

それを前にして少女とトカゲは軽く所感を交わしてみせる。

「こんな具合なんですけど、これ、食べて貰えますか？」

「はい、その心遣いうれしく思います」

少女が米袋から俺に向き直る。

その表情はこちらを後としたときよりだいぶマシになって思えた。

「貴方の言葉通り、城の食料庫は人間の手によって焼かれてしまいました。加えて、街の周囲は人間に囲まれており、満足に作物を育てることすら叶いません。ですから、こうして食料を頂けるのは非常に嬉しいです」

「そ、そうですね、やはり大変な状況なんですね……」

「ええ、ですから、貴方もこれ以上は無闇にこちらの世界へやってくるのは止めた方が良いでしょう。城の者は誰も気が立っています。人間である貴方を見たのなら、多くは問答無用で襲い掛かってくるでしょう」

「ま、マジですか!？」

「事情を知っている者は極僅かです。ですから、不用意に立ち入らないほうが良いと私は思います。好意でやって来てくれた貴方にこう言うのは失礼かもしれませんが、その身を大事に思うなら、これ以上はこちらに出入りしないほうが良いかと……」

「な、なるほど……」

真剣な表情で語る少女の言葉を前に、これは出過ぎた真似だったろうかと肩身が狭くなる。もしかしたら、自分が友人達に嫌われた理由も、こういった勝手な好意の押し付けが原因だったのではなからうか。そんな風に思った。

「善意でやって来てくれた貴方には感謝します。ただ、姿見にしても必ず人目に触れない場所に置かれているとは限りませんから、これ以上の行き来は止めた方が良く、私は思います」

「……そうですね」

「人間、お前の我々に対する思いは私も非常に良いものだと感じている。姫様もお前の身を気遣り仰っているのだ。それを理解できるのなら、これ以降は無闇にこちらへ足を踏み入れるでない」

「わ、分かりました。そうさせて貰います」

少し悲しくなったけれど、この身の安全には代えられない。

大人しく従って首を縦に振った。

「それじゃあ、せめて向こうに用意した分だけでも受け取ってもらえませんか？ 勢いに任せて準備してしまったので、自分一人では処理しきれない量が残っているんですよ。これ以上は迷惑を掛けませんから」

「ん？ まだあるのか？」

「ええ、これと同じのがあと二十袋ほど……」

米屋へ足を運んだ際の勢いは少女達の話聞いて急激に萎えた。

トカゲの問いに意気消沈しつつ庭に並んだ米袋の数を返す。

まさかあのまま庭に放置する訳にもいかない。母親が帰ってきたらまず間違いなく問題になるだろう。そして、貯金の全てを使い果たしたと答えたのなら、今晚は家から締め出されてもおかしくない。父親には拳骨を喰らうだろう。だから、なんとしても家族に見つかる前に処理しなければならぬ。

さて、少女達が頷いてくれなかったらどうしよう。

そんな風に考えていると、かなり驚いた様子でトカゲが問い返してきた。

「に、二十袋もあるのか？」

「さつき、この町には数千人が住んでいると聞いたんで、持ち金の限り買い込んだんですよ。それでも大した足しにはならないかも知れないけど、せめて町の人達の一食分の食事くらいにはなりませんか？」

三十キロの米袋が二一袋あるので、仮に人口が五千人であつたらば、一人頭百二十六グラムだけ分配できる。米屋の専門用語では一号弱といったところだ。化け物達が一度に食べる分量がどの程度かは知らない。けれど、まあ、多少の助けにはなるのでないかと考えた次第である。

「やっぱり、それじゃお腹の足しにもならないですか？」

図体のデカイ化け物を思うと、やはり、意味のない行いだつたろうか。

ダイヤのお礼にしてはちつばけな感が否めない。

けれど、高校入学を来年度に迎える自分にとっては精一杯の仕事だった。と言うか、勢い任せに買い付けてしまったけれど、貯金を全て失ってしまったって、親にはなんといい訳をすれば良いのか。赤い羽根募金に参加したとでも語っておこうか。

「こ、これと同じ量をあと二十も、たった数刻で用意したのですか？」

「本当はもう少し用意したかったんですけど、これ以上はお金がな

くて無理でした」

少し申し訳ない気分になって、はははと軽く笑みを返す。

けれど、そんな俺に少女達は愛想笑いすら浮べてくれずに、ただ、何やら驚いた様子でこちらを見つめているだけだった。もしかして、また何か自分は地雷を踏んでしまったのだろうか。昨晚からの情緒不安定も手伝って、とても危うい気分になる。

「おぬし、もしかしてかなりの金持ちか？」

「え？」

不意に猿人が問い掛けてきた。

「これだけの米を、この僅かな時間で用意するとは大したものじゃ」

「いや、別に俺の家は大して裕福でもないですよ」

「本当かえ？」

「え、ええ、むしろ中流階級より少し下のほうにあって、母親なんかは俺にかかる学費やら、住宅のローンやらで毎日色々と苦労している感じです。簡単に言つと平民って言葉がしっくりくると思っけど……」

「と言つと、なんじゃ、まさか、おぬしの世界では誰もがそれだけの米を容易に用意できるのか？ それもこの短時間で」

「流石に二十袋も一度に買うような奴は滅多にいないけど、ある程

度の蓄えさえ払えば用意する分には問題ないと思うよ。これで大体、一般的な人間の稼ぎの一月と半分くらいの額だから……ですから」

猿人の問いに父親の月給を思い起こしつつ答える。

「なんと……」

すると、少女達は何やら大層驚いた様子で声を上げるのだった。

「そ、それは凄い世界ですね……」

「平民の子供の手で、これだけの米を用意できる世界があるのか?!?!」

三者ともグツとこちらを食い入るよう見つめてくる。

「ま、まあ、ある程度の蓄えがある子供なら……」

頭上より見下ろしてくるギョロリとしたトカゲの瞳、皺深く厳つい猿の顔、化け物達から目一杯に見つめられて、思わず返す言葉に詰まった。足は知らず一歩後ろへと退いている。少女に限っては可愛らしく思えるが、それも他の二つのせいでプラスマイナスゼロといった具合だ。

「だから、その、持って来てもいいですか? 庭に放置したままなので、親の目に見つかる前に場所を移したいんですよ。勝手にやったことだから、このまま放っておくと叱られてしまうというか、何というか……」

たじたじと身を引きながら語らなくても良いことまで語ってしま

う。すると、こちらの心中が伝わったのか、少女とトカゲ、それに猿人はこちらから一步を退くと、互いに向き合って何やら小さく頷きあう。

「姫様、これは……」

「はい、きっと私も同じことを考えています」

「これはチャンスだと思えますぞ」

語らずとも意思の疎通が叶うのだろうか。

「あ、あの……」

どうにも置いてきぼりが過ぎる自分の身の上が悲しくて恐る恐る声を掛ける。

すると、再びこちらを向き直った少女が今までとは多少だけ声調を変えて語りかけてきた。その眼差しは随分と真剣なものだ。思わず、彼等の意図を知らぬこちらまで背筋を糺してしまうほどである。

「人間、貴方にお願ひがあります」

な、なんですか？

そう答えた俺に彼女達は奇想天外な話を持ちかけてきた。

少女の願いとは言葉にすれば至って単純なものだった。

姿見を挟んで俺の世界から食料を買い付けて欲しいのだからと言う。

「な、なるほど……」

答える俺の前には姿見の向こうから運び込んだ米袋がずらりと並んでいる。こちらからの強い願いもあって、早々に庭の荷物を運び込ませて貰ったのだ。その全てに中身がちゃんと入っていることは、既に彼女達全員に確認して貰った。そして、ともすれば彼女の願いはより強固なものとなった。

ちなみに、残る米袋に関しては、物は試しにと全てを縄で数珠繋ぎにして、それを片手に鏡面へ触れることで運び入れた。どうやら直接に自分が持ち上げていなくても、それとなく持っている状況下であれば一緒にやって来てくれるらしい。不思議なものである。

「勿論、宝庫より十分な謝礼はします。だから、どうかお願いできませんか？」

そうして語る少女の眼差しは必死だった。

可愛らしい彼女の切実な瞳に見つめられては、まさか嫌だとは嘘でも言えまい。

「そ、それなら、まあ、自分に叶つかぎりなら喜んで手伝つ……います」

「本当ですかっ！？」

割と表情の変化に薄い少女の顔にピアと華が咲いた。

「ただ、なんというか、先立つものが乏しいので、その辺をどうにかしないと……」

「それは当然、我々が用意します」

「でも、こつちの世界ってお金とか違わくないですか？」

「人間、貴方の世界では金や銀、プラチナは希少価値がありますか？」

「あー、うん、銀は微妙だけど金とプラチナはそれなりの値段で売れると思う」

「それは食料と比べてどの程度の価値がありますか？」

「それは、どうだろう……。金の延べ棒が一本三百万とか聞いた話があるから、えっと、純度にもよるだろうけど、これくらいの金があれば、ここに並んだ米をあと十回くらい運び込めるんじゃないかな。多分」

以前にテレビの鑑定番組で見た金塊を両手で描きつつ答える。

「すると、そちらの世界では随分と金の価値が高いようですね」

「そ、そうなの?」

「ええ、こちらの世界の二倍から三倍くらいです」

「なるほど」

「食料を買い付けて貰えるなら、こちらからお渡しする金の半分は貴方の手に残して貰って構いません。ですから、しばらくの間だけでも食料を恵んで貰えませんか? よろしくお願いします」

そうして、少女は深々と頭を下げるのだった。

「人間、私からもどうか頼む。このとおりだ」

「儂からもじゃ、どうか姫様の頼みを聞いてくれんかの」

彼女の傍らに立ち並ぶトカゲと猿人も同様である。

そして、そこまで強く願われてしまつては断れない。

どうせ今は中学三年の三月、受験も終えて時間ばかりが有り余っている。加えて、一緒に遊ぶ友達も一人としていない。それならば人助に、いや、化け物助けに一肌脱ぐのも吝かでない。というか、ここまで関わってしまったては無碍にするなど絶対にできない。

「そういうことだったら、できる限り協力する……します」

「本当ですか?」

「ええ、向こうに居ても他にやることもないし」

「人間、貴方に感謝します」

一度顔を上げた少女が再び頭を下げて、更に深々と礼をくれた。

長い金髪がゆらり揺れて、形の良い旋毛が露となる。

そんな彼女の姿を眺めていると、なんだか、もの凄くむず痒い気分になった。

ここまで強く他者から意識を向けられた経験など過去になかった。いや、割と近い位置にある家族からは、それ相応のものを貰っているかもしれない。けれど、一歩でも家を出たのなら、誰も彼もは俺など然して意識などしてくれない。

そう、今にして思えば教室でも、自分はかなり空気に近い立場にあった気がする。

「あ、でも、少しだけ問題があるかも……」

少し現実的な目で眺めて、少女の提案に幾つか面倒を見つける。

「なんででしょうか？」

「流石にそれだけの荷物を一人で運ぶのは大変かなあ、とか」

ここにある米袋にしても、トラックから荷を降ろし、次いで数メートルを運ぶ作業に三十分強を必要とした。同じような繰り返しを考えたのなら、それはかなり時間を食う作業だろう。

「それでしたら、こちらの世界からオーガを数名共に向けましょう」

「お、オーガ？」

「はい、貴方も医務室で一度は見ていると思うのですが」

「それって、まさか、あの筋骨隆々の妙に大きな彼を指してるんですか？」

「多分、その理解で間違っていないと思います」

脳裏に思い浮かんだのは身長五メートル近い大男の姿である。まさか、あのような化け物を共に連れて行ったのでは、食料を買い込むどころの話でない。人目につくや否や警察を呼ばれてしまつたろう。

「ま、待つてください。それだけは駄目です」

「何故ですか？」

「こつちの世界には彼みたいな巨大なはいないんですよ。だから、手伝い云々の前に大変な騒ぎになっちゃいますから。下手をすれば国に連れて行かれて戻ってこれなくなりますよ」

「……そちらの世界に、オーガは存在しないのですか？」

「オーガっていつか、貴方みたいな角の生えた女性も、そちらの鱗の生えた兵士さんみたいな方も居ません。いや、そもそも、地上をこうして二足歩行で歩き回ってるのは人間くらいなものです」

「……人間しかいないのですか？」

「厳密には違うかもしれないけど、まあ、そう認識して貰って間違いないと思います」

「なるほど、それはまた、とても変わった世界ですね」

「俺からするとこちらの世界の方が激しく変って思えますけど……」

「そうですか？」

「え、ええ……。まあ、お互い様だと思います」

都合数時間だけ顔を合わせた仲だけけれど、依然としてトカゲ顔や猿顔は馴染まない。例のオーガとやらに至っては、叶うなら二度とお会いしたくない。この世界の人間はこんな化け物を相手によく戦争など決意したものだ。しかも、その原因は人間と彼等との一方的な奴隷関係にあるのだと言っから驚きだ。開いた口が塞がらない。むしろ逆の方が自然な気がする。どうやったら、こんな魑魅魍魎達を鎖に繋いでおくことができるのか。この世界の人間は俺の世界の人間とは性能が違うのだろうか。

「しかし、そうなると下手に手伝いを共にすることは難しいですね」

「せめて、こう、もう少し人の姿に近ければ言い訳もできるんですけど」

「人に近い姿ですか……」

「姫様、それでしたらエルフ達に頼んでみては如何でしょうか？
力仕事を任せるには聊か頼りありませんが、人間と比較してはよほど丈夫にできています。それに外見も多少耳が長い程度です」

「なるほど、エルフですか」

「たしかに彼等の人間嫌いを思うと難しいかもしれませんが、ですが、姫様の願いならば決して無碍にはできないでしょう。それに事情は彼等の明日にも関わるのですから、きつと頷いてくれる筈です」

「……そうですね、頼んでみることにしましょう」

「エルフ？」

「ええ、あとで適当な者を呼び出しておきます。それを貴方に確認して貰って、叶うようでしたら手伝いとしてください。城内に居る者で、できる限り人間に姿形の近い者を探してみます」

「そういうことだったら、まあ、良く分からないけどお願いします」

「いえ、こちらから頼み込んだのですから、願われるまでもなく当然です」

そうして語る少女は、今までも強く感じていたのだけれど、決して外見や年齢に相応の人格とは思えなかった。これも一国を預かる姫様としての素養だろうか。先刻こそ頼りなくも感じたけれど、今は非常に凛々しく思える。

「ところで、その、この後って自分はどうすればいいですか？」

とりあえず当面の目的は達成した訳だが。

「時間の方は大丈夫ですか？」

「あ、はい、どうだろ、ちょっと待って……」

「はい」

今更ながら時刻が気になり、ズボンのポケットから携帯電話を取り出す。二つ折りの筐体をパチンと開けば、ディスプレイには午後四時半との表示がなされていた。思っていたよりも時間が経っていた。

とは言え、夕食まではあと二、三時間ほど余裕がある。

「あと少しくらいなら付き合えますけど、他に何か用とかがありますか？」

「それでしたら、必要となる費用の受け渡しや、買い付けて貰いたい食料の細かな説明をしたいのですが構いませんか？ 流石に口頭で伝えるには難しい話だと思いますので、詳細を書きとめようかと」

「ああ、そういうことなら全然大丈夫だよ……ですよ」

「では、私と一緒に来てくれませんか？ 城の者にも貴方を紹介したいです。その姿は人間そのものですから、間違っても我々の身内に貴方が撃たれるような事態は防がねばなりません」

「そ、それはたしかに重要ですね」

俺も化け物に襲われて死ぬなどごめんである。

「大広間での出来事を見ていた者達は大勢いますから、そこまで困難を極めるとは思いません。ですから、どうか肩の力を抜いて接しやってみてください。多くは初めて見る姿かと思いますが、誰も根は良い者達です」

「分かりました」

「それではこちらです、どうぞ」

「あ、はい」

「ラウド、万が一に備えて、貴方はしっかりと彼を守ってください」

「はっ、心得ております」

そんな具合に俺は夕食までの時間を彼女の城で過ごすこととなった。

彼女やトカゲ、猿人は一緒に食卓を囲ってはどうかと持ちかけてきたけれど、その辺りは家庭の事情で無理だと断らせて貰った。門限を守らないと小遣いを減らされてしまうのだから仕方がない。

翌日、俺は鏡の世界から少女より助力を得ることに成功した。

こちらの手伝いに回ってくれたのはエルフを名乗る女性二人だった。どちらもまだ十代前半を思わせる風貌の持ち主だ。何故に力仕事を前提として若い女性なのかと言えば、男性は兵役についており人手が足りなかったのだと言う。ちなみに、二人とも妙に可愛い。

「これは、ここで良いのですか？」

「そう、しっかりと倒れないように固定して欲しい」

「はい、分かりました」

「ところで、君達に一つ頼みがあるんだけど、どっちでもいいから一人、ここで姿見を見張っていて貰えないかな？ もし万が一にもこれに何かがあると、君達も向こう側に帰れなくなるし」

「では、私とその任に就かせて頂きます」

「それでは私が貴方と共に食料の買出しに向かわせて頂きます」

「あ、ああ、よろしく頼む……みます」

そんなこんなで物置に仕舞ってあった姿見を庭先に置いて、今から食料の買出しへ向かおうという魂胆であった。ああ、ついでに少女から貰った金塊も日本円に換金しなければならない。

「じゃあ、早速、出発ということだ」

「はい」

少女の片割れ、銀髪ロングの彼女を連れて家を後とする。もう一人の金髪ショートな彼女は留守番である。二人を預かった身の上として、姿見は必ずや守らなければならないのだ。店舗から自宅まではトラックで運んで貰う予定なので、彼女達の役割としては、荷下ろしに付き合っ貰えさえすれば他はどうでも良かった。

一人を共にしたのは二人からの強い意見である。俺が誰も見ていないのを良いことに不正をするのではないか。そんな風に疑っていいらしい。まあ、鏡の世界での人間達の所業を思えば仕方ないことかもしれない。なんでもエルフは見た目綺麗な者が多いそうで、男女問わず多く人間に囚われて、色々と良くない仕事に使われているのだと言う。あちらの世界でも人間の性欲は大したものだった。

「あ、こっちだから」

「はい」

家の門を後として、住宅街を二人並んで淡々と歩む。

向かう先は近所の商店街である。そこなら質屋もあるし、米屋から八百屋、肉屋、魚屋と一通りが揃っている。また、大手チェーンでは頼めない配送も行ってくれる。距離も歩いて向かえるだけあって非常に都合が良い。

「……………」

「……………」

時刻は午前十時を多少回った頃合だ。

良い具合に日も昇って、動き始めるには具合の良い気候である。

ただ、幾ら気候に優れても周囲を取り巻く空気はあまり良いものでない。共通の話題もなく、また、彼女達エルフは特に人間を毛嫌いしているという理由あって、出会って今まで交わした会話は非常に少ない。初めて少女から紹介を受けたときは露骨に顔を顰められた。今でこそ俺のことを貴方とは呼んではいるが、それも全ては一国のお姫様である少女から、この人間の言うことをちゃんと聞くように、と重ねて申し付けられているからに他ならない。

まあ、とは言え、自分にとっては貴重な作業員なので我慢である。

「……………」

「……………」

片道一キロ半の距離を何を語るでもなく歩む。

時間になると三十分弱の散歩となるだろう。

かなり可愛らしい彼女だから、一緒に歩いていることに聊か緊張する。けれど、そんな淡い優越の感情も、その顔に張り付いた硬い表情を眺めると萎える。なんだが、テレビドラマに見る古風な軍人でも相手にしている気分だった。

キョロキョロと周囲の様子を伺っているのは物珍しさからか。

そんな彼女を逆に俺は眺めてあれやこれやと勝手な想像を膨らませた。

それからしばらく、アスファルトに固められた路上を歩んでいると、遂に我慢が限界に達したのか不意に声を掛けられた。一体、彼女は何を尋ねてくるのだろうかと少しだけ緊張する。

「あの、少し話をしても良いですか？」

「何？」

「人間、例えば貴方は私達がああ姿見を通して、こちらの世界へ攻めてくるとは考えていないのですか？ そうなれば食料の不足や戦に苦労することも無い。聞いた話、こちらの世界では魔法が存在しないと聞きました」

「あ、ああ……。そういう方法もあるのか」

彼女に言われてなるほどと思った。

同時に、よりによってそんな物騒な提案をされるとは思わなかった。

「貴方を鍵として使えば、時間はかかるだろうが同胞を運ぶのも不可能ではない。そして、私達は貴方の語る飢えのない豊かな土地を手に入れることができるだろう。にも拘らず、その危険性を無視して何故に我々に手を貸す？」

「い、いや、でも、それはそれで難しいと思うけどなあ……」

「魔法を使えぬ人間が我々に勝るとも言うのか？　いくら数が多くとも魔法が使えなければ勝機などありえない。今この場でお前を縛り上げて、こちらの世界を侵略することだって不可能ではない」

「それはそうかもしれないけど、でも、なんていうか、ほら、君達は人間の火砲とか鉄砲とか、そういうのにも随分と苦労してるんだよね？　昨日、お姫様がそんな話をしていたと思うんだけど」

「ああ、だがそれがどうした？　そんなもの空を飛べる者がいれば問題ない」

いつの間にか敬語が消えていた。

よっぽど人間が嫌いなのだろう。語る言葉の端々にも悪意と害意が滲み出て感じられた。そして、少女やトカゲが至って普通に接してくれていた為に、今更ながら彼女達化け物が牙を剥いた場合を想像して恐ろしく思った。

「魔法を使えない人間を殺すなど、赤子の手を捻るようなものだ」
キツと挑むような視線を向けられた。

「そ、そりゃ、たしかに昔はそんな風を上からの力押しが罷り通ったみたいだけど、今の世だとそう簡単にはいかないらしいよ。君達の言う空を飛べる者ってのがどれだけ凄いのか俺は全然知らないけど」

「ほお、何故そう言える？」

「俺も良く知らないけど、こつちだと大砲が凄く進歩してて、最近は大陸を跨いで飛んで来るんだよ。しかも照準は凄く正確で、誤差も数メートルっていう気狂い染みた精度っていう……」

「た、大陸だと？」

「しかも一発で街一つが蒸発する威力らしい。そんなのがあちらこちらに転がってるから、あんまりこつちの世界に野心を抱かない方がいいよ。空を飛んでる大砲の弾を打ち落とす大砲とか、そんなのもあるらしいし」

いつかテレビで見たミサイルを思い起こす。

「……それは嘘で私を脅しているのか？」

「い、いや、別にそんなつもりじゃないよ。第一、実際のところ俺は魔法とか全然分らないから、やってみないと分らないと思う。けど、それをしても双方共に幸せな結果にはならないと思うから、止めた方がいいと思うよ」

「……………」

オークとか、トカゲとか、あんな化け物に襲われるのはごめんである。

「他にも、例えば君達の街を囲っている人間の軍は十万を超える大所帯だと聞いているけど、こつちの世界だと人口十万を超える街なんてそこらじゅうにあるし、世界全体だと百億人以上の人間が住んでるらしいよ。この国だけでも一億人数千万はいるし」

「なっ……」

加えて言うなら、この場で反旗を翻されても非常に困る。

トラックから荷を降ろす手伝いが居なくなってしまう。

「それに人間だって道具を使って空を飛ぶもの。それも最近は君達の言う鉄砲の弾と同じくらいの速さで飛ぶらしいから、幾ら空を飛べる何かがそつちの世界にいても、容易に打倒できるとは思えないよ」

「な、なんだと？ 嘘を並べるのもいい加減にしろっ！」

「いや、本当だよ」

「っ……」

「戦争になると被害は甚大って歴史の教科書にも書いてあったよ。爆弾一つ落として一度に数十万人が死んだとか、百万人以上が怪我を負ったとか。正直、俺には実感の湧かない世界だけだ」

この国も昔はそんな騒ぎの只中にあつたというのだから、歴史とは、世の中とは不思議なものだろう。今の平和な時分に生まれて心の底から良かったと思える。少なくとも鏡の世界に生まれなくて助かった。

「……そんな、人間如きが、まさか」

「できれば、今の話は他の人達にも伝えておいて貰えない？ 君みたいに考えるのが当然の社会だと思うから。ほら、君以外は誰もこ

「うちの世界を見たことがないし、今みたいな話だって何も知らないし」

変に企みを持たれて、その犠牲になどになりたくない。

「わ、我々は人ではない。訂正しろっ！」

「え、あ、ああ、エルフだった、ごめん」

何気無い一言への鋭い突っ込みに小さく頭を下げながら歩みを進める。

謝罪から顔を上げると、何やら彼女は顔を下げてしまっていた。

自分が鏡の世界へ足を踏み入れたときと同様に激しい文化差を感じているのだろう。考えてみれば彼女がこちらの世界へ来た第一号なのである。立場的には自分と全く同じだ。

「……………」

「……………」

それからしばらくを無言で歩いた。

道行く人々は彼女の美貌に引かれてちらりちらりと頻繁に視線を寄越して思える。一人一人は一度や二度でも、それが重なれば結構な数だろう。そんな可愛らしい女性と共に歩いているから、やはり、どうにも居心地が悪かった。

やがて、目的地たる商店街へ辿り着く。

ただ、その商店街というのが実は結構なシャッター街であつて、最近はその姿も少ない。だからこそ営業時間内でも自宅配送等のサービスを受けられるのだけれど、休日だということに人も少なく閑散としている。

「ここで買うのか？」

「そう、一応そのつもり」

短く問われて頷く。

果たして彼女の目にはどんな風に映っているのだろう。

まあ、考えても仕方がないことだ。さつさと買い物が終わらせて家に帰るとしよう。一人置いてきた彼女の相方のことも気になる。今し方に語られたのと同じような策を巡らされては敵わない。

「とりあえず質屋に入って君等の主人から貰った金を日本円に代えるから」

「……分かった、お前に任せる」

彼女の了承を得て商店街を歩む。

幾ら寂れた商店街とはいえ、それまで歩いてきた道路と比較すれば人通りは多い。誰も彼もが連れの綺麗な容貌に注目しているのは明らかだった。やはりこの国で銀髪白人というのは人目を引く。それに関して本人が気分を害していなければ良いが、下手に尋ねて機嫌を損ねるのも嫌だ。仕方なく黙々と歩くことに専念した。

質屋らしい店舗の存在は以前から知っていたけれど利用するのは今日が初めてだ。その見せ前で立ち止まり、肩掛け鞆に突っ込んである金塊を今一度だけ確認。多少緊張した面持ちで自動ドアを抜けた。

いらっしやいませーという掛け声と共にカウンター奥に控えた丸眼鏡の男性がこちらへと顔を向けた。自然とエルフを視界に納めてその顔が多少の驚きに染まる。今朝に彼女と初めて会った自分もまた、同様の顔をしたのだろうか。そう考えると少し恥ずかしい気分になる。

「いらっしやいませ」

「すみません、金つて売れますか？」

エルフさんには斜め後ろに控えて貰い交渉を始める。

「き、金ですか？」

「ええ、これをお願いしたいんですけど……」

そう語りながら鞆より金の延べ棒を取り出した。かなり重かったので、それらを全てカウンターの上に並べ終わると、開放感から文字通り肩の荷が下りて身体が軽くなるのを感じた。

対して、こちらが僅かながら清々しい気分を得たのとは対照的に、店員は随分と驚いた様子で俺が差し出した金塊を前に目を白黒させていた。口をパクパクと開き閉じしながら、何やらカウンターの上と俺の顔とを交互に見比べている。

「これなんです、幾らくらいになりますか？」

「い、いや、お客さん、これどうしたんですか……」

「知り合いからの貰い物なんです、お金に代えたくて……」

「貰い物って、そんな、これだけの金を学生さんがですか？」

「え？」

「ええと、もしかして、そちらの方が持ち主ですか？　お客さん、他所の国の方ですよ？」

驚愕から一変、今度は店員の顔に戸惑いの色が浮べられる。

「いや、彼女には買い物に付き合っただけですけど」

「っていうと、君の名義でこれを売りたいと？」

「そうなんですけど……、もしかして駄目ですか？」

「そりゃあ、君、幾らなんでもこんな怪しいもの買い取れないよ。だって君、学生さんだろう？　歳は幾つなんだい？　というか、これって本物の金なのかい？　まさか悪戯じゃないだろうね？」

「い、いえ、本物の金ですよ」

「しかし、幾らなんでも保護者の同意なしにこんなものを買いとる訳にはいかんよ」

「えっ、そんなんですか？」

店員の言葉にショックを受ける。

そういえば以前にも古本屋で本を売るに際して保護者の印を求められたことがあった。冷静に考えてみれば当然と言えば当然だ。自分みたいな子供がこれだけの金を持ち歩いていること自体おかしい。おいそれと手を出せる筈がない。常識的に考えれば偽物か、若しくは盗品だと考えるのが普通だ。

「何処の誰から貰ったのか、せめてそれくらいは教えてくれないと無理だよ。その上でお母さんなりお父さんなりを連れてきて欲しいね。じゃないとうちじゃあ怖くて手が出せないから」

「え、えっと、学生証とかならありますけど……」

「いや、駄目だよ、そんなもんでポンと数百万を渡せる訳ないだろう」

まさか、この段階で躓くとは思わなかった。

カウンターの先を眺めて思わず呆然としてしまう。

「おい、妙なことをしているが、どうかしたのか？」

そんな俺の変化に気づいたのだろう。後ろに控えていた彼女が語りかけてきた。

「あ、ああ、いや、保護者がいないと買い取って貰えないらしい」

「保護者？」

「こつちの世界じゃあ、自分みたいな子供がこれだけの金を持ち運ぶなんて現実的じゃないんだよ。だから、それを怪しんでこれを偽物とか、盗品とかと考えてるみたいなんだ」

「なるほど、たしかに商売人としてそれは当然だろうな」

「どうしよう、これじゃあ何処へ行っても換金なんてできない」

「ふん、所詮はお前も人間か。随分と読みの甘い行動だったな」

「いや、だって、質屋なんて利用した経験なかったし……」

彼女にまで強く言われて思わず凹んだ。

「ふむ……」

これでは少女との約束を果せない。まさか金で食料を買い付ける訳にはいかない。他に質屋や貴金属店は幾らかあるけれど、他所を回っても然して変らぬ対応を受けることは目に見えている。

「どうしよう……」

「お客さん、そういう訳だから、とりあえずこれは持って帰って貰えないかい？」

「あ、は、はい……」

とどめばかりに店員から金塊を押し返された。

仕方ない、下手に粘って警察に通報されては叶わない。ことが両親にばれたら面倒だし、万が一にも姿見の異常性に気づかれてしまつては、事態はとんでもない大事となつてしまふ。それこそ何がやつて来るが分らない。

「……分かりました」

渋々と金の延べ棒に手をかける。

そんなとき、傍らのエルフが口を開いた。

「おい、確認するがこちらの世界の人間は魔法が全く使えないのだから？」

「え？ あ、ああ、それは間違いないよ」

「ならば、私が幻術をかけて無理矢理に金を買い取らせることができる」

「ま、魔法？」

「勿論、金を渡さずに有り金全てを奪い取ることも可能だが、どうする？」

「ちょ、ちょっと待って、ここでそういうことを言つちや駄目だつてっ！」

「っ……」

慌てて彼女の口元を押さえて下がらせる。

恐る恐る後ろを振り返ると、そこにはこちらを訝しげに眺める店員の姿があった。その手はカウンターの影に置かれているけれど、まさか、警察へ連絡など入れられていなかろうかと背筋に嫌な汗が垂れた。

「っこの、貴様っ！いきなり何をするっ！」

俺の手を払いのけて彼女が吼えた。

「と、当然だろっ！？ そんなことを店員の前で口にしたら警察呼ばれるだろっ！？」

「なんだと？ この世界の人間は我々の言葉が理解できるのかっ！？」

「はあ？ 言葉も何もアンタは普通に日本語を喋ってるでしょうっ！」

「日本語だとっ！？ そんなものを誰が喋っているものか！ 姫様の膝元に集まった我々の公用語は、いつだって由緒正しき古代竜の言語だ。そんな訳の分らない人間の言葉など話すものかっ！」

「だ、だって今もこうして俺と話をしてるじゃないかっ！」

「それはお前が同じ言語を話しているからに決まってるだろうがっ！」

「はあ！？ 俺は生まれてから死ぬまで日本語しか話さないって決

めてるんだよっ！　これの何処が古竜語だよ？　誰が聞いたって立派な日本語だろうっ！？　嘘つくんじゃないよっ！」

訳の分らないことをのたまう彼女に思い切り反論する。

すると、そんな俺の語りに背後から声が掛かる。

「ちょっと、お客さん。もしかして病院から抜け出してきた性質かい？　こう言っちゃ失礼だが、騒ぎを起こすなら他所でやってくれないか。こっちも警察なんて呼びたくないが、面倒事を起こすなら遠慮しないよ？」

「え、あ、そ、そんなことしません。すみません。すぐに出て行きますっ！」

頭を下げ慌てて鞆へ金の延べ棒を収め始める。

相手もかなりこちらを怪しんでいる。警察へ通報するという言葉も決して嘘や威嚇ではないだろう。店員の顔に浮かんだ疑念の眼差しがそう強く思わせた。とんでもない。早く逃げないと。

「いや……、待てよ、分かったぞっ！」

「な、何が分かったんだよ」

エルフさんが何か閃いたらしい。

これ以上の面倒事は勘弁して貰いたい。

「おい、お前は何故に異世界より召喚されておきながら、こうして

何の苦も無く我々と意思疎通が叶うと思う？ まさか、たった数日で古竜の言葉を学んだという訳ではあるまい？」

「はあ？ この期に及んでなんの話だよ」

「それは姫様の召喚魔法が、お前に我々と意思疎通を可能とする何かを与えたからだろう。だからこそ、お前は全く異なる世界に住む我々と会話ができるのだ。考えてみれば当然の帰結だ」

「だ、だったら何だって言うんだよ？」

「私にはお前が古竜語によって、その男へ話しかけているように聞こえた。何を馬鹿なことをしているのかと疑問に思った。対して、その男がお前に語りかける言語は全く理解できないものだった。あまりにも普通に会話をして見えたから、疑問に思ったのだ」

「つまり……、どういうこと？」

「くっ、頭の悪い奴だな。つまり、お前の喋る言葉は少なくとも我々が喋る古竜語を用いる者に対しても、また、お前が元から暮らす世界の者に対しても、意思疎通の道具として有効だと言う話だ」

「ほ、本当なのかつ！？」

「証明は出来ないが、そう考えるのが打倒だと思う」

「そりゃまた、とんでもない話もあったもんだ……」

「要はお前が語れば両方の言葉として周囲に響くということだ」

「……………」

思わず言葉を失う。

「ならば、今一度問う、この者に魔法を掛けて金を買わせることが私にはできる。どうする？ 他に手があるならば身を引くが、そうでないのならば、私は祖国を救う為に我を通させて貰うぞ？」

「ちよ、ちよっと待った。いきなりそんなこと聞かれても……………」

「保護者とやらの同意を得ないで金を売ると、何か後々に問題でも起こるのか？」

「いや、まあ、別に金が偽物だったりしない限り大丈夫だと思うけど……………」

「貴様、まさか姫様より頂戴した品を偽物だと疑っているのか？」

「ち、違うつつ！ 違つからつ！」

「ならば問題あるまい。相手の過失として保護者の同意とやらを済ませてやる。それならば問題あるまい？ 私は早く食料を持ち帰らねばならないんだ。こんなところでグダグダしている暇などないっ！」

そうして語る彼女は妙な迫力があつた。

「そもそも、お前の家の庭に家人が寄り付かぬよう術を張ったのも、元を辿れば同系統の精神感応と結界を合わせた魔法だ。今更になつて使用を躊躇したところで何の意味がある？ こっちは一刻を争う

んだ」

そういえば、少女が語っていたけれど、エルフは人間よりも遙かに強力な魔法の使い手だと言う。その魔法とやらが具体的に何をどこまで起こせるかは分らない。けれど、下手にこの場で抗って、現代社会の仕組みを知らない彼女に刑事事件を起こされては堪らない。高校進学すら取り消されてしまう恐れがある。

「わ、分かった。それでいいから、だからことを荒立てないでくれよ」

「そつだ、初めからそう願っておけば良かったんだ」

俺の譲歩に多少だけ気を良くして彼女が頷く。

まったく、少女もとんだ人員を提供してくれたものである。気づけばシャツの背はぐっしりと汗に濡れていた。凄く嫌な汗だった。きつと、鼻を近づけたのならさぞかし臭うに違いない。

結局、同行人、いや、同行エルフのおかげで金を日本円に代えることができた。

決して無事には言えないが、店先での争いの全ては彼女の魔法とやらで全て無かったことになり、こちらは相手が提示する金額での現金を、相手はこちらが持参した金塊を、それぞれ手にする運びとなった。

もう二度と質屋など行かないと強く思った次第である。

ちなみに少女から渡された金は全てを換金すると日本円で四千万

円になった。

生まれて初めて手にする金額に思わず手元が震えた。勿論、財布には入らなかつたので鞆へと忍ばせた。紙幣らしからぬズツシリとした重さを肩に受けて、自然と軽い興奮状態に入っているのを感じた。歩くに際しては右足と右手が一緒に前に出そうだった。

そんな訳で色々と面倒事はあつたけれど、その後は当初の予定通り、俺と彼女は少女に頼まれた食料品を買って回るこゝとなつた。

流石に主婦の買い物とは一線を賀した量なので、店舗によっては先日の米屋に同じく多分に怪しまれた。けれど、こちらが必要額を現金で提示すると、手の平を返したように誰も彼もは商品を買ってくれた。

米屋の米全部、八百屋の野菜全部、魚屋の魚全部、肉屋の肉全部、もう商店街の商品の全てを買い込む勢いだった。流石にこれだけの買い物を一介の学生が、しかも近所に住まう人間が行えば色々問題が起こる。それを相棒の彼女に相談したところ、便所紙で尻を拭う気軽さで、それぞれ販売に立ち会つた人間の記憶を消してくれた。なんだか、ここまでくると逆に清々しくもある。

また、商店街で買いきれなかつた商品は近くにあるスーパーまで足を伸ばした。商品の持ち帰りは商店街での配送各車に頼み込んで無理矢理に相乗りとさせて貰つた。この辺りはドライバーに男性が多かつたのでエルフの美貌様々、加え魔法の素晴らしさだろう。正直、俺よりもよほど役に立っている。

本当に根こそぎ買い漁つたので、今晚あたりは食材を買えずに苦勞する付近住民の姿を見られるかもしれない。少し申し訳なくもあ

るけれど、化け物たち数千人の生き死にが懸かっているので勘弁して貰いたい。

そして、全ての買い物を買わせて家に帰ると、そこには既に商店街からの配送が到着していた。家には父親と母親が居るのだけれど、例によってエルフの魔法でこちらの企みに気づいた様子は微塵もない。我が家の前にトラックが列を成しているにも拘らず普段どおりの生活を営む両親の姿は少し怖いものがあった。

「ただいまー」

「ただいま帰りました」

最後の便に同乗して帰路を進み、家門を抜けて庭に入る。

すると、金髪ショートのエルフ少女が既に荷運びしていた。トラックを運転してきた店の人間も一緒になって汗を流している。見れば庭には所狭しとダンボールやら巨大な紙袋やらが並べられていた。まるで市場でも開けそうな勢いがある。

「お帰りなさい、荷物は届いていますのですぐにも運び入れがきます」

「これを全部向こうへ運ぶのは大変そうだなあ……」

「人間、貴方は一度に幾十袋の米を運び込んだと聞いています」

「あ、ああ、そういえば紐か何かで繫げば一緒について来るんだっけ」

「そうなのですか？」

「一度実験のつもりでやってみたら上手くいったんだよ。君達だって僕と手を繋いでこっちへ来れたんだから、多分、俺に繋がっていれば問答無用で移動してくれるみたいだよ」

「しかし、その考え方だと、この大地の扱いはどうなるんだ？」

「あ、いや、それはちょっと分らないけど……」

「ふん、考察の甘い男だな。所詮は人間か」

「だって、他に何かある？ 状況を説明できるような理由が」

「大凡はお前が持ち物だと認めているものを共に転移させるのだから」

「っていうと、何？ もしも俺がこの星は俺の物だって思えば一緒に来ちゃうの？」

「ああ、そうなるな」

「怖っ！ すっごい怖っ！」

「まあ、お前にそこまでの力量があるとも思えんがな」

「いや、無くていいよ、そんな恐ろしい話あって堪るもんか」

銀髪という言葉に思わず身震い一つである。

地球がまるまる世界を移るなんて想像ができない。そもそも、この場に置かれた姿見はどうなってしまうのか。宇宙空間にポツンと取り残されるのだろうか。いや、その理論で話を進めれば、最終的には宇宙すら共に鏡の世界へ移せることになる。姿見は何処へ行ってしまふのか。

「……………」

ああ、何が何だか分からなくなりそうだ。

そう考えると銀髪という言葉は言い得て妙に的をいて思えた。

所詮、俺の力量など米や野菜を運ぶのが関の山である。そして、それで本心から十分だと思える。何事も程々が良いのだと昔の偉い人も言っていた。今ならそれが良く理解できる気がする。

質屋で一悶着あった言葉の問題も同じだけれど、きっと、魔法云々に関してはあまり突っ込まない方が身の為だろう。分らないものは分らないまま終わったほうが良いことも多々あると思う。

その後、一通りの作業を終えると時刻は午後六時を回っていた。

「人間、ありがとうございます。まさかこれほどの食料を買い付けて貰えるとは、頼んだ側からしても想像以上のことです。本当に貴方には幾ら感謝してもし足りない。この通り、国の民を代表して礼を致します」

その日、一通りの作業は終了したあとで俺は鏡の世界の城に呼び出された。

購入した食料品の全ては城内にしっかりと収められている。鮮度の落ちやすい生物の類は城下を回って今日中に町民へと配給するらしい。また、米なども今晚から食卓に出回るのだと聞いた。

「いや、滅多にできない経験でしたから、こっちも楽しかったです」

「具の無いスープばかりで飢えを凌いでいた民達も、きっと、今回の振る舞いには泣いて喜ぶでしょう。籠城を始めて長いですが、これでまた我々は戦う気力を得ることが出来ます」

少女の手には俺が渡した金塊の清算書と食料品を購入した各種明細がある。

お金のやり取りはしっかりとっておかないと後々怖い。同行した銀髪エルフに明細書の真偽を保障をして貰って、ひとまずは一件落着きといった具合だった。流石に数千人分の食料とあって、一度に何日分も仕入れることは叶わず、引き続き明日からも同様に買出しを行う約束をしている。けれど、とりあえずはホッと一息を吐けた。

「人間、想定以上の働きだ。私からも礼を言わせて貰う」

今居る場所は場所は城の中央に設けられた謁見の間である。

そこで王座の前に立つ少女から感謝の言葉を受けているところだった。彼女の傍らに立ったトカゲも同様に頭を下げて感謝の言葉をくれる。それが以前にも彼女と共にいたトカゲかどうかは分からないけれど、何故だか同じトカゲだと思えた。

「いえ、自分よりもむしろ一緒に来てくれた彼女達を褒めてやってください。彼女達の力がなかったら、自分だけだったら金を向こうの貨幣に代えられずに意気消沈して戻ってくるころだった……でしたから」

「いいえ、それにしても全ては貴方の協力が前提の賜物です」

周囲には俺を囲うように様々な化け物が轟いていた。

正直、凄く怖いので早く終わりにして欲しい。けれど、それを素直に口とする勇氣は微塵も無い。先のオーガと言う化け物さえ超える重量級すら身を並べているのだから、ちっぽけな人間には荷が重い。なんか漫画に出てくるドラゴンみたいな恐ろしい奴までいる。小さな少女の家臣にしては違和感を拭えない。

「貴方が人間でなければ、大々的にその存在を国民へ明けることもできました。しかし、今の状況ではそれも非常に難しくあります。こうして城のうちに済まざるを得ない私の懐の小ささを許してください」

「別にいいですよ、それより、本当にお金貰っちゃっていいんですか？」

「はい、この窮地を救って頂いたのですから、当然の謝礼です」

「それと、明日からは昼間に学校があるんで、こっちへ来るのは日が傾き始めた頃になってしまっただけ、それでもいいですか？
できるだけ急いで帰るようにするから……しますから」

「そちらの世界では、日が傾いても市が開いているんですか？」

「え、ああ、それは大丈夫ですよ。大手なら二十四時間やってますから」

「なんと……」

俺の言葉に周囲の化け物達がざわめき立つ。

厳密には市ではないのだけれど、想定する規模としては彼女の言うそれと変わらないだろう。ただ、放課後はあまり時間を掛けられないのが難点だ。今後は土日にもっと大量の食料品を運び込む必要があるだろう。

「ところで、この後で時間はありますか？」

「この後ですか？」

「ええ、貴方が苦勞して食料を買い付けてくれたのですから、ささやかではありますが晚餐を振舞いたく思います。互いの親睦を深める意味でも、是非とも席を共にして貰いたいのです」

「あ、えっと、すみません、ちょっといいですか？」

少女に言われてズボンのポケットから携帯電話を取り出す。

ディスプレイに目を向ければ、そこには午後五時半との表記があった。

夕食まであと一時間である。

「……………」

友達の家でゲームをするのが楽しくて、あと少し、あと少しと帰宅をずらした小学校の時分を思い起こす。結局、夕食の時間を一時間ほど過ぎてから帰った俺を待っていたのは両親からの肉体的折檻であった。あの時、無理矢理に尻を叩かれた痛みは今でも決して忘れない。

「あの、非常に申し訳ないのですが、これから家族と食事を取る予定があつて……………」

「そ、そうですね…………、それは残念です」

俺も凄く残念だった。

化け物の作る料理には非常に興味がある。

物凄く、とつても、食べてみたかった。

それからの一週間は鏡の世界と元の世界との往復だった。

既に高校受験と合格発表を終えて、後は卒業するだけの身の上にある。学業は午後四時頃に終業となる。部活動も既に退部手続きを終えているから、そこから先は自由時間だった。そこで俺は他に何をすることもなく自宅の庭へと急ぐのだ。

鏡の世界へと足を運んでエルフな手伝いに向かえ、傾国の食料調達に励む訳である。ちなみに、この手伝いというのは当初に組んだ金髪銀髪のエルフ達である。金髪の彼女と銀髪の彼女を交互に姿見の見張りと据えて、毎日四時半頃から商店街やスーパーの食料品を買い漁るのが日課となった。

まるで自分が敏腕商人にでもなった風だった。

利率は五十パーセント、破格である。

そして、そんな一風変わった生活習慣を送り始めて五日目の金曜日、それは起こったのだった。元より危惧していなかった訳ではない。けれど、注意していたにも拘らず、最悪のタイミングで起こってしまった。

場所は商店街の一角である。

「あれー？ 浩二じゃん」

「あ、本当だ」

「えっ？　なんでアイツが女連れなの？」

それは阪部とそのグループだった。

「あ……」

気づかない振りをして通り過ぎれば良かったのに、思わず声を上げてしまった。そして、気づけば彼等と目があっていた。相手は学校帰りらしく、制服姿でアイスクリームなど片手にしていた。対して既にこちらは一度帰宅済みであるから私服だ。

「おいおい、何やってんの？　浩二君」

普段なら自分達から近づいてくることなど無いのに、今日に限って彼等はこちらへと歩み寄ってきた。しかもかなり意欲的に近づいてくる。恐らくは銀髪の彼女を珍しんでのことだろう。

「人間、知り合いか？」

「あ、ああ、学校の友達、かな」

十数メートルあった距離は瞬く間に詰められてしまう。

「ちょっとちょっと、もしかしてデート？　私服に着替えちゃったりして」

「っていつか、すっげえ可愛い」

「何処の国の人？ 銀髪とかマジでパネェんすけど」

俺と彼女を囲うように彼等は立ち位置を取る。傍から見れば不良に絡まれる苛められっ子として映るだろうか。それはなんだか凄く嫌な気分である。唯一、彼等の言葉がエルフである彼女の耳に届かないのが救いだった。もしも全てが筒抜けであつたら、そう思うと背筋が寒くなる。

「べ、別に彼女とかじゃないから、だから、また今度にしてくれな
いか？」

「なんだよ、俺達にも紹介してくれよ」

「そーそー、お前ばかり一人で美味しい思いしてんじゃねえよ」

「俺等つて友達だろ？ 一緒に遊ぼうぜ」

先週の土曜日に井物屋で遭遇して以降も、学校での俺は普段どおりを決め込んでいた。勤めて何も知らない振りをしていつもどおりの自分を演じていた。だからだろう、彼等もまた遠慮なく語りかけてくる。

いや、もしかしたら全てを承知した上でかもしれないが。

「これからやることがあるんだよ、今日は無理だから、ほら、また今度な？」

「おいおい、そんなこと言うなって、たまにはいいじゃん」

「そうだよ、俺もこの間の子に振られちゃって、今丁度フリーだし」

「っていつか、マジで可愛いわ、何歳？ 俺等とタメ？」

じわじわとにじり寄って来る阪部達に何と答えれば良いだろう。

彼等を下手に刺激しては、この一週間を何の為に自分を殺してきたのか分らない。けれど、彼等に関わっていたら食料品の運び入れが行えない。既に商品は配送済みであるから、それだけは避けなければならぬ。隣の活火山の心具合も然ることながら、明日は朝から晩まで雨の予報なのだ。

「カラオケ行こうぜ？ 俺、海外の歌とか超聞きたいし」

「あ、それ賛成、俺も聞いてみたい」

「いいねえ、俺等が奢るから、それでいいしょ？ 行こうぜ」

既に彼等は俺に声を掛けているのか隣の銀髪に声を掛けているのか分らない。教室で眺めている限りでは割と小ざつぱりして感じられた彼等である。けれど、女を前にするとここまで卑しくなれるのかと、何故だろう、少し悲しい気分になった。

「おい、この者達は何と言っているんだ？」

痺れを切らしたのか隣の彼女が問い掛けてくる。

「いや、なんか、君のことを気に入ったらしくて……」

「私のことを気に入った？ 人間風情が何を喚いているんだ」

途端に彼女の顔が怒りに染まる。

一応、こちらの世界では無闇矢鱈に魔法を使わないようお姫様たる少女を通して約束をしてある。けれど、それも彼女の気性の荒さと人間嫌いのほどを思えば、あまり信用できなかつた。

「いちいち相手にすることなどない、さっさと行くぞっ!」

心底憎らしげに呟いて彼女は歩き出す。

「あ、ちょ、ちょっと、待ってよ」

慌ててその背を追った。

銀髪は阪部達の身体を肩で押しのけて前へ進もうとする。

「退けっ、下種がっ!」

「え? この子、何て言ってるの?」

「おい、浩二、ちょっと通訳してくれよ」

「っていつか、もしかして怒ってる?」

「ねえ何語? これって何語?」

多少だけ驚いた様子で阪部達が俺に向きなおる。

「いや、ちょっと今は色々あって急いであるから、ほら、また今度ってことだ」

本当はもう少し穏便に済ませたい。来週には卒業式が待っているのだ。それに高校へ入学してからも決して彼等の全くと無関係にはいかないだろう。調べた限り阪部のグループのうち二人とは同じ学校へ通う予定である。ここで嫌われて変に噂でも流されたら堪らない。

けれど、銀髪が歩いていってしまうから、大人しく彼等の言葉に従っている余裕も無い。仕方なく自分もまた彼女のあとを追って歩みを進める。

すると、何を思ったか阪部が彼女の手を強引に握った。

「おい、ちよつと待ってくれたっていいじゃんっ!」

俺の胸ほどまでしかない華奢な身体がぐらり背後に振れる。

本人は軽い調子でやったのだろう。

しかし、今回ばかりは相手が悪かった。

「貴様あっ!」

急に後ろへ向きなおった彼女が、振り返りざまに彼の身体を蹴り飛ばした。

「ちよ、ちよつとっ!」

思わず俺も声を上げてしまった。

小さな身体に似合わず銀髪の回し蹴りは見事且つ強烈だった。不意を打たれた阪部は脇腹を強く打たれ成す術もなく吹っ飛んだ。ゴヘエと無様な悲鳴を漏らすと共に、数メートルだけ離れてアスファルトの上へ転がる。

その瞬間、他の通行人も含めてその場の時が止まった。

「人間如きが私の肌に触れるなっ！ 汚らわしいっ！」

そうして吼える彼女の目は今まで一番、強烈な怒りの炎を燈していた。

「お、おい、ちょっと拙いって……」

「死ねっ！」

尚も追撃を加えようとする彼女と阪部の間に身を滑らせる。

「ここで問題を起こすと今後の活動に支障が出るから、な？ 止めてくれよ」

「くっ……」

俺の言葉は彼女以外にも聞こえているから、表立って変なことは言えない。ギリギリのところでお姫様を引き合いに出して彼女の怒りを抑える。少女から聞いた話、彼女達は人間を殺すことに何の躊躇もないらしい。非常に危険だった。

「ほら、と、とりあえず行こう」

「糞っ……………」

俺が率先して歩き出すと、彼女は渋々といった様子で付いて来た。

如何せん銀髪は目立ち過ぎる。この場に長く留まるのは危険だった。万が一にも警察がやって来たら、彼女の身元を証明するものなど何も無い。密告者の烙印を押されて拘置状まで一直線だ。ともすれば彼女も抵抗するだろうから、ああ、大変だ。

「……………」

自然と頭が痛くなるのを感じた。

商店街を抜けてからは大通りを避けて、人目の少ない細い路地を選んで家を目指すこととした。いつかこういう日が来るのではないかと予感めいたものを感じていたけれど、まさか、阪部達を相手にするとは思わなかった。

「っていつか、幾らなんでもいきなり暴力は止めてくれよ」

足早に歩を進めながら隣を歩く彼女に声を掛ける。

「……………なんだと？」

「この世界の人間は君達に何か悪いことをした？」

「黙れ、人間など何処の世界にしようと同じだ」

「だからって問答無用で暴力に訴えるの？」

「五月蠅い、口で言っても分からぬから、身を持って教えてやったまでだ」

「でも、仮にも俺の友達な訳だし……」

「友達だと？ あの人間共は端から私しか見ていなかっただろうが、気色悪い視線を向けてくれて、思い出しただけで鳥肌が立つ。思い返したただけで、その身をバラバラに切り刻んでやりたくなる」

「……………」

彼女の言葉に自分もまた阪部達の態度を思い起こす。

それは完全に正しい。

しかし、それとこれとは別問題だ。

「彼等は俺の通う学校でいつも中心にいるんだよ。こんなことがあつたら、その、次に学校へ行つたときにどんな扱いを受けるかわからないだろうが。高校に入ってから、もし苛められたりしたら、どうしてくれるんだよ」

「はっ、あのような下種など放つておけ、下らない」

「下らないって、そんな、俺にとっちゃ死活問題なのに……」

「死活問題？ なにが苛められるだ。同じ人間の数人を、それも魔法すら使えない者を相手にどうして怯む事がある。お前がこちらの世界でよく話している医者のがロンなど、ああ見えて人間の魔法使いを幾十人と相手に立ち回る猛者だぞ？ 奴を恐れずして何故に

同じ人間如きを怖がる必要があるんだ」

「い、いや、そういう意味じゃなくて」

「そんなに怖いのであれば私が殺してやろう」

「だから、こつちの世界には色々と面倒な規則があるんだよ。そう簡単に殺すとか口にしちゃいけないんだよ。それだけでも犯罪だつて後ろ指差されて、面倒事に巻き込まれる可能性があるんだからな？」

「ふん、人間の作った規則など私が知るか」

「なっ……」

なんて酷い言いようだろう。

会話の余地なんて微塵も無い。

「なんでそんな酷いこと言っただよっ！」

「黙れっ！ 私は姫様の命でお前と共にいるに過ぎん。どうして貴様の面倒に付き合わねばならん。自らに降りかかった火の粉を自ら振りらつたまでだっ！ それ以上の言葉は許さんぞっ！？」

「じ、この……」

ぐつとこちらを見上げてくる瞳は真っ赤に燃えていた。

「それだったら、お前達の主張はなんなんだよっ！？ 人間に迫害

されたから人間を憎んでるだつて？ それこそ力にものを言わせて
阪部達を蹴り伏せたさっきの行いが、お前達を迫害した人間の行い
とどう違つて言つんだっ!?!」

「何だとっ!?!? 貴様、まさか我々をあの忌々しい者共と同じだと
言つのか?」

「ああ、そつちの事情を知らない俺からすれば、そう大して変らな
いなっ!」

俺の言葉に銀髪の身体がピクリと震える。

それと同時に一瞬だけ歩みが止まった。

再び歩み始めた彼女の背からは嘗てない怒気が立ち上つて感じる。

「……今この場で死にたいのか?」

「俺がいないと食料を運ぶことはできないぞ? それでもいいのか
?」

「こ、この……、人間風情が粹がりおつて……」

「お前が多少人間に触られたのを我慢できなかつた為に、同じ国の
同胞が飢え死んでもいいのか? それいいなら好きにするといひさ。
けど、国に帰つたお前を仲間はどういう顔で迎えるだろうな?」

「貴様っ!」

「エルフだかなんだか知らないけど、こつちだつてこつちの都合が

あるんだよ。少なくとも姫様とは約束したじゃないか。無闇に暴力を振るったり魔法を使ったりしないって。それはどうするんだよ」

「だから、あれは降りかかる火の粉を払ったまでだと言っただろうがっ！」

「なんだよ、お前にとっての人間ってのは火の粉ほどに熱いものなのか？」

「っ……」

俺の言葉に銀髪の色白な頬が朱に染まった。

「俺はお前達のお姫様を助けたくて動いてるんだ。お前なんて関係ない」

「私だって貴様など知ったことかっ！ 国が助かるならば他はどうでも良いわっ！」

「だったら、せめて事前に交わした約束くらい守れよ。じゃないとこっちだって満足に動けないだろうが。もしも今回の一件で阪部が怪我とかしてたらどうするんだよ。俺はあいつの親になんて言えばいい？ 素直にお前を差し出せばいいのか？」

「ならば私にどうしろと言っただっ！」

「今日までの四日間と同じように、面倒を起こさないよう静かにしておいてくれよ。郷に入りては郷に従えって言葉がこっちの世界にはあるんだよ。他人に迷惑掛けないように生きていくことが大切なんだよ」

「ならば、お前が私の自尊心を守ってくれるというのか？ 世界が違えど人間は人間に違いない。何故に自らを殺してまで怨敵に従わねばならん。自分には自分の世界があるだろうがっ！」

「それがこつちの世界なんだよっ！」

「ふん、これだから人間は先が見えないと言うんだ」

「そつちこそ自分ばかりを見過ぎじゃないのか？」

「黙れっ！ それ以上の愚弄は許さんぞ！？」

「だったら、なんなんだよ？」

「言うておくが、貴様を殺さずに両手両足をもぎ取ることくらい、私にかかれば造作も無いことだと理解しているのか？ その眼球と耳をもいで、達磨にして、ただ扉を開けるだけの鍵にしても良いのだぞ？」

「なっ、ま、また脅しかよっ！」

「これまでの貴様の物言いにしても同じだろうが。まさか、今更になつて善意を語るつもりか？」

「っ……」

言い合いは一向に平行線だった。

商店街から自宅までは片道三十分ほどである。そうこうしている

うちに我が家が歩む先に見えてきた。その前の通りには例によって各店舗からやって来たトラックの類が列を成し停車していた。垣根を挟んだ庭ではその荷台より荷物を下ろす金髪の姿も見える。その回りでは他にトラックの運転手達も同様の作業に従事していた。

これ以上、彼女と口論を続けていては皆に迷惑がかかる。

「分かったよ、これで話は終わりだ。いいな？」

「はっ、勝手にしろ、人間が」

ふんと鼻を鳴らしてそっぽを向いた彼女を眺めて、次からは別のエルフを用立てて貰おうと強く思うのだった。そう、叶うならもう少し大人しくて、喧嘩っ早くない性格の持ち主として。

第二話（後書き）

誤字脱字はご容赦ください。

第三話（前書き）

誤字脱字はご容赦ください。

第三話

翌、土曜日。

学校へ向かわなくて良いことに安堵しながら俺は鏡の世界へと足を運んだ。外は生憎の雨だったので、今日の作業をどうするか少女に伺いを立てる為だった。もしも連日に同じく行つなら、別途、テントを購入する必要がある。組み立てには最低でも四本の足を支える手伝いが必要なのだ。

しかし、その日の城は俺の知る平素より幾分か空気を違えていた。

前日に同じく、隣室からのノックに気づいて医務室より現れたのは医者 of 猿人ガロンだった。彼は俺がこちらへやって来たことを確認して、とりあえず僕に付いて来いと廊下に出る。一体何があったのかと疑問に思っていると、到着した先は何やら荘厳な長机の設えられた会議室を思わせる一室だった。

そこの最奥に少女の姿を見止める。

相手もこちらに気づいて声を上げた。

「ああ、来てくれましたか」

「どうも、今日の予定を聞こうと思ったんですけど……」

会議室に座する化け物達から一斉に視線を浴びる。割と人の姿に近いエルフとか、小柄なドワーフとかはまだ良い。けれど、筋肉の

化け物であるオーガやら、口に鋭い牙を生やした竜やらに見つめられると、思わず扉を閉めて回れ右したくなる。

「申し訳ありませんが、食料を調達している場合ではなくなってしまいました」

「え？」

「哨戒に当たっていた仲間の報告より、人間の軍の動きに変化がありました」

「敵がですか？」

「はい、そうです。得られた情報から鑑みるに、相手から近いうちに大規模な進行があると、今し方に我々は結論を出しました。きっと、兵糧攻めに然したる効果を見出せず焦れて来たのでしょう」

「し、進軍ですか……」

「はい、とうとう来てしまいました」

そうして語るのすら辛そうに少女は状況を説明してくれる。

同じ机を囲う誰も彼もは口を閉ざして、そんな彼女の姿を黙り見つめていた。きっと、この会議は旧日本軍という御前会議なのだろう。居た堪れない緊迫感を痛いほどにひしひしと感じる。

「常に備える必要がありますから、仮に二名とはいえ魔力に長けるエルフをそちらへ回すことはできません。ですから、今日は叶うならば貴方お一人で、若しくは休みとして貰えませんか？」

「そういうことなら、はい、分かりました」

まさか、この状況で今日は雨だからあと二人だけ追加してくれないかな、などは口が裂けても言えない。国あつての食い扶持である。戦争に負けては食料など幾らあつたところで意味が無い。

「では、申し訳ありませんが、私は話し合いがありますので」

「じゃあ、自分も一度向こうに帰ります」

「ええ、そうして頂けると助かります」

少女とその取り巻きに軽く会釈を返して部屋を後とする。

ここへ連れて来てくれたのと同様に、猿人のガロンが無言に促してくれて、二人並んで廊下へ出た。

ボタンと重い音がして扉が閉まる。

すると、彼は廊下へ出るやいなや大層大きな溜息を吐いた。全面に大きく出っ張った猿口からはあと熱い吐息が漏れる。彼もまたこの国の民に違いない。その身にかかる心労は決して軽くないのだろう。しかも職業は医者だと言うのだから、多少の同情すら感じる。

日本で言えば数十年前にあつたという、政権交代に伴う大幅増税と隣国人民の大流入による国民生活の転覆がそれに近い気がする。今でこそ太平な国柄を取り戻したが、当時は傀儡政権の打倒に随分な血が流れたという。

「随分と深刻な話だな……ですね」

「うむ、ついに来るべきときが来てしまった」

そうして答える彼の言葉は普段にも増して重苦しい。

「やっぱり、戦うんですよね？」

「他に道があるかのお？」

「すみません、こちらの世界の社会情勢とかはさっぱりです」

「きつと、我々には戦うしかないのじゃよ。これは神より与えられた運命なのじゃ」

「……何か信仰している宗教が？」

「まあ、この国は種族によって様々じゃが、我々はマーズ教かのお……」

「な、なるほど……」

当然、初めて耳にする名前だけれど、それとなく頷いておく。

猿人も敵からの侵略が随分と堪えるのか、これでも普段より口数も少なく静々と城の廊下を歩む。たが、逆に城内は普段よりだいぶ騒がしく感じられた。あちらこちらで怒声が飛び交っているし、多くの化け物が忙しく右往左往している。きつと戦争の準備をしているのだろつ。

「勝ち目って、あるんですか？」

聞かずにはいらねなくて、思わず問うてしまう。

「……そうじゃのお」

食料品の買い出しを手伝ってくれたエルフ達ならば、絶対に勝たねばならぬのだ、とか非常に熱い答えが返ってきただろう。しかし、この老年の猿人は至極冷静な性格の持ち主である。それはここ数日でだいぶ理解したつもりだ。

そんな彼が覇気薄くぼつりと零す。

「せめて姫様だけは、無事に故郷へ逃れて欲しいものじゃ……」

「……………」

なんだか、聞いているこちらが挫けそうな語り草だった。

まるで通夜である。

まだ経験は無いけれど、そう感じた。

「あ、あの、もし良かったらこっちの世界へ逃げるとか、どうですか？」

「いや、それじゃあ意味が無いのじゃよ。この国は我々が荒野を耕し、水源を掘り当て、汗水を流して開拓した土地の上に立っており。それを再び失っては、もはやこうして各々の部族が団結することもあるまい」

「やっぱり駄目ですか……」

「おぬしの気遣いは嬉しく思う。本当に、人間だというに良く我々に尽くしてくれる。もしも僕がこの度の戦を生き永らえることができたのなら、おぬしの名を末永く語り継がせて貰うとしよう」

「い、いや、そんな、そんな弱気なことを言わないでくださいよ」

もしかして、今し方に覗いた会議室の面々も彼と同じ心持なのだろうか。

「まあ、何にせよおぬしは早く元の世界へ帰るといい。敵が攻めるときは大変じゃからのお。万が一にも鏡が割れてしまつては面倒じゃろう？ おぬしの居場所はここではないのじゃからの」

「それは、まあ、たしかにそうですね……」

猿人に言われて多少だけ怖いものを感じる。

たしかに、このまま長居して帰れなくなるのは絶対に嫌だ。

「戦争つて、やっぱり、こう、互いに大勢でぶつかり合つんだよ……ですよね？」

「ん？ 他に何かやりようがあるのかえ？」

「いや、そういう訳じゃないんだけど、あんまりにも現実的じゃなかったから」

「そうか？ おぬしの世界では戦争はないのか？」

「こつちの世界だと、なんというか、戦争というより苛めみたいな感じがする」

「苛め？」

「ああ、いや、気にしないでいいんだけどね。こつちの話だから」

「……そうか」

何か力になれることはないかと考えを巡らせるけれど、まさか個人の力で戦局を引っくり返すことなどできる筈もない。幾ら考えても良い案なんて一つとして思い浮かぶことはなかった。

「相手って、どれくらいなんですか？」

「人間どもの数か？ それならば数万から十数万と聞いておるが……」

「じゃあ、逆にこつちは？」

「この国の住民全てを合わせて数千といったところじゃ。ただ、正確な数は数えた試しがないから分らん。しかも、連中と面だつて戦える者はそのうち七割が関の山じゃろう」

「い、今まで良く耐えて来られましたね」

「それはこの街全体を覆う強大な結界のおかげじゃ」

「結界？」

「うむ。この国には姫様の父親、今は亡き前王を慕って高位の精霊や強力な化け物達が集まっておる。それらが街全体を包み込むように結界を作っているのじゃよ。それがある限り人間共は一步たりとも入ってこれん」

「へえ……」

「なんだか良く分からない部分もあるけれど、とりあえず凄い気がした。」

「あ、でも、前に俺が来たときは食糧庫が燃やされたとか言ってたけど」

「あれは人間共が外からこの城全体を魔法で激しく揺らしたからじゃ。結界を作っているのは我々自身じゃから、恐らく揺れに慌てた者が集中力を切らしたのじゃろう。僅かに穴ができたらしい」

「な、なるほど……」

「利用された魔法は大凡見当がつくが、そもそもそれは極小さな領域で大地を隆起させる代物じゃ。それを数に物言わせて無理矢理に打ち込んできたのじゃろう。人間の考えることは底が知れぬ。一体何千、何万人を集めたのか想像するのも億劫じゃ」

「地震を自前で起こすって、そりやまた凄い……」

「あとは前王の力も大きかったのじゃろう。姫様やその父親たる前王は強力な力を持つ古竜なのじゃよ。遙か北の大地に住まうと言わ

れている彼等の力は一騎当千、いや、それ以上のもの。今までも幾度となくその力で国を守ってきた」

「古竜？」

「やはり、おぬしの世界には居らんのか？」

「い、いないよ。竜なんて」

「ほお、そうなのか。やはりおぬしの世界は面白い……」

「彼女の父親って、そんなに凄かったんだ？」

「うむ。じゃが、度重なる人間共との戦いに敗れて、つい先々月のことお亡くなりになってしまった。幾万という人間達の進軍をその身一つに受けて立つ姿は、まさに言葉を忘れるほど圧巻じゃった。じゃが、絶対の力と言われる古竜も人間の数には勝てなかった」

ハアと猿人が深い溜息を吐いた。

「あ、でも、その結界とやらがあるから、今は大丈夫なんじゃないんですか？」

「それもいつ崩されるか分からん。おぬしが矢に撃たれたとおり、この間も人間の侵入を許してしまった。次の進行では一体何をしてくるか考えると、この街の結界も長くは持つまい」

「そ、そうなんですか……」

そして、そうこうしている間に俺達は姿見の置かれた部屋に辿り

着いた。医務室から連なる一室で廊下には直接面していない部屋だ。自分がこの城で最も多く出入りしている場所でもある。

「さて、そういう訳じゃから、これでおぬしともお別れかの」

姿見の前に立って猿人が言う。

「なんていうか、どう答えたら良いか分からないけど……」

「なあに、おぬしの気にすることではない。向こうで元あった生活を送るといい」

「……そ、そうですね」

「ほら、あまり長居していると敵が攻め込んでくるぞい」

「分かりました。それじゃあ、今まで色々と面倒みてくれてありがとうございます
とっございしました」

「いやいや、こちらこそ美味しい食い物をくれて感謝しとるよ」

「それじゃあ……」

「うむ」

そうして、後ろ髪を強く引かれながらも、俺は姿見の鏡面に触れた。ともすれば我が身は瞬間に暗闇へと包まれて、猿人の姿も見えなくなった。城の喧騒もすぐに聞こえなくなった。

気づけば次の瞬間には家の物置に居た。

家に帰ってからは、雨が降っていたので大人しく自室に籠った。

どうにも鏡の世界を思うと落ち着けなくて、漫画を読もうにもゲームをやるうにも、果ては机に向かおうにも、一向に集中できなかった。気づけば向こうの世界に思いを巡らせている自分がいた。

「なんかなあ……」

僅か一週間という短い期間ではあるけれど、それなりに顔を合わせていた訳だから、愛着も湧いていた。正直、猿顔やトカゲの強面には慣れない。けれど、悪い奴じゃないと知れば気にもなるものだ。

何か自分に手伝えることはないだろうか。

気づけばそんな風に考えていた。

それはゲームと違って攻略本の無い一発限りの物語である。しかも彼等の国が懸かった一大事だ。そう容易に自分が手を出せるとは思わない。けれど、何もしないで我関せずを貫くのはしんどかった。

次に姿見を抜けたとき、そこに誰も居なかったら少し悲しいだろ

う。

「……………」

しかし、自分はただの中学生だから、そんな規模の大きな話にどうやって助力するれば良いのか。食糧の調達も生憎の天気で難しいかと言って武器の類は、民間人は逆立ちしても手に入れることなどできない。

そして、この身は貧弱な人間のそれときたものだ。

魔法が飛び交うという斬新な戦場へ出ては数分と生き残れる気がしない。まったく役に立たない身の上だった。彼らの話ではないが、人間とは群れていなければ何もできない存在である。

「はあ……………」

何気なくパソコンの電源を入れてブラウザを立ち上げる。

籠城戦と検索かければ過去に名を馳せる人物の名と共に数々の争いの歴史が現れた。それらを眺めてみると、なかには十倍近い戦力を相手に勝利をもぎ取った例も幾つか示されていた。

けれど、所詮はそれまでである。

色々と説明書きは為されているけれど、全ては過去の出来事である。多くは運の賜物だと思えて仕方がない。同じことをやれと言われても、絶対に無理だろうと確信が持てるから悲しい。

それからしばらくをネットサーフィンに入り浸っていたけれど、

そこから得られるものは無いと結論付けるに至った。然して温まっていけないコンピュータの電源を切って席を立つ。何気なく外へ視線を向ければ、屋外では激しい雨がアスファルトをバシヤバシヤと勢い良く叩いていた。

せめて何か差し入れでも持っていこうかと、そんな気分になった。

「……ああ、そうだ」

そこで不意に思い起こしたのは昔、友達と遊んだ戦争ごっこ。

トランシーバーで仲間と連絡を取りながら森の中を駆け巡った記憶である。友人達は値の張るエアガンやガス銃を持っていたけれど、自分だけは夜店で買った安っぽい銀玉鉄砲片手にはしゃいでいた気がする。俺の弾は誰にも当たらなかったし、思えば誰からも弾を当てられなかった気がする。

「ああ……」

今になって思い返すと鬱だった。

とりあえず電気街へ向かうとしよう。

そう思い立って俺は部屋を後とした。

自宅は都内より多少だけ離れた住宅地の一角にある。そこから徒歩と電車で目的の場所まで向かった。今日は大振りの雨日だと言うのに、都市部は天候など関係なく人で賑わっていた。猿人の言葉じゃない人が多い。

幾度かの乗換えを経てやって来たのは日本有数の電気街秋葉原。

「たまに漫画の類を買いに足を運ぶ事がある。」

しかし、無線機器などは買った試しが無いので何処に店があるか分からない。傘を片手にあっちへうろつろ、こっちへうろつろ、しばらくを彷徨う羽目となった。本屋なら腐るほどみかけるが、無線機器を扱っているような古いタイプの電気屋はなかなか見当たらない。何処へ行けば良いのだろうかとうと随分な時間を歩き回った。

すると、予期せぬ不幸がやってきた。

「あ……」

「ん？」

歩む路上の正面より見知った顔達が近づいて来たのだった。

自分に同じく傘を手に、しかし、何やら楽しそうに会話を交わしつつある。そして、彼等は俺を見つけると、そう、何処か都合が悪そうに少しだけ目元を歪めるのだった。多分、先週末までの自分だったら気づかなかっただろう些細な変化である。

富川とそのグループの者達だった。

「よ、よお、奇遇だな。休日にこんなところで会うなんて」

不自然にならぬよう学校で接するのと同じように声を掛ける。果たして自分はどこまで演じられているのだろうか。彼らのグループの奴も一人は同じ高校へ進学する予定だと聞いている。要らぬ事情

を気取られなくなかった。

「ああ、浩二か……」

「なんで秋葉原に居るんだよ？」

「い、いや、ちょっと買い物したくてさ……」

反射的に、トランシーバーを買いに、と口に出そうになった。けれどその瞬間に、相手もいないのにそんな物がどうして必要なんだ？ と脳内で彼等から囁かれた気がして、自然と言葉を濁すこととなった。

「って言うと、まさかアキバまでボラクエを買いに来たのか？」

「いや、今日はまた別の買い物で来たんだけど」

「そうか、なら良かった……」

「え？ 何で？」

妙なことを言う富川達の言葉に思わず声が漏れる。

「あ、ああ、別にお前には関係ないから、気にするなよ」

「……………」

そんな彼等の言葉に俺は何と答えれば良いのだろうか。

教室ではそれらしいやり取りができていた筈なのに、どうしてか

今は会話が長続きしなかった。路上で立ち止まったまま、富川の側も何を言つても無くこちらを眺めている。まるで動物園のパンダにでもなった気分だった。

だから、話題を探そうとして語りかける。

「あ、そう言えばさ、富川ってアキバ詳しいよな？」

「え？ あ、ああ、それがどうした？」

「良かったら少し案内してくれないか？ 無線とか扱ってる店を知りたいんだけど……」

「……………」

正面に立った富川を選んで、それとなく問い掛ける。

すると、何故だろう。相手は押し黙ってしまった。そして、そんな彼の傍らでは同じグループの者達が小さく互いの耳元で囁きあっている。眺めていて非常に不快感を誘う光景だった。その視線は時折こちらをチラリチラリと盗み見て思える。何か言いたいことがあるのだろうか。

「少しでいいんだけど、駄目か？ あ、急いでいるようなら構わないけど」

だから、とりあえず何かしら喋って貰おうと言葉を続ける。

「なあ、富川……………」

すると、俯きがちにあった相手の顔がスツとこちらを見つめてきた。

「浩二、悪いんだけどさ、もう俺達には話しかけられないでくれない？」

「は？」

「いや、だから、もう学校でも街でも、俺達に寄ってくるなつてこ」と

「い、いや、ちょっと、なんだよそれ……」

面と向かって語られるにはあんまりな物言いに思わず目を白黒させる。耳にしてすぐは自分が何を言われたのか理解できなかった。どうしてここまで明確に拒絶されなければならないのか。

「お前、阪部達と喧嘩してるんだろ？」

「は？ 何の話だよ」

「お前が阪部の彼女を殴ったつて、昨日、メールで回ってきたんだよ」

「おい、ちょっと待てよ、なんだよそれっ！」

「そのメールつてクラス中に回ってるみたいだから、もう、俺達もお前と話するのが嫌なんだよ。悪いけどこれからは近づかないで貰えないか？ 俺も阪部達に嫌われたくないし、変な噂を立てられたくないし」

「そんな……」

思い出されたのは銀髪エルフと一緒に買出しに行った記憶である。あの時の出来事を彼等が歪めてメールに乗せたのだろう。けれど、幾らなんでも俺が阪部の彼女を殴ったなんて濡れ衣にも程がある。

そもそもそんな嘘をクラス全体にメールで流すなど冗談が過ぎる。幾ら嫌われているとはいえ、これでは虐めじゃないか。むしろ先に手を出したのは阪部達だと言うのに、どうしてそんなことをするのか。

「富川、それは違うぞ、俺は何もしてない。阪部達が勘違いしてるんだよ」

「……そうなのか？」

「当然だろ？　なんで俺が阪部の彼女を騙さなきゃならないんだよ」

「でも、実際問題にメールは回ってきたんだけど？」

「だから、それは嘘だって言ってるだろっ？」

「けどさ、だったらどうして阪部がそんな嘘をつくんだよ？」

「い、いや、それは、だから……」

まさか本当のことを語る訳にはいかない。けれど、そうでなければ如何にして銀髪のことを説明すれば良いのか。上手い言葉が見つからず返答に困る。すると、それを相手は阪部達に都合が良いよう解釈してくれた。

「やっぱり、なんかしたんだろ？」

「してないっ、絶対にしてないっつー！」

「じゃあ、どうして説明しないんだよ？」

「それは今は言えないっつーいうか、こっちにも色々と事情があるんだよ」

「なんかお前って嘘臭いよな」

「う、嘘じゃないっ！」

「証拠とかあるのか？ 阪部は彼女が泣いてたって書いてあったぞ？」

「そもそも俺は阪部の彼女の顔すら知らないし、信じてくれよっ！」

どうして天下の往来でこんな羽目に陥っているのか。凄く自分が惨めに思えた。傘を叩く雨の音がその気分を更に拍車をかける。少し濡れたシャツやズボンの冷たさが身体のみならず心まで冷やして思えた。

「けど、阪部のメールには書いてあったんだから、仕方ないだろ？」

「だから、それは全部嘘だつてっ！」

「写メには彼女の顔に痣があったし、お前の話の方が嘘っぽくない？」

「な、なんでだよっ!? 俺はそんなことしてねえよっ!」

「口先だけで語られたって、そう簡単に信じられる訳ないだろ? 阪部の友達もその場面に居合わせたっていうし、誰もお前のことなんて信用しないんじゃないか? 少なくとも俺はそう思う」

「っ……」

富川の言葉に裁量の余地はなかった。

「おい、富川、もういいだろ? 早く行こうぜ」

「急がないと今日のイベントが始まっちゃうだろうが」

「っていつか、雨降ってるしさっさと中へ入りてーよ」

そして、痺れを切らした彼の仲間達がそれぞれ声を上げてくる。その全てはどれも俺を強く非難しているようで、心臓がキュツと締め付けられる感覚に苛まれた。どうして自分ばかりこんな目に遭わなければならぬのか。

本当は仲良くしたいのに、どうしてこんなことになってしまったのか。

「まあ、そういう訳だから、じゃあな」

そうして、彼は脇をスツと通り過ぎて行った。

彼の友達達もまた後に続く。

「あ……」

その背にかける言葉は見つからなかった。

ただ、段々と小さくなっていく彼等の姿を目で追うことしかできなかった。そして、それもやがて人ごみに飲まれ見えなくなる。あとは雑多な都市部の喧騒と雨が地を叩く音だけが残された。

「……………」

目から涙が漏れそうだった。

今週なんて凄く頑張ったのに。とても気を使って普段どおり接してきたのに。だのにこんな仕打ちは無いと思う。もしかしたら、高校へ進学してからは環境も色々と変わるから、彼等とも縁りを戻せるかもしれないとか考えていたのに、全てが無残に打ち砕かれた気分だった。

そんなに、やっぱり自分は嫌な奴なのだろうか。

「……畜生」

色々と堪らない気分になった。

身体の中に熱が溢れて、ジツとしていられない。

雑多な感情が入り乱れて頭の中が沸いたようだった。

だから、気づいたときには駆け出していた。

人の波を掻き分けるようにして、前へ前へ、向かう先も決めないままに足を動かす。何がやりたいのか自分でも分からなくて、ただ只管に走り回るのだった。そうして、叫びを上げたくなる気分を必死に抑えるのだった。

すると、なんとも皮肉なことに目的とする無線機器を取り扱う店舗の連なりが見つかった。数件だけ軒を連ねて、多くは業務用機器に至るまで雑多な商品を扱う店々だ。先刻までは幾ら探しても見つからなかったというのに、腹立たしい話もあったものだ。

思わず地面を転がっていた空き缶を蹴り飛ばす。

「糞……」

怒りに任せて店の軒先を潜った。

高ぶった感情は財布の紐を緩くする。

俺は有り金の限り無線機の類を買い漁った。帰りはタクシーで良いだろうと、駅のコインロッカーを利用して、十台、二十台と店員側が怪しむくらいに買いまくってやった。なんだか良く分からない機材も買った。とにかく目に付くものを只管に買った。金だけは沢山あったので、週末に買い物でストレスを発散するオフィスレディのように、手当たり次第に商品を買って回った。

「おぬし、また来たのか……」

医務室から顔を出した猿人が呆れた様子で口を開いた。

「何度も顔を顔を出して、すみません」

「いや、まあ、儂としては別に構わんのじゃが」

色々とあつて勢いのままにやってきてしまった。足元には大きなダンボールが幾つか並んでいる。いつもの食料品の買出しに比べれば可愛いものだけれど、価格的にはその倍以上の金額を必要とする代物だ。

「それはなんじゃ？ 食い物か？」

「いや、少しはこっちの助けになるんじゃないかと思って……」

そう語りながら封を開ける。

多少だけ雨に濡れてしまっているが、中身は全く問題無い。

「そっちの世界は雨でも降っておるのか？」

「ああ、だもんで食糧の買出しは今日は難しく、代わりにこんなのを買ってきたんだ」

「なんじゃ？ それは」

俺は梱包から取り出したトランシーバの一組に電源を入れると、その片割れを猿人へと手渡す。既に購入時の包みは解いて、乾電池も部屋で詰め込んだのである。説明書も流し読みしたので使い方は問題ない。

手にした縦長の筐体に首を傾げる猿人。

「それ、こつやつて耳に当てる貰えませんか？」

「こ、こつか？」

「そう、そのままの状態で行って……ください」

そして、猿人のそれが受信状態であることを確認する。ディスプレイに異常が無いことを確かめて、俺は対になるもう一方より集音部へと語りかけた。

「もしもし、聞こえますか？」

「おお？」

すると、猿人は少しだけ声を出して驚いた。

「なんじゃ、おぬしの方が聞こえてきおった」

「俺の世界の道具でトランシーバーって言うんですよ。こつ、離れた人と会話をする為のものなんだけど、こつちの世界にもこつという道具とか、同じような魔法とかってあったりしますか？」

「いや、その手の話は聞いたことがないのお……」

「っていうと、やっぱり手紙とか、そういうのでやり取りしてる感じですか？」

「そうじゃのお、基本は足の速い者が手紙を持って飛ぶことになっておる。声を大きくする魔法もあるにはあるが、それとはまた趣が違うしのお。儂も世の全てを知る訳ではないが、他に同じようなものは見たことが無い」

「そっか、良かった。金の無駄遣いにならずに済んで」

「つまりなんじゃ、おぬしはこれを儂らに使ってくれと言うのか？」

「かなり便利だと思っただけど、どうですか？ 俺の世界だとこれが無いと戦争ができないって聞きます。それくらい重要なものだとは思っんですけど、やっぱり、世界が違うと意味ないですかね？」

「ふむ……」

俺が言うと猿人は手にした無線機を眺めて何やら考える素振りを見せる。

「一応、それなりの数を持ってきたんですけど」

感情の溢れに任せて購入したもので、自分でも幾つ買ったのか憶えていない。商品の種類もばらばらだし、それぞれの機能も禄に確かめていない。ただ、その数だけかなりあった。

「こちらの世界へやって来たのも、そう、ヤケクソ気味な現思考の賜物だ。」

「そうじゃな、これは姫様に報告してみるか」

「いいんですか？」

「うむ、僕には使い方が分からんからおぬしも一緒に来るといい」

「あ、はい」

トランシーバーを俺に返して歩き出した猿人。その後を追って俺もまた廊下へと出る。城内は相変わらず騒がしくあって、その喧騒は先刻まで歩いてきた都市部に引けを取らない。様々な化け物が入り乱れて戦争の支度をしていた。

俺達は言葉数も少なく早歩きで廊下を進む。

すると、辿り着いた先は今まで来たことの無い一室だった。

「姫様、少々よろしいですかのお？」

軽いノックと共に猿人が恐る恐る尋ねる。

「どうぞ、入ってください」

少女の声を確認して扉が開かれる。背は低いけど意外と図体のかいガロンの背に隠されて、すぐに俺が中の様子を伺うことは叶わない。ここは何の部屋だろうと疑問を感じながら、彼の背中越しに垣間見える光景から疑問を浮べる。

「ガロン、何か火急の用件でもできたのですか？」

「姫様にお話があつて参りました」

「話ですか？」

「はい、少々お時間よろしいですか？」

「ええ、構いません」

少女に頭を下げた猿人は俺を自らの隣へと引き寄せる。

ともすれば、相手もこちらの存在に気づいたらしい。多少だけ驚きつつも声をかけてきた。ここ一週間で随分と耳に馴染んだ声色である。凜としてよく通る彼女の声は聞いていて心地が良い。

「ん？ 人間、貴方は既に元の世界へ帰ったのではなかったのですか？」

部屋の中には少女だけが居た。

ベッドや机椅子、鏡台など、彼女の私室を思わせる室内風景である。

「あ、いや、なんというか、こつちのことが気になって、色々と考えたんですけど、何か手伝えることはないかと思って、俺の世界の道具を持ってきました。良かったら見て貰えませんか？」

「そちらの世界の道具ですか？」

「これなんだけど……」

ベッドに腰掛ける少女の元まで歩いていく。

彼女もまたこちらに合わせて立ち上がる。

その正面に立って、猿人より回収したトランシーバーの片割れを手渡した。筐体を渡すに際しては互いの指先が少しだけ触れたりして、ドキつとしたりもした。けれど、相手は微塵も気にした様子はなく、手にしたそれを興味深そうに眺めていた。

「これは何ですか？」

「離れた人と話をする為の道具なんだけど、耳に当てて貰えませんか？」

「……こうですか？」

「あ、もうちょっと下です、こんな感じ」

自分の持つ相棒で具体例を示しながら俺は彼女と距離を取る。

「こうですか？」

「そう、そんな感じです」

少女が耳に筐体を当てたのを確認して、俺は猿人のときと同様にトランシーバーへと語りかける。こういうときは語りかける言葉に悩むのだけれど、まあ、いつもどおりで良いだろうと適当に選ぶ。

「もしもし、聞こえますか？」

少し気恥ずかしい。

「ん？ 人間、貴方の声の中から聞こえてきました」

すると、少女もまた猿人と同じ反応を示した。

「こつこつという道具なんですよ。結構な距離まで届くんですけど、どうですか？」

「なるほど……」

一度の実演で彼女もトランシーバーの機能を理解したらしい。なにやら関心した様子で手にした筐体を眺め始めた。あまりボタンをポチポチ押されると俺も良く分からない状態になってしまうので困るけれど、その辺は黙っておく。

果たしてこれが彼女達に如何様な評価を受けるかは分らない。ただ、少しでも勝機が上がってくれることを祈っての持込みだった。

この世界の人間がどれだけ性悪かは知らない。けれど、こうして俺を迎えてくれた少女達は非常に良い者達だったので、そんな皆々が口を揃えて悪だと評価するのだから余程だろう。ならばこそ勝つて貰いたいと切に願う。

「どうですか？ 少しは使えますか？」

「これはどれくらいの数があるのですか？」

「百組以上は持ってきましたけど……」

「それはまた結構な数ですね」

「え、ええ、ちょっと色々あって、考えなしに買ってしまったもので……」

まさか友達に裏切られたから、その鬱憤を当てて買った、などは口が裂けても言えない。当初より購入するつもりではいたけれど、まさかダンボール箱で二桁以上も購入するとは思わなかった。しかも、なんだか良く分からないまま買ったものまで紛れているし。

「我々が守るべきは街全体です。これは存外利用用途があるかもしれません」

「そうですか？」

「ええ、一度皆を集めて話をしてみましょう」

そんな少女の言葉に応じて先の会議室に今一度同じメンバーが揃う運びとなった。自分の持ってきた物で、あの強化化け物軍団が揃うのはかなり怖いんだけど、俺もまた彼女の頼みにより同席する運びとなった。

会議室に集まった面々は数刻前に訪れたときと同じ顔ぶれに思えた。とはいえ、化け物達の個体を識別することは非常に困難である。ただ、なんとなく雰囲気と同じように思えたので、そう考えた次第である。

そして、その者達の面前でも猿人や少女の前で行ったとおり実演を行った。例によって片側を化け物達に持って貰い、もう一方から語りかけるといふやつである。

与えられた反応は化け物によってバラバラだった。かなり関心を持ってくれた者もいれば、こんなものを使ったところで何ができると突っぱねた者もいた。特に顔が凶悪な化け物こそ、また、図体がでかい化け物こそ、後者の傾向が強かった風に思える。

その結果、小一時間の論議では賛成反対共に入り乱れたもの、とりあえず使ってみよう、という話の流れになった。ただ、統合してこちらが想像したほどの食いつきは得られなかった。自分達のお姫様が持ってきた話だから、とりあえずは聞いておこう。そう思った流れに思えた。

まあ、無駄金にならなかつただけましなのでホッと一息だろう。

そして、いざ使う運びとなったのならば、実用に差し当たり利用方法を教えなければならぬ。まさか日本語で書かれた取り扱い説明書を読める者はいないので、その役目は俺に回ってきた。比較的人間に近い体格で、細々とした指の扱いが可能な化け物達に簡単な使用方法を教えることとなった。

皆々はかなり頭が良くて、一度教えると大多数はすぐに使い方を憶えてくれた。長い時間を恐怖面に向き合わずに済んで、こればかりは失礼かもしれないが非常に助かった。小一時間も壇上に立つて語れば一通りの操作方法を伝えることができた。

そんなこんなで時間が過ぎて、時刻が午後三時を回ろうかという頃合のことである。トランシーバーの教室を終えた俺の元へトカゲ

が一匹やって来た。それは今までずっと少女の傍らに控えていたトカゲである。

「人間、少し良いか？」

「あ、はい、何ですか？」

三メートルほどの長身を持つ彼だ。

頭上より見下ろされて思わず気が引ける。

「お前に話がある、悪いが共に来てくれないか？」

「は、話……、ですか？」

「ああ、ここではできない話だ」

「はあ、分かりました」

彼の言葉には有無を言わせない迫力があつた。

自然と敬語が出る。

まさか逆らう理由も無いので大人しく従つた。すると、こつちへ来いと言ってトカゲが歩き出す。会議室を後とした彼は、そのまま城の廊下をしばらく歩いて別の一室へと入っていった。歩幅の広い相手なので、自然と駆け足になりつつ背を追つて、俺もまた同様に部屋の敷居を跨いだ。

すると、待っていたのはトカゲの他に雁首並べた化け物達だった。

様々な種類の化け物が思い思いに部屋の至る場所へと身を置いている。会議室より多少だけ広いその部屋にあっても、十数匹からなる化け物が顔を揃えていては、敷地面積の割に随分と手狭く感じた。

「あ、あの……、話ってなんですか？」

なんだこのモンスターハウスは。

いよいよ俺を取って食う気になったのか。

そんな疑心暗鬼に駆られた。全ての化け物は非常に強烈な外観を持っている。人間など丸齧りにしてやる。自然とそんな気迫が伝わってくるほどだ。だから、身構えるなど言うほうが無茶である。

「ここに居る者達は、この国に身を寄せる数多くの仲間達の中にあつて、特に数が多い主だった種族を率いる、言わば族長にあたる者達だ」

傍らに立つトカゲが語る。

「本来ならば全員を紹介したいところだが、今はそれだけの余裕も無い」

「それは、えと、そんな偉い方達が俺に何の用ですか？」

「一つ、無礼かとは思いますが我々からどうしてもかなえて欲しい願いがあるのだ」

頑張つて平静を装いつつトカゲとの会話に勤める。

「な、なんですか？」

その場の化け物達は誰も彼もがジッと俺を見つめている。特に何を言うでも無く、ただ、ジッとこちらを見つめているのだ。その圧迫感といったら凄まじい。今すぐにも部屋から逃げ出したい欲求に駆られる。

「この度の戦いは嘗てなく凄惨なものとなるだろう」

「……はい」

「そして、お前も薄々は感じているかもしれないが、我々の勝機は非常に薄い」

「……………」

「人間共にこの国が焼かれ、乱され、蹂躪されるのも時間の問題だろう。勿論、我々は精一杯に戦う。命の限り戦い続けるだろう。しかし、それでも敵を退けることは非常に難しいだろうというのが、この場の全員の共通した見解だ」

そうしてトカゲは部屋に集まった化け物達をぐるりと見渡す。

皆々はそれに言葉を持って答えることはなく、ただ、黙ってその姿を見つめているに限る。化け物の姿から感じるプレッシャーに加えて、敗戦を想定した非常に物悲しい雰囲気に住た堪れない気持ち溢れた。

「だから、お前に一つ頼みたいのだ」

「……な、なんででしょうか？」

「もしも我々が敵に破れ息絶えたとき、姫様だけでもお前の世界へ連れ逃げて欲しい」

それは何となく想定していた頼みごとだった。

「姫様とその父親たる前王は、この大陸で人間共に虐げられては散り散りに暮らしていた我々を纏め上げ、そして、土地を切り開き国としての体制を整えてくださった。安定した生活を齎してくださいました」

「……………」

「そんな前王も数月前には人間に討たれ亡くなり、また、元王たる姫様も今や国と共に命費えようとしている。そんな現状をこの場に集まった誰も彼もは憂い悲しんでいるのだ。これだけ我々の為に働いてくださった姫様を人間などに討たせてはなるものか。そう強く願って止まないのだ」

トカゲは拳をグツと握り締めて、いつになく熱く語ってみせる。

「そうだった！ 姫様を討たれるなど我々は絶対に許せぬのだっ！」

「だから、頼む、人間よ。お前の力で姫様を逃してやってくれっ！」

「私からも頼むっ！ どうか姫様をお守りして欲しいっ！」

「姫様だけは、人間共に討たせるわけにはいかぬのだっ！ このと

おりだつ！」

トカゲの語りに合わせて周囲から一斉に懇願の声が上がりはじめた。種族を関係なく誰も彼もが必死に姫様を助けてくれ、姫様を逃してくれ、そう言うのだった。国をでなく、ただ、姫様を、と。

あの少女は随分と愛されているらしい。

そして、そこまで強烈に願われては断ることなんてできなかった。

「そ、それで皆が良いというなら、断る理由なんてないけど……」

「やってくれるか？」

審議を確かめるようトカゲがグツと顔を覗きこんでくる。

「本当にそれでいいんですか？」

「……ああ」

そうして答えるトカゲの表情に苦味が混じって思えるのは当然か。

彼らにしてもこれは苦渋の選択だろう。

「では人間よ、約束はできるか？」

「ええ、自分も元々は彼女の為に色々としてた訳ですから……」

そう答えて今までの行いがどういった理由によるものかを思い起こす。猿人に命を助けて貰ったのと、少女の悲しそうな顔を見てし

まったのと、あとは多少の好奇心と。そうつらつら思い起こしたところで、その実、全ては自分に向き合ってくれる存在が欲しかっただけなのだと思えるに至った。

彼女から感謝されたのが、他に何も無い今の自分にとって素直に嬉しかったから。

だから、今までせつせと食べ物彼女の下まで運んでいたのだから。

教室で友人達からの酷評を耳として、他に誰も自分の相手をしてくれる存在がいなくて、だから、こちらの世界へ無理矢理に意識を向けていたのだろう。こちらの世界にいれば、少なくとも驚きの連続で嫌なことは忘れられたから。

彼女が呼び出してくれたから、今も究極まで塞ぎ込まずにいられる。

多分、それは結構、大きいのではないか。

「本当に、やってくれるか？」

「はい、約束しますよ」

だから、くどいほど再三に渡り尋ねられて首を縦に振る。

俺は部屋に集まった化け物達を前に肅々と頷くのだった。それを彼女が受け入れるかどうかは分らない。でも、俺もまた目の前の化け物達と同様に、彼女が死んでしまふところは見たくなかった。

「けど、貴方達も頑張ってくれ……んですよ？」

とは言え、全滅前提の負け戦なんて見たくない。

少しだけ不安になって、恐る恐るといった風に化け物達へと問い掛けた。ともすれば返されたのは耳を突くような咆哮の雨あられだった。わっと一気に沸いて皆々が口を開き始める。

「当然だっ！ 人間など見事蹴散らしてくれるっ！」

「そのとおりだっ！ たとえこの身が朽ちようとも城は守り抜くわっ！」

「それこそお前に心配されるまでもないっ！」

「お前は城で姫様の隣に立っていれば良いのだっ！」

「そうだ、我々は人間などに負けるものかっ！」

化け物と言うのは情に厚い職人気質な性格の持ち主が多いらしい。耳が痛いほど部屋に反響する皆々の熱い語りを聞いて、漠然とそんなことを思うのだった。何故か、その目は厳しくも笑って見える。

「……頑張ってください」

俺もこんな友達が欲しいとか、願ったら、失礼にあたるだろうか？

その日、俺は初めて両親に内緒で外泊することとなった。

できる限り城に居て欲しいというトカゲ達からの要請が所以だった。そして、いざ実行するに当たっては、門限？ 俺だったら勝手に遊び出かけるけど、そんな阪部の言葉に背中を押されての敢行である。

とは言え、夕食は自宅ですっかりと食べたし、おやすみと声をかけて部屋へ入るまではずっと家にいた。ただ、ベッドへ入る振りをして、そのまま屋根裏部屋へ運び込んだ姿見へと指先を触れさせたのだった。いきなり夕食からポイコットするには、今の自分には度胸が足りない。

そして、無事に城へ迎えられた今は少女の私室にいる。

「あの、話ってなに……ですか？」

何故かと言えば部屋の主に呼ばれたからに他ならない。

「人間、貴方に一つ尋ねたいことがあります」

「なんですか？」

「貴方はこの度の戦い、我々に勝機があると思いますか？」

テーブルを挟んで椅子に腰掛けた少女が問うてくる。

卓上には緋色の液体の満ちるビンとグラスが二つ置かれていた。中身はいわゆる酒である。水で割ってあるので然してアルコール度の高いものではないが、一口、二口を喉にして少しだけ頭が痺れていた。無断外泊に加えて、生まれて初めての飲酒である。

「えっと、自分は敵の戦力を知らないんでなんとも言えないけど……」

「では、敵の戦力を考えず勘で選んでくれませんか？」

「か、勘ですか？」

「はい、勘です」

少女が何を言いたいのかわからなくて、俺は返す言葉に戸惑う。

だって、部屋には彼女の他に誰の姿も無いのだ。普段だったら必ずくっついているトカゲも今は姿が見えない。部屋の外に居るのだろうか。分らないけど、ただ、実情として、薄暗い照明の灯る室内に俺と少女とは二人きりなのだった。

彼という脅威を退けて、暗に俺の心意気を試しているのだろうか。

「ここまで片側に感情の押し入った賭けはどうかと思うけど……」

「やはり、我々は駄目ですか？」

「いや、賭けるなら君達の択一だけだ」

「貴方には、そう思って貰えますか？」

「少なくとも君達はとても良い人だから……、じゃなくて、良い化け物だから」

「良い化け物？ 本当にそう思いますか？」

「う、うん。そう思うよ？」

自分が知る人間よりもよっぽど人間らしい気がする。

いや、性格を計るのに人間という言葉を使うのは彼らに失礼だろうか。

「我々は人間を喰らうのですよ？」

「え？」

「人間が牛や羊を食べるように、我々は人間を喰らうのです。それを理解した上で貴方は我々を選ぶことができますか？ 食に困ったときは、もしかしたら、貴方の身体へ齧りつくかもしれませんよ？」

「い、いや、それは……」

今までにも、そういう奴だっているだろうなあ、などと考えなかった訳ではない。

しかし、こうして彼女の口から言われると引いてしまう。

「それでも貴方は我々の味方でいられますか？」

「それは、その……」

返す言葉に困る。もしも頷いたのなら自分はどっなくなってしまっのか。まさか、この場で食べられてしまうことは無いと思う。けど、それはそれで嘘をついているようで嫌だ。だけど、ならば如何様に答えれば良いのか。

「……………」

「素直に答えてくれて良いですよ」

「いや、えっと……」

追い討ちをかけるような少女の物言い。

本当に彼女は何を言いたいのか。

どう答えたものかと頭を悩ませる。俺が口を開かなければそれで会話は途切れてしまう。だから、部屋は他に音もなく静かになった。ランプの火が作る色の濃い影が、極僅かゆらゆらと物悲しく震えている。

「……………人間、ヴラドから何か言われたのでしょうか？」

不意に知らぬ名が少女の口から零れた。

「え？ ヴラドって……？」

「私の腹心ですが、まさか名前を知りませんでしたか？」

「あ、ああ、もしかして、いつも一緒にいるトカゲ頭の……」

「それは本人には言わないほうが良いです。切られますから」

「えっ、あ、す、すみませんっ……」

「ですが、今は居ませんから大丈夫です」

そうして少女はやっぱりと穏やかな笑みを浮かべた。

その一瞬は、今迄で見た彼女の笑顔でも指折りだった。薄暗い明りに照らされてぼんやりと黄金色に輝く髪が美しい。深い蒼色の瞳に魅入られて、その奥深くまで吸い込まれてしまいそんな錯覚を覚える。

「大凡、私を貴方の世界へ逃して欲しいと、そう請われたのではありませんか？」

「あ、え……、どうしてそれを？」

「あの者の考えそんなことなど容易に理解できます」

「そ、そうですか」

全然駄目じゃん、そんな突込みをヴラドとやらに入れてやりたくなった。

そして、そんな俺の心中を知ってか知らずか、少女は独白するよ

うに話の続きを語りだした。

「私は人間ではありません。人間に紛れて暮らすことなどできません。この地は父上が守らんとして散った地なのですから、私も散るならばこの地で散りたいと、そう切に願うのです」

「散るって、君、そんな……」

「私には父上が守ったこの国を、同様に守ってゆく義務があるので
す」

「……………」

笑顔であったのは一瞬のこと、一変して今度は少女の顔がきりりと引き締まる。

「ですから、私はこの地を離れることなどできないのです。もしも、貴方がそれを行うというのなら、私は貴方の世界の人間の一人残らず喰らい尽くしす覚悟があります」

「喰らいつくすって、そんな……」

「ですから、余計なことはしないで欲しいのです」

「いや、でも、それじゃあ君は……」

「我々は人間を喰らうのですよ？ 恐ろしくないですか？」

「だ、だから、それは……」

「この戦にしても、立場を変えて人間の側から眺めれば、我々と言う危険な捕食者を殲滅する意味もあるでしょう。勿論、それは種を守る為に非常に効果的な行いだと私も思いますし、同じ立場なら賛同するでしょう」

「で、でも、君達は酷い目に遭ってるって……」

「それも互いに同じことです」

何を言おうとしても言葉が最後まで続かない。

「これ以上、貴方を巻き込むわけには行きません。今からでも遅くありませんから、どうか貴方は貴方の世界へ戻ってください。これ以上、他所の世界の者の手を煩わせることはありません」

「……………」

「これが、私からの最後のお願いです。今まで面倒事ばかりを頼み込んで、そして、今に至ってはこのような尊大な態度ですが、どうか許してください。ここは貴方にとって死地にも等しいのです」

そうして、少女は静かに頭を下げた。

そんな彼女に俺はなんと答えるのが正解なのか。

「理解して貰えませんか？」

そうしてこちらを見つめる少女の瞳には頑なに意思が見て取れた。決して譲らないぞと、可愛らしくも凜々しい眼差しが言葉以上に強く訴えかけてきていた。外見は小さな子供なのに妙な迫力がある。

だから、俺はどうして良いか分からずに見当違いなことを口にしてしまう。

「た、例えばさ、人間の話なんだけど……」

自分が何を言いたいのか、自然と口から勝手に言葉が漏れる。

「なんていうの？ ほら、自分が飼っている家畜へ同族に向けるのと同じ愛情を向ける奴がいるんだよ。他にも、鳥が翼を持っていることを心底羨ましく思って、嫉妬すら向ける奴だっているんだよ」

それはいつだかテレビや新聞、果てはネットの記事で眺めた話題だ。

「……何の話ですか？」

「いや、それどころじゃなくて、ただの道具を相手に結婚式を挙げるような、そんな馬鹿だつて俺の世界には居たりするんだ。愛着とか、そういう次元じゃなくて、性的に興奮するとか、そういうレベルで」

「人間？」

「君達にとって俺という人間がどういった位置づけにあるのかは分からないよ。けど、君達は今まで俺に優しくしてくれただろう？ 勿論、それは全てが食糧の為であつたかもしれないけど」

「……………」

「でも、こっちはそれでも十分に嬉しかったんだよ」

そこまで言って、段々と心のうちに語るべき事柄が形を成していき。

「だから、そういう勘違いだってあってもいいと思うんだよ。所詮、生き物なんてどこまでもバラバラで、互いに上手く理解できないだろ？ だから、互いに円満でなかったとしても、どちらか一方が感じている幸福は決して嘘じゃないと思うんだよ」

「私が貴方をどのように捉えているか、気になるのですか？」

「そりゃ気になるだろうけど、でも、仮に食糧だったとしても、家畜だったとしても、全てが嘘だったとしても、それわそれで救われることがあると思わない？ 仮に一方では真っ赤な嘘だったとしても、もう一方にとっては掛け替えの無い幸せであって、良いと思うんだよ」

「人間、我々とは高々一週間の付き合いですよ？」

「時間だってその範疇に含まれると思わない？」

「……………」

そう、今までの自分が嘘だったなんて、そんなことは認めたくない。

問題は山積みだけど、過去の自分までは否定されなかった。

他人が認めないというのなら、せめて自分だけでも認めて、それ

を確たるものにしてやらないと悲しすぎる。そう思える気がした。少女と話していると、そんな前向きな気持ちになれるのだ。

「そういう意味で、君達には感謝してるんだよ」

「……そうですか」

「だから、それが勘の理由じゃ駄目？」

胸の内に支えていたものを勢いに任せて吐き出した為か、支離滅裂な語りになってしまった。ただ、それで少しだけ鬱な気分が外へ出て行ったのは事実である。それに言われるがまま帰るのは彼女達に負けた気がして嫌だった。

「まあ、何故に感謝しているかは恥ずかしくて言えないんだけど」

そう、中学生とは多感な時期なのである。

こうして熱く語ってしまうことだってあるのだ。

「なかなか一方的な理由ですね」

「そう言っただろ……じゃないですか？」

「ええ、まあ、そうでしたね……」

「それに人間だって、飢えれば人間を食べることだってあるんだしね」

「……ええ、そのとおりです」

少女が頷いたのを確認してゆっくりと席を立つ。

ただ、これ以上を彼女に迷惑をかける訳にはいかない。ここまで明らかに拒絶されて尚も共に居るのは気まずかるう。トカゲ達には申し訳ないが、ここは身を引くしかないように思える。全ては彼等自身の分かり易い性格が原因だと思って諦めてもらおうとしよう。

「帰るのですか？」

「はい、これで帰ります」

小さく会釈して廊下へ続く扉に手をかける。

これで少女とはお別れだと、そう強く感じた。

そんなときだった。

いつか身に受けた憶えのある強烈な揺れが我が身を襲ったのは。

足元が左右に動いたかと思うと、次の瞬間には建物全体が激しく上下左右にガタガタと震えていた。反射的に掴んだドアノブにしがみ付いて、危ういところで尻餅を突かんとしたところを回避する。

「なっ!?!」

後ろを振り返れば、少女もまた驚いた様子でその場に佇んでいた。

テーブルを両手で掴んで、危うくも二本の足で立っている。大して重さのない酒瓶やグラスは揺れ始めてすぐに床へ落ちた。無残に

も割れ散ってしまったっている。毛も深い絨毯に紫色のシミがじわじわと広がっていた。

地震が収まると、少女の私室にはすぐにトカゲが飛び込んできた。

多分、彼女からヴラドと呼ばれていた彼である。

「姫様っ！ ご無事ですかっ!？」

「はい、それよりも状況を報告してください」

「はっ！ ただいま人間より前回と同様の攻撃を受けました」

「それで、被害はどうなっていますか？」

「それが何故か結界を維持する陣の位置が人間共にはれていたらしく、その内の二つへ集中的に砲撃を受けてしまいました。結果、術師の幾人かが負傷して、現在は結界の大きさが従来の三分の一程度に落ちています」

「け、結界が破られたのですかっ!？」

「幸いにして城は残る三分の一に含まれていますが、街の外郭は既に人間軍が大挙しております。我々も即座に防衛へ向かいましたが、苦しい状況にあるのは間違いないかと思えます」

「まさか夜に仕掛けてくるとは……」

少女の顔がみるみるうちに青白く変化していく。

「とりあえず、私と一緒にテラスまで参ってください」

「分かりました、すぐに支度をします」

そうして彼女は手早く着替えを始めた。

俺はと言えば彼女が衣服へ手をかけたところで、トカゲの手によって部屋の外へと連れ出されることとなった。いや、自発的に出るつもりではいたけれど、相手の手が伸びる方が早かったのだ。

そして、廊下へ出て部屋の扉を閉めたところで声をかけられる。

「人間、もしものときは頼んだぞ？」

「……いや、それなんだけど」

先刻の少女の主張が即座に脳裏に思い浮かべられた。

どうして答えたものかと頭を悩ませる。まさか嘘を吐いて頷く訳にもいかない。けれど、やっぱり嫌だと、理由も説明せずに断るのも後が怖い。何か良い断り方はないかと非常に焦る。

すると、凄まじい勢いで開かれた扉から少女が飛び出してきた。

「ヴラド、支度ができました」

「はっ！ それでは参りましょう」

一体どんな魔法を使って服を着替えたのか。

数分とかわらずパジャマから普段着へと着替えた彼女がいた。

そして、そんな主人に促されてトカゲは俺との会話も早々に歩み始める。姫様もその後を追って足早く歩を進める。ならば、俺は二人の背について行く以外、他に選べる手はなかった。

やがて辿り着いたのは城の正面に設けられた規模の大きなテラスだった。

目前には地平線まで続く夜空と、その下に眺める街が広がる。

「戦況はどうなっていますか？」

「はっ！ 魔法に長ける者達は結界の規模拡大に向けて奮闘しております。他の者達は街の内部へ攻め込んで来た人間達とぶつかっております。民も弱者を除いて外壁に付き防衛に勤めているとのことです」

「何はともあれ、結界を復活させるのが第一です。私も行きましよう」

少女がテラスの外枠へと手をかける。

けれど、その肩に手を置いてトカゲが彼女を止めた。

「いえ、姫様はここでお待ちください。既に人間は街内部にも入り込んでいます。万が一にも姫様が討たれるようなことがあっては、この国は人間に奪われるまでもなく終わってしまいます」

「しかし、私ならば幾らか手伝いができる筈です。こうして何もせず手を拱いてばかりはいられません。今も血を流し戦っている仲間がいるのですから、それに加勢せずには何が姫ですか」

「ですが、その、お言葉ですが、姫様は成竜ではありません」

「そ、それは、そうですが……」

「どうか姫様は城に残ってください。これは私達、この国に住まう者達全員の意向なのです。我々はここが姫様の住まう城だからこそ守っているのです。その熱意を奪うようなことはしないで欲しいのです」

そうして語るトカゲはいつになく熱弁だった。

「姫様はその人間と共にここで我々の戦いを見守っていてください」

「ま、待ちなさい」

「人間よ、姫様を頼んだぞっ！」

そうして、彼は言いたいことを一通り言い終えたらしく、俺や少

女に背を向けると、何を考えたのかテラスの柵を越えて宙へと躍り出るのだった。まさか飛び降り自殺かと目を瞬かせたところで、彼の身体が変化した。そして、次の瞬間には巨大な竜の姿へと変化していた。

「う、うおお……」

思わず声が漏れた。

まさか変身するとは思わなかった。

「待ちなさいっ！ グラドっ！ これは命令ですっ！」

少女は声を張り上げて竜に請う。けれど、今まで目の当たりにしてきた忠義が嘘のように、彼は彼女の意思を無視して遠く空を飛んでいってしまった。ばっさばっさと羽ばたかれる翼が彼女の言葉の全てを掻き消しているように思えた。

その向かう先へ目を凝らしてみれば、何やら火薬の爆ぜる音と共に眩い閃光の光る様子が伺えた。それが人と化け物との争いだと理解できたのは、周囲の建物より遥かに巨大な体躯を持って火花を蹴散らす異形達が幾つも見られたからだだった。

初めて見る戦争は、まるで怪獣映画でも見ているようだった。

「凄い……」

金属のぶつかり合う音、人のものとも化け物のものとも思えない怒声と悲鳴、大砲の打ち出される爆発音、正体不明の魔法が放たれる炸裂音、街の建物が崩れ倒れる破壊音、近く遠く様々な音が聞こ

えてくる。

「戦場はまだ遠く合戦の場は数キロ先にある。」

けれど、それもいつまで持つか分からない。何やらある特定の場所を境に、城の側へと一切の火花が散らないのは、少女達が言う境界とやらの効能だろう。その境界は水と油の境界面のようである。

「くっ……」

俺の傍らでは少女が悔しそうに拳を握っていた。

「あ、あの……」

「人間、私も出ますっ！ 止めるではありませんよっ！」

「いや、ちょ、ちょっと待ってよっ！」

「待ちませんっ！」

「いや、違う、そういう意味じゃなくて、とりあえず話を聞いてっ
「！」

今にも駆け出さんと足を浮かせた少女。その腕を慌てて取った。すると、彼女は珍しくも憤怒の形相で俺を睨みつける。いつも優しくかった人間に睨まれるというのは悲しいものだ。胸がジクリと痛む。

「ならば何だと言っのですっ！」

「いや、君ってばこの城の総大将だろ？ そんな人間が前線に立つ

てどうするんだよ。なんの為に俺が無線機を持ってきたと思ってるんだよ。大将なら大将らしく、上座にドンと座って下についた者を動かしてやらなきゃ駄目だろ？」

「この状況で伝令を運んでいる余裕はありませんっ！」

「いや、だから、その為の道具なんだっつー！」

「ですが、仮にそうだとしても、今の状況で私から何が伝えられるというのですか。既に私が指示を出さずとも結界の拡大、侵略への防戦、共に理に叶った動きをしています。ならば一人でも多くその場へ走るべきではありませんかっ!？」

「けど、戦況なんてすぐに右へ行ったり左へ行ったり移り変わるものじゃないの？ それだったら、誰かが皆をまとめて指示を出したほうが絶対に効率がいいって。そして、それこそ君の仕事なんじゃないの？」

「そ、それはっ……………」

「ほら、せっかく向こうの世界から持ってきたんだから、君も少しは使ってみてよ。皆には首に下げているよう伝えてあるんでしょ？ それだったら君の声を聞かせるだけでも励みになる筈だから」

「……………」

トカゲの言葉を最後まで守ることはできないと思う。

けれど、せめて彼らが己の領分を全うするまでは彼女を生き永らえさせたい。

「で、えつと……、何処に中継器を置いたっけ？」

「……貴方は随分と物覚えが悪いですね」

「え？」

「こちらです。私について来てください」

「あ、はい」

走り出した少女の後を追ってテラスから城内へと移る。

城は非常に広く大きい。身体の大きな化け物も過ごせるように作られているから当然と言えば当然だろう。だから、自然と迷子にもなりやすいのだ。幾ら一週間を過ごしたとはいえ、その構造は未だに頭に入っていない。

先を進む少女は随分な健脚であつて、俺は後を追うので一杯一杯だった。その勢いといったら五十メートル走の全力疾走を延々と続けているようなもの。しかも階段の上り下りを挟んでは堪らない。やはり彼女も大した化け物だった。

やがて、しばらくを走ると彼女が廊下脇へと消えた。

慌ててその後を追って同じ場所へと足を踏み入れる。

すると、その頬をつめたい夜風が撫でた。

「じゅっ……」

そこは城でも割と高い塔の最上階、その外面だった。然して高くない柵を越えて眼下に広がる光景に思わず唾を飲み込む。近代の高層ビルと比較すれば低いけれど、それでも数十メートルの高さがある。

「人間、ここです」

彼女が指し示した先には木箱を加工して作られた木製の庇と、その影に備えられた無線の中継器が置いてあった。同時に十台までの全二重通信を可能とする業務用のトランシーバー。その母艦ともいえる機器である。それが一つ、二つ、三つと幾つも並んでいた。それぞれ電源は、同じく店で購入した小型のエンジンバッテリーで動いている。今にして思えば幾ら気が高ぶっていたとは言え、大層な買い物をしたものだと思う。

「ここに向かって話しかければ君の仲間にも声が届くから」

そう説明して、幾つかのトランシーバーを取りまとめた束を渡す。

同時に中継器の電源を上げると、一斉に外部スピーカーから大量の音が発せられた。一瞬はノイズかとも思ったけれど、それぞれが端末から送られてくる戦いの音である。それは怒声だったり、破壊音だったり、悲鳴だったり、実に様々である。

そして、そんな音達を耳にして、少女が声も大きく叫びを上げた。

「み、皆っ！ 頑張れっ！ 頑張って欲しいっ！」

とても素直な語りかけだった。

「私はこの国を終わらせたくない、だから、皆っ！ 皆の為にっ！」
すると、スピーカーの向こう側から反応があった。

『お、おいつ、今姫様の声が聞こえたぞっ！？』

『姫様っ！？ 姫様かつ！？』

『誰かつ、この近くに姫様が居るぞっ！ お守りしろっ！』

『姫様だっ！ 姫様の声がこれから聞こえたぞっ！』

『お、おい、人間が持つてきた箱から姫様の声がつ！』

そんな声が幾つも聞こえてきた。そして、中継器を起動したことで、それぞれの端末間でも双方向通話が可能となる。互いの耳へ届く離れた場所で戦う仲間の声に驚喜の叫びが上がった。その様子に少女もまた甚く驚いた様子でスピーカーに耳を傾けていた。

「に、人間、皆の者の声が聞こえます。聞こえてきますっ！」

「随分と鮮明に聞こえるものなんだな、これって……」

トランシーバーなど久方ぶりに使った。昔に遊びで使った品はもつとノイズ混じりで悲惨だったと思うのだけれど、これはかなりクリアな音質で向こう側の声を伝えてくれた。流石は業務用と言ったところか。

「このまま語りかければ良いのですか？」

「多分、今の様子だと姫様が話しかけるだけで効果あるんじゃないかな」

そんな気がした。

「皆っ！ 私は今、城で皆の戦いを音に聞いています。戦いの場へ赴けないことを許して欲しい。だが、皆の勇士はしっかりと伝え聞いています。だから、皆は皆の為に頑張っって欲しいっ！」

『うおおおっ！ 姫様だっ！ 姫様が俺達の戦い振りを見守っているぞっ！』

『皆の者っ！ 人間などに負けるでないっ！ 我々には姫様がついているっ！』

『同士よっ！ 国を、民を守るのだっ！ 我等が姫様の為にっ！』

『いけええええっ！ すすめえええっ！ 絶対に城へは近づかせるなあああっ！』

『この程度の敵が捌けない道理など無いわあああっ！』

『殺せっ！ 殺せっ！ 殺せええええっ！ 姫様の為に殺し尽くせええええっ！』

姫様が何かを言う度に、誰とも知らない声が数多上がる。そこには泣き言など一つも混じっていない。誰も彼もが己を鼓舞させんと威勢の良い咆哮を上げて、彼女の語りかけに応じていた。

少女が語りかけては仲間が答える。仲間が少女に語りかけては少女が答える。そんなやり取りが幾度も繰り返された。聞いた話、数の差は十倍以上とのこと。しかし、届けられる言葉には絶望の色など寸毫として感じられない。誰も彼もがやったれやったれと血気盛んに声を張り上げていた。

『姫様っ！ 私達の戦いをどうか見守っていてくだされっ！』

『特攻っ！ 人間共に目に物見せてやれっ！ 姫様をお守りするのだっ！』

『こちら正門付近、まだまだ余裕でやれますぞおっ！』

『こちら南門付近、正門の者達に負けるなっ！ 我々は絶対に勝つんだっ！』

『おいつ！ 若い連中が加勢に来たぞっ！ 何処か力が欲しいところはあるかっ！？』

『こっちだ、北門に回してくれっ！ 人間共が押し寄せてきやがったっ！』

また、その威勢の良い声が端末同士でも互いに伝わったらしく、あいつに負けるな、こいつに負けるなと、それぞれ伝播している。また、自分が予定した本来の使い方をしてきている者達もいる。

仲間達の元気な声を聞いて、少女も少なからず落ち着きを取り戻し始めていた。

「人間、お前が持ってきた道具は大したものだな……」

「ああ、なんとか役に立ちそうであつた……」

当初は化け物達の素っ気無い反応から無用とも思つたのだ。

「ああ、これはとても嬉しい」

そうして少女はスピーカーから届く仲間達の声に耳を傾けるのだつた。

しかし、これだけではあまり意味が無い。折角、現場の者達が利用に慣れてきたのだから、ぶつつけ本番とは言え本格的に運用するべきだろう。少女の指示ならば誰だつて無碍には出来ない筈だ。そういう意味では、彼等は事前の訓練さえも然して必要としない最強の兵士達なのだと思う。

「これで、君が皆に指示を出せばいいんじゃないか？」

「私がか？」

「今までは誰がやつてたの？　そういうこと」

「これまでは現場にいる部族の部族長達がそれぞれ指揮を執っていました。父上もまた先頭に立って皆と戦っていたので、誰かが一番上にいて指示を出すようなことは、多分、一度もありませんでした」

「な、なるほど……」

彼女の父親は随分と大胆な性格の持ち主だつたようだ。

とは言え、それまではその父親が一番の戦力だったと言うのだから当然。けれど今は違ふのだから、それ相応の手を打つべきだと思う。特に籠城戦など事細かな裏方の働きが勝敗を決めると言っても過言ではない。と、この前にインターネットの流し読みで目にしたばかりだ。

「じゃあ、ここは君が頑張らないと駄目だろ……ですよ」

「しかし、指揮といっても何をすればいいのか私には分からない」

「たしか、この世界って怪我の治療は割と簡単なんだよね？」

瀕死の重傷を負った俺を数時間で傷跡一つ残さず治療して見せた城の医者ならぬ術者達を思い起こして彼女に問う。あれだけの勢いで怪我を治せるなら、気持ち悪い表現だけれど、化け物達の登場と降場のローテーションすら組める気がする。

「はい、骨が折れた程度ならば、それに長けた者が当たればすぐに治せます」

「だったら、ほら、誰か空を飛べる竜とか鳥とかに高いところまで上がって貰って、何処がやばそうで何処が余裕あるか、その辺を調べて貰うんだよ。そして、城の中に怪我人の収容所を作って、治療ができる者を置いて、負傷者を搬送するグループを作って」

「なるほど、分かりました」

俺の言葉に頷いて少女が端末に指示を出す。

顔が見えなくても君主の声を聞き間違える者は一人もいなかった。

彼女の言葉を信じてスピーカーの向こう側で化け物達が行動を開始する。それに手応えを感じて、俺は次に何をすべきか頭を巡らせ始めていた。

「人間、負傷者の搬送と治療が始まりました」

「それじゃあ、次は一番苦勞してるところを教えて欲しいんだけど

「はい、今までの伝令から判断すると、やはり正門が一番厳しいですよです」

「竜とか鳥とか、空を飛べる仲間もそっちは回ってるんだよね？」

「はい、空を飛べる者も多く戦ってくれています。ですが相手の数が膨大で、幾ら倒しても際限が無いのです。これは人間と戦うときはいつものことでした。父上の吐く火炎ならば一度に数百人と打ち払うことができたのですが、今の私では……」

なんでも人間は多少なら魔法で空を飛べるらしいが、飛びながら他に魔法を使うのが多少の難易度を必要とするのに加えて、化け物には人間より飛行に優れる種族が沢山いるので、主立って敵地で飛ぶ者はいないのだと言う。だから、本来は地对空魔法にさえ気をつ

ければ空は我々のものだ」と少女は語った。

そこで、それなら空から魔法でも落とせば良いじゃない、とは俺の弁。しかし、今回のように相手の数が多い場合、敵も数にものを言わせて空飛ぶ竜にさえ多かつて来るのだと言う。それはまるで象に群れる軍隊蟻のような現象だった。

「そ、それじゃあ、一番余裕のある場所を尻から二つ分かる？」

「それなら北門とその付近の堀に開けられた突入口での小競り合いですか……」

「それなら、その北門とやらまで結界を張れる誰かを連れて行ってくれない？ 片方を結界で足止めしておいて、もう片方をその両方の戦力で挟み撃ち、とか無理かな。負傷者の便に相乗りさせて何とか運んで欲しいんだけど」

「しかし、それでは結界の修復が遅れてしまう。良いのですか？」

「どうせ結界を張るのに必要な場所は敵がまだ占拠しているんだろう？ それだったら、そこで貴重な戦力を余らせておくのは勿体無いよ。それよりも効果的に使えるところで使っておいた方がよくない？」

「わ、分かりました、頼んでみます」

「あと、治療が終わった者は順次正門へ向けて送り出して」

「はい、そう伝えます」

少女がトランシーバーに向かってつらつらと指令を出す。

それに応じて彼女より指示を受けた誰かがスピーカー越しに動き始める。

既に戦局が開かれてから小一時間が経過していた。その間を俺と少女は現状の把握と現状維持に努めた。全ては僅かな勝機でも見出さんと望むが故である。そして、現場で戦う彼女の仲間達は、懸命にその指示へ従い、国を守ろうと必死に動いていた。反撃には程遠いけれど、先手を打たれた分を取り戻すことを目指して、様々な化け物が一丸となり頑張っている。

「あと、この城の金品ってまだ残ってる？」

「き、金品ですか？」

「俺が貰ったような金の延べ棒とか」

「はい、ありますけど、それがどうしたのですか？」

「どうせ取られるくらいなら、もう景気良く人間にくれてやってもいい？」

「……どういふことですか？」

少女の顔が訝しげに歪む。

「構わないなら敵が群がってる周りに、こっ、上手いことばら撒いて欲しいんだけど」

「はい？」

「相手は君達みたいな義理堅い化け物と違って欲深い人間なんだし、それで少しは気を散らすことができると思う。金を降らせたところで、空から一斉に攻撃してやれば効果大だよ、きつと」

「そ、そうですか？」

「これだけの人間が一挙に攻めてきているんだから、末端の兵士なんて大した結束もないんじゃない？　そもそも金や土地が欲しくて他所を攻めに來てるんだから、金を降らせてやれば混乱すると思うけど」

「なるほど、それはやってみる価値があると思います」

「まさか味方が拾いに走ることなんて無いよね？」

「当然です！　人間、あまり我々を侮辱すると許しませんよ」

「わ、分かってます。だからこそその提案だと思ってよ」

「はい、ではその通り伝えます」

「それと、投下のタイミングに合わせて付近の味方には一気に盛り返すよう伝えて欲しいです。あと、後で回収する予定があるなら、できれば踏みつけたりしないようにって言わないと」

「人間、既に貴方は敵に勝ったつもりでいるのですか？」

「叶うなら、君の部下との約束を破りたくないんだよ。色々怖い

し……」

語りながら件の一室で面を合わせた化け物達の姿を思い出す。誰も彼も凶悪な面をしていた。もしも約束を破るものなら、死して尚も向こうの世界まで追いかけて来ては、枕元に化けて出そうな勢いがある。それに、あの人の良い、いや、化け物の良い者達のことを無碍にするのも気が引ける。

「……そうですね」

「……………」

とは言え、彼女にも彼女で事情があるらしいから、困ったもんだ。

どうしたものかと視線を手元に向ける。ともすれば、そこには少女からの話を書き綴った状況地図がある。以前にリュックへ忍ばせて持ってきたレポート用紙と筆記用具による作品だ。それも逐次変化を見せるので足元には消しゴムのカスが大量に溜まっている。

「姫様っ！ 南門に新たな増援が近づきつつありますっ！ 少なくとも三千は集まっているものと思います。あと少して南門を守るオーガ族と接触してしまいます。こ、これは非常に大変ですっ！」

スピーカーから頭上を哨戒する鳥人より新たな報告が入る。

幸いだっただのは、高度からの状況確認が敵に邪魔されない点だろうか。嫌な報告ばかりで頭が痛いけれど、それでも無いよりは全然マシだろう。

「分かりました、少し待ちなさい」

『はっ！』

端末に短く断って少女がこちらを見つめてくる。

「つて、次は南門か、これはどうしたものか……」

「このままだと間違いなく突破されてしまいます」

「けど、何処も数千人を相手に加える余裕なんて無いし……」

紙に書いた地図を睨みながらガリガリと頭をかく。

既に何処も彼処も戦力はギリギリである。他所から抜けばそこが瓦解してしまうだろう。しかし、かと言って数千の増援など無視できる筈もない。なんとかして防がないとゲームオーバーだろう。悲しいけどコンテニューはできない。

「あの、何か良い案とかない？」

「……これは難しいです」

少女も自分と似たり寄つたりの表情で頭を悩ませている。

その間にも目まぐるしく状況は変化して、傍らのスピーカーからは危地を知らせる便りが幾つか舞い込んできた。凄く焦らされる状況だ。もし一度でも現場を目にしていたのなら平静ではいられないと思う。

「ああ、そうだ、こういうのはどう？」

「なんですか？」

「空を飛べる竜なり鳥なりに魔法を使える者に乗せて、頭上から撃つては逃げ、撃つては逃げを延々と繰り返すの。なんというか、空から火の玉なり何なりを雨と降らせるような感覚で」

イメージとしては元の世界の爆撃機である。

「それは過去に我々も行ったことがあります」

「そうなの？」

「はい、それだとあまり長くは持たず、最後は相手の数に負けて、わらわらと集られてしまうのです。我々が出した結論としては、空を飛ぶものは空を飛ぶものとして、魔法を使うものは魔法を使うものとして、それぞれ別々に戦った方が効率が良いということでした」

「いや、だから、相手に集られないように常に勢い良く飛び続けて、一度魔法を降らせた場所には当分寄り付かないようにするんだよ。空を飛ぶのはこっちの方が早いし得意なんですよ？ それだったら長所を生かすべきだと思っただけど」

「街の上空を循環して魔法を降らせるのですか？」

「それだけでも結構と違うと思うんだけど、今までやったことってある？」

「いえ、それはありません」

「じゃあ試しにやって貰ってもいい？ たまに来る空からの攻撃にも備えておかないといけないから、多少はプレッシャーを与えられと思う。こちらとしては大して労力を割く必要もないし」

「分かりました。しかし、それと南門とはどういった関係があるのですか？」

「そうして攻撃を与えた場所から、逐次少しずつ戦力を南門へ送って貰おう。この丸がついた部分から数人ずつ集めれば、三、四十は集まるよね？ それでなんとか持ちこたえて貰いたいんだけど」

「はい、ではそうして指示を出します」

「もう時間がないみたいだから、これに限り最優先でお願い」

「分かりました」

少女にお願いをしてから、手元の紙に今に語ったとおりのメモを付け加える。果たしてそれが戦場と上手く対応しているのか。素人の自分には皆目検討もつかない。けれど、こうして今も皆々耐えてくれているので、きつと当たっているのだと信じておく。

『姫様、医務室に治療の済んだ者が幾らかおりますので送ってください』

「分かった、すぐに向かわせます」

『正門で負傷者が出ましたっ！ 姫様っ！ お願いしますっ！』

「はい、そちらへもすぐに向かわせます」

時折、スピーカーから届けられる要求に答えながら、少女は忙しそうに仲間へ指示を送る。それぞれのトランシーバーを持ち替えながら忙しなく動いている。

この国での彼女の支持は絶対にあつて、誰も疑問を持つことなく盲目的に命令に従う。元より玉碎必至の抵抗なので、どんな危険な命令であっても誰も文句など言わないのだとスピーカーの向こう側の者達は自ら言う。

そんな具合に争いは進んでいった。

状況はこちらの不利に違いない。けれど、段々と街内での循環が働き始めた為か、化け物達は本来の勢いを取り戻し始めていた。無尽蔵とも思える相手の戦力を前にしても、決して諦めない化け物達の根性が今まさに実を結んでいるように思えた。

当初、広大な街を背景に十倍以上の兵員差を与えられながら籠城するなど自分も無理だと思っていた。けれど、彼等の語る一騎当千の語りは決して嘘ではなかった。特に図体の大きな竜など、文字通り一度に千人近い人間を相手に立ち回りしている者も決して少なくはなかった。

そして、そんな彼等が前線で戦っているのだから、ちっぽけな自分にはお鉢など回って来る筈もない。せめて自分にできることをしよう、城の塔の上で少女の手伝いを続けるのだった。

玉碎覚悟で飛び出そうとしていた少女も、今は無線機を片手に必死になって皆の援護に回っている。その必死な姿を眺めていると、何とかしてあげたいと強く思う気持ちが自然と溢れてきた。スピーカー

カーから届く彼女の仲間達の熱い咆哮と、それに答える彼女の凜とした声とが、本来、門外漢である俺の感情を大きく高ぶらせていた。心臓はドクドクと激しく脈打っている。こんな気持ちになったのは生まれて始めてのことだと思ふ。

やがて、もう小一時間が経過した頃には少女の努力が実を結び始める。

「姫様っ！ 北門付近の人間共は粗方倒しましたぜっ！」

「姫様っ！ 逃げ遅れた女子供の避難も終わりましたっ！」

「姫様っ！ 西の崩された外壁の修理が終わりました、まだまだいけますっ！」

誰も彼もが姫様、姫様と声をかけてくる。

奇襲を受けて一時は絶望的に思えた。依然として攻め入る人間の数は終わりが見えない。結界とやらも大きさは然程の変化も見られない。けれど、多少なりとも体制の建て直しが始まっていた。

その元気な様子に少女は笑みを浮かべて声も大きく言葉を返す。

「皆っ！ 我々は決して負けていませんっ！ 頑張ってくださいっ！」

ともすれば、今まで以上に強烈な化け物達の熱意がスピーカーの向こうから返された。うおおおお、だとか、どぎゃーす、だとか、声にならない獣じみた叫びも多く混じっている。それら強烈な応答を耳にして自然と少女の顔にも笑みが戻っていた。

夜の闇に混じって、その頬にキラリ光るものが見えたのはきつと嘘じゃない。

「この調子で人間共を追い返すのですっ！ 我々の国を守るのですっ！」

一際、大きな声で少女が吼える。

既に争いが始まってから数時間が経過している。交代要員など皆無なのだから、誰も彼も相当疲労やストレスが溜まっているに違いない。しかし、それでも化け物達の答える声に曇りは見られなかった。

『お前等っ！ 姫様が我々を鼓舞してくださるっ！ 進めっ！ 進めえっ！』

『人間共を追い返せっ！ 姫様には指一本たりとも触れさせるなっ！』

『結界の修復を急げっ！ 何があっても姫様の城には敵を近づけなっ！』

『殺せっ！ 殺せっ！ 殺せえっ！ 人間共を殺し尽くせええええっ！』

『今こそ姫様に報いるときじゃっ！ 絶対にここを守りきるのじゃっ！』

『いけるっ！ いけるぞおっ！ これなら人間共に勝てるぞおっ！』

恐ろしくもある応答に、流石は人外魔境の化け物達だと思わず喉が鳴る。

この調子ならもしかしたら追い返せるのではないか。そんな希望が自身にも垣間見えた瞬間だった。非常に頼もしい彼女の仲間達の声に、後方で祈るしかない自分もまた、力強く勇気づけられた気がした。

第三話（後書き）

誤字脱字はご容赦ください。

第四話（前書き）

誤字脱字はご容赦ください。

第四話

化け物達は当初の苦戦をものともせず、段々と勢いを巻き返していった。人間を遙かに凌駕する身体能力を持つて、数で勝る敵軍を段々と追いやつていった。その事実にも誰も彼もが狂喜乱舞し始めていた。

そんな味方達の防戦に段々と勢いがつき始めた頃合のことである。

空も白み始めた頃に齎された伝令が全てを一変させた。

『姫様っ！ 大変です、人間の援軍がやってきましたっ！』

上空を旋回する鳥人の声がスピーカー越しに響き渡った。彼と思しき声は開戦当初から延々と耳にしているので、自分もだいたい判断がつくようになってきている。それが今までで一番の焦りを伴って、声も大きく伝えてきたのだ。

「またですかっ！？ 今度は何処にどれくらいの規模ですかっ！？」

『そ、それが……』

「どうしました？ テオ、早く答えてください」

『敵の本陣の後ろの方から、か、数えきれない明りが近づいてきますっ！』

「なっ……」

敵の本陣とは街の正面に数キロ離れて設けられた人間達のキャンブである。その更に後方と言うのなら、それは元より街を襲っていた者達とは異なる。恐らくは本国からの援軍に違いない。

「ちよ、ちよっと、敵の国ってそんな近くにあるのっ!？」

「いえ、少なくとも人の足で歩いては数週を必要とする筈ですっ！」

「それじゃあ、なんだってこんなタイミングで援軍とか……」

「後発隊が追いついたのでしょうか」

「ああ、このまま上手く捌ききれなかったのに……」

寝ずの番でズキズキと痛む頭を抱えて唸り声を上げる。きっと目の下には大きくまがでできていることだろう。加えて言うなら食事はおろか水でさえここ数時間は口にしていない。肉体的にも精神的にも限界が来ていた。口の中は乾いた唾液で粘っている。

「敵の数は、どの程度か分かりませんか？」

『まだ遠くてハッキリしませんが、少なくとも十数万はいるかと思われます』

続けられた報告に眩暈がした。

「マジかよ……」

幾ら段々と盛り返し始めているとは言え、再びその数をぶつけら

れては耐えられるかどうか。大雑把に数えても今まで戦ってきた本隊が倍に膨れ上がることになる。

対してこちらは既に数時間を戦って誰も彼もが疲労困憊。恐らくは気力のみで立っている者も少なくないだろう。戦場で人間を食べない連中に関しては、食事や水だって摂れていないだろう。そう考えるとこちらは増援が来ても来なくても、あと何時間持つか分からない状態にある。

「人間、私達はどうしたら……」

少女もまた返す言葉が見つからないのか、深刻な表情でこちらを見つめてくる。

きっと、スピーカーの向こう側で戦う誰も彼もは、姫様がなんとかしてくれるのではないかと期待しているに違いない。そんな仲間の信頼を胸に抱く彼女の心境は如何程だろうか。あまり想像したくないものではない。

「こ、この期に及んで援軍なんて、これはもう……」

無理なんじゃないか。

そう洩らしそうになった。

「……人間？」

いや、しかし、今ここで自分が折れてしまつては彼女に申し訳が立たない。散々引つ張りまわしておいて、やっぱり無理ですごめんさい、などとは口が裂けても言えない。そんな雰囲気だった。

「あれだ、ほら……、この城って、どれだけ詰め込める？」

「それは今を戦っている者達を指しての話ですか？」

「うん」

もう街は諦めるしかないだろう。

「誰だけの仲間が残っているかは知れませんが、恐らく皆を向かえることは問題ありません。戦に際して身体を本来の大きさにしている者も、ヴラドのように身の丈を変えることができますから」

「じゃあ、皆を城に撤退させてくれないかな……」

「人間、それは城に籠るといふことですか？」

「悪いけど、もう他に手は思い浮かばないよ」

「し、しかし、それでは街が……」

「だけど、仲間を見殺しになんてできないでしょ？ 城に籠れば結界で少しの間は堪えることができるし、その間に何か良い策が見つかるかもしれない。食糧だったら俺が頑張って運ぶから」

「……………」

今にも泣き出しそうな表情の少女が悲しかった。

「それか、せめて結界が生き残っている三分の一まで下がらせてよ。」

とにかく一度は皆を休ませないと、とてもじゃないけど身体が持たないだろ？ もう何時間もずっと休みなしで戦ってるんだから」

「ですが……」

「決して諦める訳じゃないんだから、とにかく、一度体制を立て直そう。皆で集まって今後を話し合うのだって悪くないじゃない。少なくとも、このまま戦い続けるよりは長続きする筈だから」

「……………」

負け戦なら潔く戦って散るべきである。

そんな第二次大戦中の旧日本軍を思わせる特攻精神が、少女やその仲間達には強く感じられる。けれど、自分からしてみれば正義は生きることには他ならない。死ぬことは絶対悪である。最後の最後まで卑怯でも足掻くべきだと思う。それに、もしかしたらそれが未だ見えぬ勝利に繋がるかもしれない。

「……………駄目？」

とは言え、世界が違えば思想も違う。何処かのエルフにも偉そうなことを語った手前、彼女達に無理強いはできなくて、最後は下手に出てしまうのが小心者の自分である。伺いを立てるように少女の顔を見つめる。

そんな俺の問い掛けを前に、彼女は無言のままジッと床を見つめていた。

今こうしている間にも大軍は近づいてきている。身を引くなら早

いほづがいい。どうする、どうするの、やっぱり駄目なの、そんな言葉を心中で繰り返しながら、焦る気持ちを抑えるのに必死だった。

「……分かりました」

「ど、どうする？」

「一度、皆を結界の内側へ召集します」

「……ありがとう」

そうして心を決めてくれた少女の顔は、正直、見れたものでなかった。彼女の決心が鈍らぬよう、俺はすぐさま無線端末を彼女に押し付ける。そして、前線で戦う仲間の下へ必死の呼びかけが始まった。

少女が語ったとおり、始めは誰も彼もそれを良しとはしなかった。姫様の為にこの命捧げる所存です、といった具合に、更なる奮迅を見せる者多々であった。説得には随分な労力を要した。全ては作戦の内だと、そう彼女が繰り返すことで何とか皆の理解を得るに至った。全体の支持を得るには随分な時間をかけてしまった。

少女の召集命令が隔々まで行き渡ると、街の外壁をバリケードに戦っていた化け物達が残る三分の一の結果へと集結していく。そして、それを好機と見たのか人間達が勢いづいてゆく。今まで味方が命を削ってまで守り通してきた街の幾らかは、瞬く間に人間の手に落ちてしまった。

その後、全員が結果の内部へと逃げ込んだのは、少女の決定から小一時間が過ぎてからのことであった。撤退に際しても背を討たれ

る者が幾らかあつて、元より個体数の少ない本国においては、決して小さい被害でなかった。

撤退を終えてからはてんやわんやの大騒ぎである。怪我人は優先して城の医務室へと運ばれた。食糧庫からなけなしの食糧が放たれて、戦いに参加できない者達が用意していた食事を手の空いた者達から順次摂ることとなった。争いで失われた武器の配給も即座に開始された。城中が野戦病院にでもなつてしまった風だった。

そして、城の会議室には少女を筆頭に化け物の代表達が集まっていた。

あれやこれやと散々口を出した身の上にあるので、少女に言われて自分もまたその席に腰を置いている。皆が困う長机の一端にあつて、上座だろう部屋の最奥に腰掛けた少女の隣である。

「皆、良く今まで頑張ってくれました」

意を決した様子で少女が口を開いた。

その沈痛な面持ちから、集まつた誰も彼もは彼女の心情を理解したのだろう。それ以降、幾ら待つても続けられることのない彼女の語りから、他の化け物達がおもむろに口を開く。それは驚いたことに平素からの調子だ。

「姫様、我々はまだまだ戦えます」

「最後まで諦めず、この国の為に戦いましょう」

「結界だって、まだ三分の一も残っているではありませんか」

そうして語る化け物達の誰も彼もは少なからず怪我を負い血を流していた。刀傷があったり、皮膚が焼け焦げていたり、眼球が潰れていたり、矢が刺さっていたり、程度の差はあれど無傷なのは自分と少女だけだった。けれど、それを寸毫でも気にする者は、この場に誰もいない。

部屋の床には毛の長い値の張りそうな絨毯が敷かれている。しかし、その艶やかな毛並みも虚しく毛先は赤黒く濡れて力失い垂れ下がっていた。そんな様子を目の当たりにしてしまつと、どうにも居た堪れない気分になる。自分は門外漢なのだと強く感じた。

「……皆、まだ、私と一緒に戦つてくれますか？」

少女の語りかけに化け物達は間髪置かず答える。

「当然ですっ！ このまま尻尾を巻いて逃げ出すなどできませんっ！」

「この国は我々の宝ですっ！ 今戦わずしていつ戦うというのですかっ！」

「そのとおりですっ！ 元より身を引くつもりなど毛頭ありませんっ！」

「力ある限り、最後まで足掻いて見せましょうぞっ！」

既に負け戦が決まっているにも関わらず、化け物達の勢いは失われていなかった。どうしてここまで頑張れるのか、自分には理解できなかつた。ただ、ここまで全員が一丸となつてことに当たれる化

け物達の姿が、少し羨ましくもあった。

「ありがとうございます。皆の力強い心意気、たしかに受け取りました」

少女が恭しく頭を垂れる。

長い金髪がさらりと流れる姿はとても美しく、これがあと数刻で失われてしまうのだと思うと、なんだか堪らない気持ちになった。トカゲの言葉じゃないが、なんとかしなければいけない衝動に駆られる。

けれど、俺はただの人間だった。

「それと皆に伝えておきたい。この度、今まであったとおり一度でも戦況を盛り返すことができたのは、皆の尽力も然ることながら、この人間の働きがあったからに他なりません。今一度、この者に感謝の言葉を送っては貰えませんか？」

「え？」

続けて語られた言葉に思わず少女を振り返る。

すると、彼女はとても柔らかい笑みを浮かべてこちらを見つめていた。深い蒼色の瞳がスツと細められて、優しく俺を見つめている。とても穏やかな、どこか温かみのある表情であった。

思わず胸がドキンと高鳴る。

「ああ、人間、お前は本当に良くやってくれたっ！」

「あの変な機械のおかげで随分と頑張る事ができた」

「姫様の声を聞きながら戦えるなんて、本当、最高だったぜっ！」

「そうだな、おかげで被害も最小限に食い留めることができた」

「今、仲間が飯を食べるのもお前のおかげだしなっ！ 人間っ！」

そんな俺の心中を知ってか知らずか、次々と上がる異形からの賞賛。

なんと答えたら良いのか分からなくて、自然とその視線は少女へと移っていた。すると、彼女は救いの手を差し伸べるように言葉を続ける。それは戦局が開かれる直前に彼女が語っていた話である。

「だが、これ以上この者を巻き込むことは叶いません。この者はこの世界の人間ではないのです。そして、これから先は我々の戦いなのです、我々だけで戦うべきなのです。他所の世界の者にこれ以上の迷惑はかけられません」

「ちょ、ちょっと、でもまだ君達は……」

勝手に進められていく話に俺は明確な意思を返せない。

死ぬのは怖いから、元の世界へ帰りたくもあるのだ。万が一に際しては姿見へ逃げ込む算段でもいる。そして、そんな甘い覚悟では次の波は超えられないのだと、少女の語りが暗に俺に言い聞かせているように感じられた。

「人間、今までありがとうございました。国の民を代表して感謝を送りたい」

「あ、いや、でも……」

再び頭を垂れる少女に、俺は返す言葉がなかった。

「ヴラド、この者を鏡の間へ送って行ってください」

「は、はい……、分かりました、姫様」

ここまで大々的に言われてしまつては、トカゲも自らの企みを諦めざるを得ないのだろう。素直に頷いて俺の側までやって来た。その顔を見上げると、彼もまた何処か覚悟を決めて見えた。

「人間、私について来るといい」

トカゲの手が俺の肩に伸びる。

「ちょ、ちょっと待ってくれよっ！」

なんだか、少女の言葉が凄く苦しかった。

たしかに死にたくない。凄く死にたくない。危険なのは嫌だ。

けれど、この状況で家に帰って俺は何をすればいいのか。

凄く悶々とした気分を抱えることは間違いない。帰ってから一週間は鏡の向こうが気になって気になって仕方ないだろう。何も手につかないに違いない。一ヶ月経っても鏡を眺めない日はないだろう

う。こちらの世界を想いながら日々悶々と暮らす自らの姿が勝手に想像された。そして、一年経っても、十年経っても、きっと、幾ら歳を重ねても、この一週間とその終わりは、絶対に忘れることのできない永遠の記憶となるだろう。

それは、なんだか、凄く嫌だった。

「人間、これ以上の手出しは無用だ。今のうちに元の世界へ帰るといい」

「か、帰る、帰るから……、けど、その前に俺だって何かしておきたいっ！」

叫ぶように言い放つ。

色々と矛盾しているのは自分でも良く理解している。

「君等も何もしないまま死ぬとか言われたら嫌だろう？ だったら、どうせ負けるんだつたら、なあ、最後まで派手に行きたいだろう？ 俺に案があるから、あと少しくらい一緒に居させてくれよっ！」

ふと思いついたのはいつだか教室で聞いたゲームの話。

でも、属性反射って敵しか使えない技じゃねえの？

ゲームの世界はどうだか知らないけれど、この世界に限れば別に全てが敵にしか使えない訳でもない。自分達は今まで延々と耐え忍んできたけれど、それだって誰に言われたわけでも無い。ただ、そうしなければなるまいという既成観念から生まれての行為だっただろう。

「……案だと？」

トカゲが俺の顔を覗き込むようにして問う。

そんな彼の姿を傍らにおいて、俺は化け物達を前に言葉を続けるのだった。

「皆、覚悟は良いですね？」

少女の言葉に彼女を頂点とする化け物達の神輿が咆哮を上げる。幾百、幾千という化け物が城前の広場へ一堂に介した様子は圧巻だ。巨大な身体の竜から人間と大差ない姿の猫人まで、多種多様な化け物達はその場に集まっていた。

「これより我々は人間の軍へ向けて攻めて出ますっ！ 今まで守ることしかできなかつた我々の、その内に滾る最後の意地を人間共へ喰らわせてやるのですっ！ 人間という存在が如何に脆弱なものか、思い知らせてやるのですっ！」

今まで聞いた中でも一番の演説が少女の口から放たれる。

そして、それに応じる獣達の叫び声と言ったら、耳を押さえても頭が痛むほどに強烈なものだった。あまりの音量に地面が揺れている。拡声器も使っていないのに、腹へビンビンと響く。生き物の生の声だった。

「それでは、いざっ！ 人間の軍を滅ぼしに行くのですっ！」

少女の掛け声に応じて国民全てから成る大戦隊が動き始めた。

城とその周辺を囲う結界が解かれ化け物の軍団が勢い良く走り出す。激しい地響きが始まる。人間を遙かに超える脚力を持って、壮大な土埃を上げる異形達が放つ最後の進撃が始まったのだった。

それを陣営の中央に位置する竜の背中から見つめるのが少女だ。

「人間、貴方は本当にこれで良かったのですか？」

その隣には俺が座らせて貰っている。

「いや、なんかもう、ここまで来たら最後まで居たいし……」

姿見は城に置いてきた。

「しかし、貴方はこの世界の人間ではないのですよ？」

「いや、ほら、俺は人間だから、きっと大丈夫だよ」

「この戦乱で貴方のような貧弱な人間が生き残れると思いますか？」

「ま、まあ……、そのときはそのときだよ」

どうしてこんな場所でこんなことをしているのか。自分が自分で分らない。けれど、そういう気分なのだから仕方がない。多分、少女達の熱気に当てられて、色々と馬鹿になってしまったのだ。そうに違いない。そうじゃないと臆病な自分への言い訳が立たない。

「しかし……」

「ほら、それより、そろそろ始まるみたいだよ、君達の戦いが」

「っ……」

向かう先を指差して少女に言う。

「君がちゃんと指示をしないと駄目だろ」

「そ、そうですね……」

そこでは先陣を切って突き進む化け物達が、人間の本陣へと突っ込む姿がある。

「この身が朽ちるまで、やれる限りをやりましょうっ！」

鼓膜を劈く人間達の悲鳴が戦いの火蓋を切って落とした。

竜が、狼が、巨人が、なんだかよく分らない生き物達が、次々人間の壁を突き破って奥へ奥へと侵入していく。まるで陸に迫る津波のようだった。次々と周囲を巻き込んで進む肉の波に進行方向にある一切合財が飲み込まれていく。

街を守っているだけでは何うことのできない、化け物としての本領発揮であった。凶暴な本性であった。人間を殺せと叫びながら進んでいく、その巨漢が真っ赤に染まる姿は圧巻であった。

これがいつまで続くかは分らない、ただ、叶うならこの延々と続く肉の壁を打ち抜いてくれることを祈る。そして、俺は少女と共に傍らに積んだ無線機を持ち皆の援護に尽くすのだった。それが自分が彼らにできる精一杯である。

叫んで、吼えて、鳴いて、そんな彼らに囲まれていると、まるで自分もまた化け物になってしまったような、そんな危うい錯覚を覚えた。多分、この感触は向こうの世界においては絶対に味わえない、純然たる興奮に違いなかった

そして、やがては僅かに残っていた保身さえ忘れて、彼等と一丸となり、ただ只管に前を目指し始めるのである。元の世界の人間が目の当たりとすれば、若しくは狂っていると評するかも知れない。けれど、それはそれで構わないと思えるような、興奮があった。

まるで酒にでも酔ってしまったようだった。

第四話（後書き）

誤字脱字はご容赦ください。

エピソード（前書き）

誤字脱字はご容赦ください。

エピソード

気づいたとき、俺は気を失い地面に寝転がっていた。

硬い大地に背中を預ける感触に目を覚ました。己が身を転がしていることを理解して、慌てて上半身を起こす。キョロキョロと辺りを伺えば、そこは何処とも知れない荒野だった。そして、周囲には人間の死体が山と詰まれている。

「こ、これって、どうなったんだ……」

空飛ぶ竜の背中に乗って少女と共にいた記憶はある。

何故に地に伏していたのかと言えば、不意に竜の鼻先で爆ぜた火の玉に煽られて、その背から振り落とされたからだ。

「……………」

果たして、今はどういう状況にあるのだろうか。周囲には人間の死体しか見られない。味方の化け物は何処へ消えてしまったのだろうか。そして、少女達は何処へ消えてしまったのだろうか。自分が気を失っている間に何があったのだろうか。

ゆっくりと立ち上がる。

軽く身体を動かしてみたが、小さな擦り傷の他に怪我らしい怪我は見つけられない。おかげで歩く分には支障もなかった。しかし、どちらへ向かって進めば良いのか。周囲は何もない荒野である。人

間達の屍を除けば、あとは乾いた大地に痩せた樹木と背の低い植物がところどころ自生している以外に何も無い。

「……どうしよう」

何も行動の指針になるものがなくて焦りを覚えた。

ふらふらと付近を歩き回ってみるけれど、何もそれらしいものは見当たらない。たまに人間の死体に混じって化け物の姿も目には入る。けれど、無念、全ては事切れたあとであった。

「……………」

まさかの迷子だった。

デパートで迷ったのとは訳が違う。

このままでは野垂れ死に、そんな迷子だった。

「……おいおい、マジかよ」

今更ながら人間の死体を前にして自らの死に恐怖が広がっていく。

ジツとしていられなくて、自然と足は走り出していた。人間の死体を追って行けば、何れは誰かに会えるのではないか。そんな淡い希望を抱いたからである。死体の続く方角へ向かって、がむしゃらに走り始めた。

ともすれば、走り始めてからしばらくすると遠方に動く影を見つけた。

この際、人間でも化け物でも良いからと考えて駆け足で近づく。

「おーいっ!」

すると、こちらの声に応えて影がこちらへと注意を向けた。逆光にあってその姿は詳しく伺えない。ただ、相手は人の姿を象って思えた。ああ、しくったかなあ、などと考えつつ、いきなり逃げ出すのもおかしいので、多少だけ勢いを落として歩み寄る。

「に、人間っ!」

すると、そこに居たのは食料品の調達に付き合ってもらった銀髪エルフだった。彼女はこちらを認めて驚愕の声を上げる。片手には剣を携えて、肩口より血を流す半身を庇うように立っていた。満身創痕を絵に描いたような姿である。

「っつて、ええっ!?!」

ただ、より驚いたのは俺の方だった。

彼女の正面には武器を手にした人間が数名、彼女に襲い掛からんとしていたからだ。俺に気づいた人間は早々に何を言うでも無く手招きをして、地面に転がる誰の者とも知れない剣を蹴り飛ばしてきた。彼女を倒すのを手伝えという魂胆だろう。人間の側も決して無傷とは言えず、彼女とどっこいどっこいの悲惨な有様だ。

やはり化け物は負けてしまったのか……。

地を滑ってきた剣の柄が足に当たって止まる。

「人間っ！ 貴様っ……」

銀髪エルフが俺を睨みつけてきた。

果たして、俺はどうすればいいのか。

そうこうしている内に人間の一人が彼女に向かって剣を振り上げ駆け出した。銀髪エルフと言えば、剣こそ携えているが全身血塗れで非常に頼りない。押せば転けてしまいそんな儂さがあつた。

だから、その姿を目の当たりとしたとき、何を考えるでもなく身体は既に動いていた。

人間が蹴つて寄越した剣を手取る。初めて握る真剣は想像以上に重くて、振り回すことなんてとても叶いそうにない。けれど、決して持ち上げられない重量ではない。オーガの斧に比べれば爪楊枝みたいなものだ。

それを手にして、俺は銀髪エルフの下へと駆け出した。

「こ、このおおおおっ！」

切っ先を正面に突き出すよう力一杯に剣を構える。

そして、握る一振りを彼女に迫る人間の腹へ思い切り突き刺したのだった。

「なっ……」

刺された人間の顔が驚愕に歪む。刺された男の仲間もまた信じられないものを見るような目で俺を見つめていた。一瞬だけ場の空気が制止して思えた。けれど、それも僅かな間である。次の瞬間、銀髪の指先より放たれた巨大な火の玉が、驚きに染まる人間達を包み込んだ。

「ぬおおおおっ!?!」

「ぐおおおおおっ!」

「びああああああっ!」

耳を突くような断末魔が上がる。

轟々と激しく火花を散らす火球は人間達の身体を遠慮なく燃やしていった。十数メートルを離れても肌を焼くような熱を感じる。とんでもない高温の火の玉だった。地面も焦げて黒く色を変えている。

その光景を俺は呆然と眺めるしかなかった。

カランと手にした剣も取り落としてしまう。

やがて、しばらく経つと火の勢いは自然と落ち着き始めて、やがては萎んで消えてしまった。後に残ったのは黒い色をした灰らしき僅かな燃えかすのみである。火葬場よりも尚熱い火であつたらしい。

「おい、人間……」

啞然としている俺の耳に銀髪の声が飛び込んできた。

「え、あ、な、何？」

「お前っ！ 今まで何処に居たんだっ！？」

見れば彼女が鬼のような形相でこちらを見つめていた。

「いや、何処つて、そこいらで気を失っていたけど……」

「城じゃあ、お前の死体が見つからないって大騒ぎだっ！ 早く来
いっ！」

「えっ！？ な、なんの話っ！？」

「だから、勝ったんだよっ！」

「勝った？ え？ 勝ったって何に勝ったんだよ？」

「そんなの人間に決まってるだろっ！？ 今更何を言ってるんだよ
っ！ ほら、お前の死体が見つからないせいで、疲れた身体を休ま
せる暇もなく私達は総出で探し物だ。生きてるんだったらとつと
顔を見せろっ！」

そうして彼女は俺の顔を無理矢理に掻き抱くのだった。

「ちょ、ちょっと、待って、苦しいっ！」

「姫様っ！ 人間を見つけましたっ！ 南東の戦場近くですっ！」

彼女は手にしたトランシーバーへと語りかける。ともすれば、こ
こ一週間で聞きなれた声が間髪置かずに返された。

『分かりました、すぐに向かいます』

「はい、お願いします」

淡々と答える彼女。その抱擁から何とか身体を捻って抜け出す。裸に胸の無い、良く言えばスレンダー、悪く言えば幼児体系な彼女なので、顔は何に引っかけられるでもなく胸中より引き抜くことができた。

「ちょ、ちょっと、勝ったってどういうことだよっ!?!」

「そんなもの言葉通りの意味に決まっているだろう?」

「いや、言葉通りって、そんな、まさか……」

「素直に喜べないのか? やはり、人間、貴様は人間の味方だったのか?」

「ち、違っつて、少なくともこの世界じゃあ君達の味方だっ!」

「ならば、今はそれで良いではないか」

最後に分かれたときと同様、彼女の言葉は酷く素っ気ない。しかし、その言葉の端々からは溢れ出る喜びが感じられた。そんな彼女の姿を目の当たりにすれば、決して嘘を言っている風には見えなかった。

「けど、でも、どうして……」

「ああ、人間共の援軍が禄に武装してなかったんだよ」

「武装を？」

「ああ、姫様の話だと、何でも主に兵糧の補給と制圧後の為の大隊だったらしい。私自身も戦った感じ、禄に魔法も使えない烏合の衆に思えた。おかげで、人数こそ増えたものの、何とか打倒することができた」

「な、なるほど……」

「あとは我々の威勢の良さに恐れをなして逃げ出したってところだろうなっ！」

「まあ、たしかに、そういうことなら分らないでもないか……」

納得して彼女の言葉に頷く。

「お前は早々にやられてしまったから、その辺りは知らないのだろうがな」

「あ、ああ、初耳だよ……。今更だけど」

しかし、破れかぶれの特攻が功を奏するとは思わなかった。

なんだか肩の荷が下りた気がして、思わずその場にへなへなと座り込んでしまう。幾ら守るより攻めるほうが楽だとは言え、数で十倍以上の敵をよくもまあ打倒できたものだとは放心のなか静かに思った。

「お、おい、大丈夫か？」

「ああ、いや、気が抜けたただけだから気にしないで」

「なんだ、だらしない奴だな……」

口を尖らせて銀髪が避難の声を上げる。

しかし、そうは言われても今までずっと気を張り詰めていたのだから、今一時くらい安堵に浸らせて欲しい。学校の試験明けでもここまで強烈な開放感を味わったことは経験はない。

「おい、姫様が直々に来て下さったぞ」

「え？」

彼女の声に顔を上げる。

すると、そこには巨大な竜が迫っていた。

「おお……」

何度見ても慣れない巨体を前に思わず息を飲む。

瞬く間に距離を詰めた竜は、こちらのすぐ近くに身を下ろした。そして、俺の姿を目の当たりとして驚愕に瞳を見開いた。まさか、竜の驚く顔を見る日が来るとは思わなかった。大きく開かれた口は俺の身の丈よりも巨大だ。

「い、生きていたのかっ！？ 人間っ！」

耳に届いた竜の声は、どこか聞き覚えのあるものだ。

そして、その背から飛び降りた少女もまた俺を見つけて叫びを上げる。

「人間っ！ 無事だったのですかっ!？」

「いや、まあ、おかげさまで生きてました……」

自分でも運が良かったのだと思う。

「よ、良かった、まさか、まさか生きてるとは思いませんでした……」

少女の顔が涙に歪む。

まさか、自分の為に泣いてくれる人が、化け物がいるなんて思わなかった。

少女は駆け足でこちらへと近づいてくる。

そして、何を思ったのか地を蹴る彼女は、勢い良く俺に抱き付いてきたのだった。腰下まで伸びる黄金色の髪が勢いに乗って身体に絡み付いてくる。なんだか、甘い、良い香りが鼻先に漂って感じた。

「ちよ、君っ!？」

「よかった、本当に良かったです。我々だけが生き延びて、人間、貴方を死なせてしまうような不義理な真似をせずに済みました。本

当に、本当に良かった。生きていてくれて、ありがとうございます」

「あ、は、はい……」

生まれて初めて感じる異性の体温は、それはとても心温まるものだった。

翌日、月曜日は中学校の卒業式だった。

朝登校すると教室には生徒の大半が既にいた。普段ならば始業ギリギリまで登校して来ない奴まで顔を揃えている。僅かに足りない人間はこのクラスでも極めて目立たない存在である。

「おはよう」

誰に言うでもなく呟いて教室に入る。

自分の机の上へと鞆を置く。今日は式以外に何もなければ中身は筆記用具以外に何も入っていない。卒業証書を持ち帰る為だけに持ってきたのだった。おかげで登校は非常に楽だった。

椅子を引こうと背凭れに手をかける。

すると、珍しくも阪部が自ら声をかけてきた。

「なあ、浩二、ちょっと話があるんだけどいいか？」

そちらを振り返ると、彼の後ろには彼と同じグループの友人達がニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべながら立っていた。その視線は間違いない俺に向けられている。いや、彼等だけではない。教室にいる誰も彼もが、表情はどうあれ俺に注目していた。まるでこれから大きな催しでも控えている風である。

「なんだ？ 何か用でもあるのか？ 阪部」

「お前つてさ、この中学三年間をクラスの連中にどう思われてたか知ってる？」

「……ん？ 何の話だ？」

楽しみに卒業アルバムに寄せ書きをしたり、携帯電話のカメラで記念撮影をしたり、卒業の喜びにはしゃいでいた教室の楽しげな雰囲気は彼の言葉で一変した。騒がしかった教室が急に静まりかえる。

「知ってた？ お前が今までどう思われてたか」

「だから、それって何の話だよ？」

もう全て知っている。

けれど、そんなものはどうでも良かった。

「ほら、あれだよ、お前ってさあ……、な？」

そうして語る阪部は凄くもったいぶった言い方をする。

「あれってなんだよ？」

「あれ？ まだ気づいてないの？ やっぱりお前ってば駄目だわ」

「……………」

教室中の誰も彼もが何かに期待した目で阪部と俺を見つめている。

けれど、俺がそれに答えてやる義理はない。いや、今までの三年間を付き合ってくれたという意味では少しくらいあるのかもしれない。けど、自分を殺してまで報いるものがあるかと言えば、そう、

それは、絶対に違う。

「言っておくけど、お前ってこの教室の全員から嫌われてたんだぜ」？

そして、阪部はとても楽しそうに語ってみせた。

楽しそうに持ち上がった口端が得意気な笑みを作る。

目元はニヤニヤと歪な光を燈して思えた。

きつと、何も知らないで今日を迎えていたら、俺はどうしようもないところまで追い詰められていただろう。何の覚悟も無いまま今日を迎えていたら、俺はよくないことを仕出かしていただろう。何

の経験も無く今日を迎えていたら、俺はこの世から居なくなっていたかもしれない。

だから、彼女達には感謝しなくてはならない。

阪部の言葉には何の感慨も浮かばなかった。

「……そっか、残念だよ」

ただ、純粹に、本心から、その一言で終えることができた。

たしかに俺は人に好かれ易い性格をしていない。自分勝手だし、我侷だし、良いところなんて血眼になって探さなければ見つからないだろう。いや、見つかつてても本当に瑣末なものだろう。というか、もしかしたら何も見つからないかもしれない。

けれど、それでも、努力を怠ったことはなかった。

なんとか周囲と上手くやろうと毎日を勤めてきた。

必死になって友達を作ろうと頭を悩ませた。

それでも阪部達や富川達と、クラスの者達と上手くいかなかったのは、きっと、何をやるまでもなく、環境や立場が合わなかったからなのだろう。それは些細な嗜好の不一致とか、活動時間のズレとか、金銭面での問題とか、パツと思いつくだけで様々な原因が思い当たる。そして、そんな瑣末な差異が、多分、今の俺の置かれた状況なのだろう。そう強く感じた。

人間、日本だけでも一億数千人が居るのだ。気の長い目で見れば、

きつと、いつかは一緒になって笑える相手ができる筈である。トカゲとか、猿人とか、訳の分らない化け物達とすら語らい合えたのだから、きつと、俺にだって友達ができると思う。

「っていうか、本当にお前ってウザイよな、いつか言おうと思ってたんだぜ」

「そうそう、俺達もマジで勘弁って感じ」

「高校行けばもうお前の顔見なくていいっしょ？ 清々しいよな」

阪部の友達達が何やら語りかけてくる。

今までの自分だったら思わずカツとして拳を握っていたかもしれない。負けじと罵詈雑言を返していたかもしれない。いや、間違いなくそうしていただろうと、確信を持って言える。

けど、それはそれで彼等の主張として正しことなのだ。

そして、それに俺が文句を言うのはお門違いというやつである。

「ごめん、悪かったね。でも、今日でもう卒業だし問題はないだろ？」

「……は？」

俺の言葉に阪部が驚いた顔をする。

その友人達も同様である。

「それでも努力したんだけど、まあ、縁がなかったってことだと思
うよ」

そう、別に何も悲観することなんてない。世の中広いんだ。こん
な小さな世界でいじけることは無い。ここで駄目なら別の場所へ行
って探せばいい。挫けて涙を流すのは、ああ、世界中を回ってから
でも遅くないのだから。

「な、なんだよ、強がりか？ ああ？」

「いや、別にそういう訳じゃないけど……」

「だったら何だってんだよ、おい、お前、なに言っちゃってんだよ
っ！」

それを俺はこの一週間で学ぶことができた。高々中学校の一学年
百数十人に嫌われたからといって、だからどうしたと言うもんだ。
いちいち気にしていたら身に持たない。だって、今の自分は他に数
十万、数百万、下手をしたら数千万の人間を敵に回した身の上にあ
るのだ。

「おい、浩二、調子こいてんじゃないぞ？」

「いや、別に調子こいてなんていないし、これと言って阪部達に腹
を立ててる訳でも、怨んでる訳でもないよ。むしろ、こんな自分と
三年間も付き合ってくれて感謝してる。無理してくれていたんだろ
う？」

そして、数多く敵を作った分だけ、逆に仲間と言えるような間柄
の存在もできたと思う。そう考えて思い浮かぶのは強面な化け物達

の面々だった。勿論、それもいつかは今の阪部達との間柄に同じく、ほんの些細なすれ違いから瓦解するかもしれない。けれど、だとしても、それで全てが終わってしまう訳ではないのだ。

「はあ？　なんだよそりゃ。俺を舐めてるのか？」

「いや、舐めてなんてないし、言葉とおりの意味だけど……」

ならば、この程度で立ち止まる必要があるだろうか。

それはむしろ自らの可能性を大きく失わせるに他ならないと言うのに。

「スカしたこと言っでんじゃねえよっ！」

目を鋭く吊り上げた阪部が俺の襟首を掴み上げる。

けれど、身長は俺の方が十数センチだけ高い。従って体重もそれに比例して彼より幾分だけある。相手は腕に力を入れて無理矢理に俺を持ち上げようとするけれど、幾ら頑張っても踵が上がることはない。ただ、腕がプルプルと震えるだけだ。

「悪いけど、中学校は今日で卒業なんだよ」

「んだとっ！？」

「もう子供じゃないんだから、下らない自尊心の為に自分の彼女の顔を殴ったりするなよ。可愛そうだろ？　この世にはもつと胸を張るべきことがあるだろう？　なんだか、こっして言っつと凄く偉そうで悪いけど……」

「は、はあっ!?　なんで俺が彼女の顔を殴らなきゃならないんだよっ!」

「いや、まあ、別に誰が殴ったのかは知らないんだけどさ……」

「てめえ、勝手なことやってんじゃねえよっ!　殴るぞコラアっ!」

段々と感情を波立たせては、ああでもないこうでもないと呼き始めた阪部の姿に教室が喧騒を取り戻す。けれど、当の本人は気づかずに俺へと食ってかかる。貶めようとした対象に諭されている自分が許せないのだろう。

怒りに任せて阪部の拳が振り上げられた。

ただ、あまり怖くはない。

昨晩までの出来事が人間として大切な機能を麻痺させているのだろう。一発でも殴られれば、決して無事では済まないと理解できる。下手をすれば歯を折ったり、鼻骨を砕かれたりするかもしれない。この身は屈強な化け物達とは違うのだ。

けれど、俺は妙に落ち着いた気持ちで迫る拳骨を眺めていた。

「この、生意気言ってるじゃねえよっ!」

やがて、ガツンと頬に固い感触が伝えられた。

頭部に与えられた大きな衝撃に身体が真後ろへ吹っ飛ぶ。

けれど、危ういところで足を踏ん張らせて身体を支える。ともすれば、多少だけ机を動かしただけで、床へ身を転がすことはなかった。顔には随分な痛みを感じるけれど、脇腹に鎌を喰らうよりは全然マシだった。

ふと思ひ浮かんだのは何故か猿の顔である。

「お前、理解してんの？ 皆に嫌われてるんだぜ？ なぁ？」

「してるよ、ちゃんと理解してる。けど、それだけだろ？」

「はぁ？ 何言ってるんだよ、お前、馬鹿？ 馬鹿なの？」

「ああ、まあ、ここ最近色々馬鹿だったかもしれない……」

「な、なんだよ、やっぱりお前、俺のこと馬鹿にしてるだろ？ おいっ……」

間髪置かずに阪部が俺に掴みかかってくる。

けれど、もう殴られることはなかった。

「こらっ！ こんな日に何をやってるっ！」

耳に届いたのはクラス担任の声だった。大凡、式へ生徒を呼びに来たのだろう。頬を赤く腫らし阪部に締め上げられた俺の姿を目の当たりとして、そろそろ初老を迎えようかという彼は駆け足で向かい来た。自然と眦は釣り上がり厳しい顔付きだ。

「お前等っ！ 何をやっているんだっ！ 殴ったのかっ！？ ええ

!？」

「あ、いや、ち、違うんです、俺は別に……」

その姿に阪部がうろたえる。まるで熱いものにでも触れたように、慌てて俺の襟首を掴んでいた手を放した。締め上げられていた首周りが開放されて、少しだけ居住まいが良くなる。ただ、シャツには皺が寄っていた。

「そろそろ、式ですか？」

「は？ あ？ いや、それはそうだが……、喧嘩か？ その頬はどうしたんだ？」

「いや、まかさ違いますよ、ちょっと調子に乗ってじゃれあってただけです」

「おい、間違ってもこんな日に騒ぎを起こすんじゃないぞ？」

「はい、分かっています」

「っ……」

阪部は何か言いたそうな顔をしている。けれど、口は固く結ばれたまま何を語ることもなかった。大人しく俺と担任とを交互に眺めて、その視線を教室の床へと落とすに限った。そして、それ以上は何をすることもなかった。

「ああ、それじゃあ、ほら、そろそろ入場だから教室の前へ並びなさい」

そうして担任の指示でクラスメイト達はそろそろと教室の外へと身を移していく。普段ならば教師が静かにしろだの、廊下では喋るなだの注意を入れるところだ。しかし、今日に限っては誰も何も語ることなく、神妙なまま列は成されるのだった。

その折、誰とも知れない声が俺の耳に小さく響く。

「やっぱり、あの写真って嘘だったんだね」

「……………え？」

慌てて声のした方を振り向いた。

けれど、そこには誰も居なくて、ただ、教室と廊下を分ける壁があった。

「……………」

驚いて立ち止まった俺の周りで、教師が指示する通りにクラスメイト達は決められた順序で列を作っていく。そんな彼等彼女等によって三年間を着古された制服達は、あちらこちらが痛んだり解れたりしていて、そこには重ねた時間重みが如実に感じられた。この三年間は確かに存在した時間なのだ。

そう、今日は中学校の卒業式だ。

エピソード（後書き）

誤字脱字はご容赦ください。

現在は主に「郁夫スペシャル！」と言うお話を作成しております。
もしもよろしければ、どうぞ、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1028t/>

金髪ロリお姫様ラノベ

2011年9月17日13時30分発行